

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
5

日吉谷遺跡

1994

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
5

日吉谷遺跡

1994

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団



日吉谷遺跡全景



ナイフ形石器

序 文

本書は、四国縦貫自動車道（徳島～脇間）の建設に伴い、平成元年度と平成2年度に実施した阿波郡阿波町に所在する日吉谷遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

本遺跡は阿讃山脈南麓に位置しており、旧石器から中世にいたる遺構が確認されましたが、特に旧石器時代のブロックの石器群は県内では初めて確認されたものであり、今後、本県における旧石器研究の基礎資料になりうるものと考えております。また、弥生時代の石器も豊富に出土しており、吉野川中流域の弥生文化を検討する上で重要な成果が得られたものと考えております。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施、報告書作成に当たり、日本道路公団をはじめ、関係諸機関並びに地元の皆様に多大の御協力、ご指導を頂きました。ここに深く感謝いたしますとともに、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成6年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 近 藤 通 弘

例 言

- 1 本書は平成元年(1989)度と平成2年(1990)度にかけて調査を実施した四国縦貫自動車道建設に伴う日吉谷遺跡(阿波郡阿波町所在)の調査報告書である。
- 2 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。

発掘調査期間	第1次調査	平成元年11月25日～平成2年3月24日	(本調査)
	第2次調査	平成2年9月17日～平成2年12月20日	(本調査)
基礎整理期間		平成3年4月1日～平成4年3月31日	
報告書作成期間		平成4年4月1日～平成5年3月31日	
- 3 発掘調査は徳島県と日本道路公団高松建設局の委託契約を受け、徳島県からの委託契約により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

凡例

S A	掘立柱建物跡・柵列	S D	溝	S P	柱穴
S B	竪穴住居	S K	土坑	S X	不明遺構

- 5 方位は国土座標第IV座標系の北、高さは東京湾標準潮位(T. P.)を表わす。
- 6 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠、竹原秀雄編『新版標準土色帖』1989年度版によった。
- 7 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
- 8 第4図の地形図は建設省国土地理院登録の1/25,000の地形図「脇町」、「西赤谷」を転載したものである。
- 9 調査に当たっては、次の機関の指導・協力を得た。

徳島県教育委員会	日本道路公団高松建設局	同徳島工事事務所	同脇町工事事務所
----------	-------------	----------	----------

徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所 阿波町

10 発掘調査、整理期間を通じて次の方々に御協力、御教示を得た。

絹川一徳 柴田昌兎

11 出土遺物の自然科学分析は、炭化材同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

12 本書の執筆はI-1を菅原康夫、III-3-(1)を原芳伸、その他を小泉信司が行い、小泉が編集した。遺物の写真撮影は島巡賢二、一部佐藤誠二が行った。

遺跡抄録

遺 跡 名	日吉谷遺跡
読 み	ひよしだに
所 在 地	阿波郡阿波町日吉谷26-1 他 X=119.600~119.720 Y=64.300~64.420
種 別	集落
時 代	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世
主 な 遺 構	旧石器ブロック 竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝
主 な 遺 物	旧石器・縄文土器・弥生土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器

本文目次

I	調査の経緯	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	6
(1)	調査の経過	6
(2)	発掘調査の方法	8
(3)	調査日誌抄（1次・2次）	8
II	遺跡の立地と環境	10
1	地理的環境	10
2	歴史的環境	10
III	調査の成果	13
1	層序	13
2	遺構と遺物	14
(1)	旧石器時代	17
(2)	縄文時代	38
	柱穴	38
	包含層出土遺物	38
(3)	弥生時代	41
	竪穴住居跡	41
	掘立柱建物跡	47
	土坑	71
	溝状遺構	103
	不明遺構	105
	柱穴出土遺物	119
	包含層出土遺物	131
(4)	古墳時代末～古代	187
	竪穴住居跡	188
	土坑	191
	包含層出土遺物	194
(5)	中世	197
	掘立柱建物跡	197
	柵列	208

土坑	211
柱穴出土遺物	216
包含層出土遺物	220
3 まとめ	225
(1) 日吉谷遺跡出土の旧石器石器群について	225
(2) 弥生土器の様相	235
4 自然科学的分析 バリノ・サーヴェイ株式会社	238
(1) 炭化材同定	238

挿図目次

第1図 四国縦貫自動車道(徳島～脇)路線図	3	第29図 SB1005出土遺物実測図	46
第2図 グリッド配置図	6	第30図 SA1001実測図	47
第3図 調査区位置図	7	第31図 SA1001出土遺物実測図	47
第4図 周辺の遺跡分布図	11	第32図 SA1002実測図	48
第5図 基本土層柱状図	15	第33図 SA1003実測図	48
第6図 旧石器土層断面図	19	第34図 SA1004実測図	49
第7図 旧石器遺物出土状況図・垂直分布図	21	第35図 SA1004出土遺物実測図	49
第8図 ナイフ形石器	23	第36図 SA1005実測図	50
第9図 スクレイパー	24	第37図 SA1006実測図	50
第10図 剥片(1)	26	第38図 SA1007実測図	51
第11図 剥片(2)	27	第39図 SA1008実測図	52
第12図 石核	28	第40図 SA1009実測図	52
第13図 ナイフ形石器(1)	30	第41図 SA1010実測図	53
第14図 ナイフ形石器(2)	31	第42図 SA1011実測図	53
第15図 スクレイパー	32	第43図 SA1012実測図	54
第16図 楔形石器	33	第44図 SA1013実測図	54
第17図 剥片(1)	34	第45図 SA1014実測図	55
第18図 剥片(2)	35	第46図 SA1015実測図	56
第19図 石核	36	第47図 SA1016実測図	57
第20図 縄文・弥生時代遺構配置図	39	第48図 SA1016出土遺物実測図	58
第21図 SP1798実測図	38	第49図 SA1017実測図	59
第22図 SP1798出土遺物実測図	38	第50図 SA1018実測図	60
第23図 遺物包含層出土遺物実測図	38	第51図 SA1019実測図	60
第24図 SB1002実測図	42	第52図 SA1020実測図	61
第25図 SB1002出土遺物実測図(1)	43	第53図 SA1020出土遺物実測図	61
第26図 SB1002出土遺物実測図(2)	44	第54図 SA1021実測図	62
第27図 SB1004実測図	44	第55図 SA1021出土遺物実測図	62
第28図 SB1005実測図	45	第56図 SA1022実測図	63

第57图	SA1023实测图	63	第100图	SK1075出土遗物实测图	84
第58图	SA1024实测图	64	第101图	SK1086实测图	84
第59图	SA1025实测图	64	第102图	SK1086出土遗物实测图	84
第60图	SA1026实测图	65	第103图	SK1112实测图	85
第61图	SA1027实测图	66	第104图	SK1112出土遗物实测图(1)	85
第62图	SA1028实测图	67	第105图	SK1112出土遗物实测图(2)	86
第63图	SA1028出土遗物实测图	68	第106图	SK1113实测图	87
第64图	SA1029实测图	67	第107图	SK1113出土遗物实测图	87
第65图	SA1029出土遗物实测图	68	第108图	SK1130实测图	88
第66图	SA1030实测图	68	第109图	SK1130出土遗物实测图	88
第67图	SA1031实测图	69	第110图	SK1132实测图	89
第68图	SA1032实测图	69	第111图	SK1132出土遗物实测图	90
第69图	SA1033实测图	70	第112图	SK1141实测图	90
第70图	SK1001实测图	71	第113图	SK1141出土遗物实测图	91
第71图	SK1001出土遗物实测图	71	第114图	SK1145实测图	91
第72图	SK1004实测图	72	第115图	SK1145出土遗物实测图	91
第73图	SK1004出土遗物实测图	72	第116图	SK1148实测图	92
第74图	SK1005实测图	73	第117图	SK1148出土遗物实测图	92
第75图	SK1005出土遗物实测图	73	第118图	SK1152实测图	92
第76图	SK1022实测图	74	第119图	SK1152出土遗物实测图	93
第77图	SK1022出土遗物实测图	74	第120图	SK1153实测图	93
第78图	SK1031实测图	75	第121图	SK1153出土遗物实测图	93
第79图	SK1031出土遗物实测图	75	第122图	SK1158实测图	94
第80图	SK1032实测图	76	第123图	SK1158出土遗物实测图	94
第81图	SK1032出土遗物实测图	76	第124图	SK1163实测图	95
第82图	SK1036实测图	76	第125图	SK1163出土遗物实测图	95
第83图	SK1036出土遗物实测图	76	第126图	SK1169实测图	95
第84图	SK1046实测图	77	第127图	SK1169出土遗物实测图	95
第85图	SK1047实测图	77	第128图	SK1171·1172实测图	96
第86图	SK1047出土遗物实测图	77	第129图	SK1171·1172出土遗物实测图	97
第87图	SK1052实测图	78	第130图	SK1173实测图	98
第88图	SK1052出土遗物实测图(1)	78	第131图	SK1173出土遗物实测图	98
第89图	SK1052出土遗物实测图(2)	79	第132图	SK1185实测图	99
第90图	SK1054实测图	79	第133图	SK1185出土遗物实测图	100
第91图	SK1054出土遗物实测图	79	第134图	SK1192实测图	101
第92图	SK1055实测图	80	第135图	SK1192出土遗物实测图	101
第93图	SK1057实测图	80	第136图	SK1195实测图	101
第94图	SK1057出土遗物实测图	80	第137图	SK1195出土遗物实测图	101
第95图	SK1063实测图	81	第138图	SK1196实测图	102
第96图	SK1063出土遗物实测图	82	第139图	SK1196出土遗物实测图	102
第97图	SK1069实测图	83	第140图	SK1215实测图	102
第98图	SK1069出土遗物实测图	83	第141图	SK1215出土遗物实测图	103
第99图	SK1075实测图	84	第142图	SD1011实测图	103

第143图	SD1012实测图	104	第186图	遺物包含層出土遺物实测图(16)	149
第144图	SD1013实测图	104	第187图	遺物包含層出土遺物实测图(17)	150
第145图	SD1014实测图	105	第188图	遺物包含層出土遺物实测图(18)	151
第146图	SD1014出土遺物实测图	105	第189图	遺物包含層出土遺物实测图(19)	152
第147图	SX1007实测图	106	第190图	遺物包含層出土遺物实测图(20)	153
第148图	SX1007出土遺物实测图	106	第191图	遺物包含層出土遺物实测图(21)	154
第149图	SX1008实测图	107	第192图	遺物包含層出土遺物实测图(22)	155
第150图	SX1008出土遺物实测图	108	第193图	遺物包含層出土遺物实测图(23)	156
第151图	SX1015实测图	109	第194图	遺物包含層出土遺物实测图(24)	157
第152图	SX1015出土遺物实测图	109	第195图	遺物包含層出土遺物实测图(25)	158
第153图	SX1016·1017实测图	111	第196图	遺物包含層出土遺物实测图(26)	159
第154图	SX1017出土遺物实测图	113	第197图	遺物包含層出土遺物实测图(27)	160
第155图	SX1021实测图	114	第198图	遺物包含層出土遺物实测图(28)	161
第156图	SX1021出土遺物实测图	115	第199图	遺物包含層出土遺物实测图(29)	162
第157图	SX1022实测图	116	第200图	遺物包含層出土遺物实测图(30)	163
第158图	SX1022出土遺物实测图(1)	116	第201图	遺物包含層出土遺物实测图(31)	164
第159图	SX1022出土遺物实测图(2)	117	第202图	遺物包含層出土遺物实测图(32)	165
第160图	SX1024实测图	118	第203图	遺物包含層出土遺物实测图(33)	166
第161图	SX1024出土遺物实测图	118	第204图	遺物包含層出土遺物实测图(34)	167
第162图	SP1029实测图	120	第205图	遺物包含層出土遺物实测图(35)	168
第163图	SP1029出土遺物实测图	120	第206图	遺物包含層出土遺物实测图(36)	169
第164图	柱穴出土遺物实测图(1)	121	第207图	遺物包含層出土遺物实测图(37)	170
第165图	柱穴出土遺物实测图(2)	123	第208图	遺物包含層出土遺物实测图(38)	171
第166图	柱穴出土遺物实测图(3)	125	第209图	遺物包含層出土遺物实测图(39)	172
第167图	柱穴出土遺物实测图(4)	127	第210图	遺物包含層出土遺物实测图(40)	173
第168图	柱穴出土遺物实测图(5)	128	第211图	遺物包含層出土遺物实测图(41)	174
第169图	柱穴出土遺物实测图(6)	129	第212图	遺物包含層出土遺物实测图(42)	175
第170图	柱穴出土遺物实测图(7)	130	第213图	遺物包含層出土遺物实测图(43)	176
第171图	遺物包含層出土遺物实测图(1)	134	第214图	遺物包含層出土遺物实测图(44)	177
第172图	遺物包含層出土遺物实测图(2)	135	第215图	遺物包含層出土遺物实测图(45)	178
第173图	遺物包含層出土遺物实测图(3)	136	第216图	遺物包含層出土遺物实测图(46)	179
第174图	遺物包含層出土遺物实测图(4)	137	第217图	遺物包含層出土遺物实测图(47)	180
第175图	遺物包含層出土遺物实测图(5)	138	第218图	遺物包含層出土遺物实测图(48)	181
第176图	遺物包含層出土遺物实测图(6)	139	第219图	遺物包含層出土遺物实测图(49)	182
第177图	遺物包含層出土遺物实测图(7)	140	第220图	遺物包含層出土遺物实测图(50)	183
第178图	遺物包含層出土遺物实测图(8)	141	第221图	遺物包含層出土遺物实测图(51)	184
第179图	遺物包含層出土遺物实测图(9)	142	第222图	古代遺構配置图	185
第180图	遺物包含層出土遺物实测图(10)	143	第223图	SB1001实测图	187
第181图	遺物包含層出土遺物实测图(11)	144	第224图	SB1001寢实测图	188
第182图	遺物包含層出土遺物实测图(12)	145	第225图	SB1001出土遺物实测图(1)	189
第183图	遺物包含層出土遺物实测图(13)	146	第226图	SB1001出土遺物实测图(2)	190
第184图	遺物包含層出土遺物实测图(14)	147	第227图	SK1109实测图	191
第185图	遺物包含層出土遺物实测图(15)	148	第228图	SK1109出土遺物实测图	191

第229図	SK1120実測図	192	第251図	SA2003実測図	209
第230図	SK1127実測図	192	第252図	SA2003出土遺物実測図	209
第231図	SK1135実測図	193	第253図	SA2004実測図	210
第232図	SK1139実測図	193	第254図	SK1020実測図	211
第233図	SK1204実測図	193	第255図	SK1020出土遺物実測図	211
第234図	遺物包含層出土遺物実測図	195	第256図	SK1080実測図	211
第235図	中世遺構配置図	199	第257図	SK1093実測図	211
第236図	SA1034実測図	198	第258図	SK1096実測図	212
第237図	SA1034内 P-2 実測図	201	第259図	SK1099実測図	213
第238図	SA1034出土遺物実測図(1)	202	第260図	SK1110実測図	214
第239図	SA1034出土遺物実測図(2)	203	第261図	SK1189実測図	214
第240図	SA1035実測図	204	第262図	SK1189出土遺物実測図	214
第241図	SA1036実測図	204	第263図	SK1197実測図	215
第242図	SA1037実測図	205	第264図	SK1202実測図	216
第243図	SA1038実測図	206	第265図	SK1202出土遺物実測図	216
第244図	SA1038出土遺物実測図	207	第266図	柱穴出土遺物実測図(1)	217
第245図	SA1039実測図	206	第267図	柱穴出土遺物実測図(2)	219
第246図	SA1039出土遺物実測図	207	第268図	遺物包含層出土遺物実測図(1)	221
第247図	SA1040実測図	207	第269図	遺物包含層出土遺物実測図(2)	222
第248図	SA2001実測図	208	第270図	遺物包含層出土遺物実測図(3)	223
第249図	SA2001出土遺物実測図	209			
第250図	SA2002実測図	209			

表目次

第1表	四国縦貫自動車道(徳島～脇間)埋蔵文化財調査地一覽表	4	第16表	S K1001出土遺物觀察表	255
第2表	日吉谷遺跡石材別石器組成表	184	第17表	S K1004出土遺物觀察表	255
第3表	遺構一覽表	242	第18表	S K1005出土遺物觀察表	255
第4表	旧石器出土遺物觀察表	250	第19表	S K1022出土遺物觀察表	255
第5表	S P1798出土遺物觀察表	252	第20表	S K1031出土遺物觀察表	256
第6表	遺物包含層出土遺物觀察表	252	第21表	S K1032出土遺物觀察表	256
第7表	S B1002出土遺物觀察表	252	第22表	S K1036出土遺物觀察表	256
第8表	S B1005出土遺物觀察表	253	第23表	S K1047出土遺物觀察表	256
第9表	S A1001内柱穴出土遺物觀察表	253	第24表	S K1052出土遺物觀察表	256
第10表	S A1004内柱穴出土遺物觀察表	253	第25表	S K1054出土遺物觀察表	257
第11表	S A1016内柱穴出土遺物觀察表	254	第26表	S K1057出土遺物觀察表	257
第12表	S A1020内柱穴出土遺物觀察表	254	第27表	S K1063出土遺物觀察表	257
第13表	S A1021内柱穴出土遺物觀察表	254	第28表	S K1069出土遺物觀察表	258
第14表	S A1028内柱穴出土遺物觀察表	255	第29表	S K1075出土遺物觀察表	258
第15表	S A1029内柱穴出土遺物觀察表	255	第30表	S K1086出土遺物觀察表	258
			第31表	S K1112出土遺物觀察表	258

第32表	S K 1113出土遺物觀察表	258	第75表	S P 1481出土遺物觀察表	267
第33表	S K 1130出土遺物觀察表	258	第76表	S P 1482出土遺物觀察表	267
第34表	S K 1132出土遺物觀察表	259	第77表	S P 1603出土遺物觀察表	267
第35表	S K 1141出土遺物觀察表	259	第78表	S P 1688出土遺物觀察表	267
第36表	S K 1145出土遺物觀察表	259	第79表	S P 1780出土遺物觀察表	267
第37表	S K 1148出土遺物觀察表	259	第80表	S P 1887出土遺物觀察表	267
第38表	S K 1152出土遺物觀察表	259	第81表	S P 1890出土遺物觀察表	267
第39表	S K 1153出土遺物觀察表	260	第82表	S P 1940出土遺物觀察表	268
第40表	S K 1158出土遺物觀察表	260	第83表	S P 10123出土遺物觀察表	268
第41表	S K 1163出土遺物觀察表	260	第84表	S P 10136出土遺物觀察表	268
第42表	S K 1169出土遺物觀察表	260	第85表	S P 10484出土遺物觀察表	268
第43表	S K 1171 · 1172出土遺物觀察表	261	第86表	S P 10487出土遺物觀察表	268
第44表	S K 1173出土遺物觀察表	261	第87表	S P 10491出土遺物觀察表	268
第45表	S K 1185出土遺物觀察表	262	第88表	S P 10534出土遺物觀察表	269
第46表	S K 1192出土遺物觀察表	262	第89表	S P 10573出土遺物觀察表	269
第47表	S K 1195出土遺物觀察表	262	第90表	S P 10632出土遺物觀察表	269
第48表	S K 1196出土遺物觀察表	262	第91表	S P 10661出土遺物觀察表	269
第49表	S K 1215出土遺物觀察表	262	第92表	S P 10664出土遺物觀察表	269
第50表	S D 1014出土遺物觀察表	262	第93表	S P 10677出土遺物觀察表	270
第51表	S X 1007出土遺物觀察表	263	第94表	S P 10808出土遺物觀察表	270
第52表	S X 1008出土遺物觀察表	263	第95表	S P 10982出土遺物觀察表	270
第53表	S X 1015出土遺物觀察表	263	第96表	S P 10984出土遺物觀察表	270
第54表	S X 1017出土遺物觀察表	263	第97表	遺物包含層出土遺物觀察表	271
第55表	S X 1021出土遺物觀察表	264	第98表	S B 1001出土遺物觀察表	291
第56表	S X 1022出土遺物觀察表	264	第99表	S K 1109出土遺物觀察表	292
第57表	S X 1024出土遺物觀察表	264	第100表	遺物包含層出土遺物觀察表	292
第58表	S P 1029出土遺物觀察表	264	第101表	S A 1034內柱穴出土遺物觀察表	293
第59表	S P 1031出土遺物觀察表	264	第102表	S A 1038內柱穴出土遺物觀察表	294
第60表	S P 1048出土遺物觀察表	265	第103表	S A 1039內柱穴出土遺物觀察表	294
第61表	S P 1059出土遺物觀察表	265	第104表	S A 2001內柱穴出土遺物觀察表	294
第62表	S P 1102出土遺物觀察表	265	第105表	S A 2003內柱穴出土遺物觀察表	294
第63表	S P 1122出土遺物觀察表	265	第106表	S K 1020出土遺物觀察表	295
第64表	S P 1131出土遺物觀察表	265	第107表	S K 1189出土遺物觀察表	295
第65表	S P 1153出土遺物觀察表	265	第108表	S K 1202出土遺物觀察表	295
第66表	S P 1158出土遺物觀察表	265	第109表	S P 1020出土遺物觀察表	295
第67表	S P 1184出土遺物觀察表	266	第110表	S P 1049出土遺物觀察表	295
第68表	S P 1195出土遺物觀察表	266	第111表	S P 1054出土遺物觀察表	295
第69表	S P 1230出土遺物觀察表	266	第112表	S P 1078出土遺物觀察表	295
第70表	S P 1264出土遺物觀察表	266	第113表	S P 1098出土遺物觀察表	295
第71表	S P 1383出土遺物觀察表	266	第114表	S P 1101出土遺物觀察表	296
第72表	S P 1449出土遺物觀察表	266	第115表	S P 1123出土遺物觀察表	296
第73表	S P 1462出土遺物觀察表	266	第116表	S P 1126出土遺物觀察表	296
第74表	S P 1478出土遺物觀察表	267	第117表	S P 1127出土遺物觀察表	296

第118表	S P 1132出土遺物観察表296	第123表	S P 1759出土遺物観察表297
第119表	S P 1138出土遺物観察表296	第124表	S P 1960出土遺物観察表297
第120表	S P 1205出土遺物観察表296	第125表	S P 10727出土遺物観察表297
第121表	S P 1284出土遺物観察表297	第126表	S P 10756出土遺物観察表297
第122表	S P 1285出土遺物観察表297	第127表	遺物包含層出土遺物観察表298

図版目次

図版 1	(1)調査区遠景南より (2)調査前全景	図版18	(1)S X 1008際遺物出土状況 (2)S X 1016, 1017, 1018完掘状況
図版 2	(1)旧石器出土地点完掘状況 (2)剥片出土状況	図版19	(1)S X 1021掘り下げ状況 (2)S X 1022完掘状況
図版 3	(1)剥片出土状況 (2)S B 1002完掘状況	図版20	(1)S B 1001完掘状況 (2)S B 1001竈掘り下げ状況
図版 4	(1)S B 1002遺物出土状況 (2)S B 1004掘り下げ状況	図版21	(1)S K 1109掘り下げ状況 (2)S K 1202完掘状況
図版 5	(1)S B 1005完掘状況 (2)S B 1005遺物出土状況	図版22	出土遺物 (1)
図版 6	(1)S K 1002, 1003, 1004掘り下げ状況 (2)S K 1005掘り下げ状況	図版23	出土遺物 (2)
図版 7	(1)S K 1022掘り下げ状況 (2)S K 1031掘り下げ状況	図版24	出土遺物 (3)
図版 8	(1)S K 1046掘り下げ状況 (2)S K 1052掘り下げ状況	図版25	出土遺物 (4)
図版 9	(1)S K 1063掘り下げ状況 (2)S K 1063完掘状況	図版26	出土遺物 (5)
図版10	(1)S K 1069掘り下げ状況 (2)S K 1069遺物出土状況	図版27	出土遺物 (6)
図版11	(1)S K 1112完掘状況 (2)S K 1130完掘状況	図版28	出土遺物 (7)
図版12	(1)S K 1132掘り下げ状況 (2)S K 1132完掘状況	図版29	出土遺物 (8)
図版13	(1)S K 1141掘り下げ状況 (2)S K 1152完掘状況	図版30	出土遺物 (9)
図版14	(1)S K 1171, 1172掘り下げ状況 (2)S K 1171, 1172完掘状況	図版31	出土遺物 (10)
図版15	(1)S K 1185掘り下げ状況 (2)S K 1185遺物出土状況	図版32	出土遺物 (11)
図版16	(1)S K 1185完掘状況 (2)S D 1011, 1012, 1013, 1014掘り下げ状況	図版33	出土遺物 (12)
図版17	(1)S X 1007完掘状況 (2)S X 1008完掘状況	図版34	出土遺物 (13)
		図版35	出土遺物 (14)
		図版36	出土遺物 (15)
		図版37	出土遺物 (16)
		図版38	出土遺物 (17)
		図版39	出土遺物 (18)
		図版40	出土遺物 (19)
		図版41	出土遺物 (20)
		図版42	出土遺物 (21)
		図版43	出土遺物 (22)
		図版44	出土遺物 (23)
		図版45	出土遺物 (24)
		図版46	出土遺物 (25)
		図版47	出土遺物 (26)

図版48	出土遺物	(27)	図版70	出土遺物	(49)
図版49	出土遺物	(28)	図版71	出土遺物	(50)
図版50	出土遺物	(29)	図版72	出土遺物	(51)
図版51	出土遺物	(30)	図版73	出土遺物	(52)
図版52	出土遺物	(31)	図版74	出土遺物	(53)
図版53	出土遺物	(32)	図版75	出土遺物	(54)
図版54	出土遺物	(33)	図版76	出土遺物	(55)
図版55	出土遺物	(34)	図版77	出土遺物	(56)
図版56	出土遺物	(35)	図版78	出土遺物	(57)
図版57	出土遺物	(36)	図版79	出土遺物	(58)
図版58	出土遺物	(37)	図版80	出土遺物	(59)
図版59	出土遺物	(38)	図版81	出土遺物	(60)
図版60	出土遺物	(39)	図版82	出土遺物	(61)
図版61	出土遺物	(40)	図版83	出土遺物	(62)
図版62	出土遺物	(41)	図版84	出土遺物	(63)
図版63	出土遺物	(42)	図版85	出土遺物	(64)
図版64	出土遺物	(43)	図版86	出土遺物	(65)
図版65	出土遺物	(44)	図版87	出土遺物	(66)
図版66	出土遺物	(45)	図版88	出土遺物	(67)
図版67	出土遺物	(46)	図版89	出土遺物	(68)
図版68	出土遺物	(47)			
図版69	出土遺物	(48)			

III-4 表 図版

表1	日吉谷遺跡炭化材同定結果238	図版1	日吉谷遺跡炭化材241
----	--------------	----------	-----	----------	----------

付図

付図1	日吉谷遺跡A・B・C区遺構配置図
付図2	日吉谷遺跡D区遺構配置図
付図3	日吉谷遺跡E区遺構配置図
付図4	日吉谷遺跡F・G・H・I区遺構配置図

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として計画された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年(1973)10月19日「道路整備特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施工命令が出され(昭和54年3月2日整備計画変更、施工命令)、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島I.Cを起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇I.Cを結ぶ区間延長41.4km、用地取得面積259haに及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には藍住I.C(追加I.C)の施工命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間徳島県教育委員会(以下「県教委」という。)は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局(以下「公団」という。)は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間に係る58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5か年計画に取り入れられ、平成5年が目標となっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財団法人徳島県埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000㎡(暫定分約340,000㎡)、事業区域面積のほぼ13パーセントにあたる文化財対象地が確定した(第1表)。

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターとの委託契約は元年6月1日付けで締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量

の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に応じた調査方法、調査工期について検討を行い、調査を実施した。

前述したように、試掘調査を先行する事によって層厚・調査面積を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表面下3m以深に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500㎡、2年度は33遺跡76,390㎡、3年度は30遺跡35,748㎡、4年度は残件であった14遺跡6,826㎡について、用地取得がなされた地区から調査を進め、当該区間の調査を完了した（第1表）。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

出土遺物の整理、調査報告書作成業務は平成3年度に一部着手し、4年度からは本格的な作業に入り、今後順次刊行の予定である。

調査組織及び整理体制は以下である。

事務局長	日下 昭（平成元・2年度） 佐藤信博（平成3・4年度）
総務課長	吉田 寛（平成元・2年度） 木内正幸（平成3年度） 岡本一仁（平成4年度）
主 事	佐藤 馨（平成2～4年度）
研究補助員	扶川道代
臨時補助員	田村隆子 上田暁美 岸いくみ 大岸さとみ 福原幸恵 藤川淑江 柴田みのり
調査課長	桑原邦彦（平成元・2年度） 羽山久男（平成3・4年度）
調整係長	菅原康夫（平成元年度）

技 師 島巡賢二 (平成2～4年度)
 森長 進 (平成元・2年度技術主任)
 堀江隆治 (平成3・4年度)

調査係長 島巡賢二 (平成元年度)
 菅原康夫 (平成2～4年度)

調査担当

第1次調査

研 究 員 浅尾忠明 (当時) 結城孝典 (当時)
 米倉康博 (当時) 早濑隆人

第2次調査

研 究 員 湯浅利彦 米倉康博 (当時)
 安友克佳 (当時)

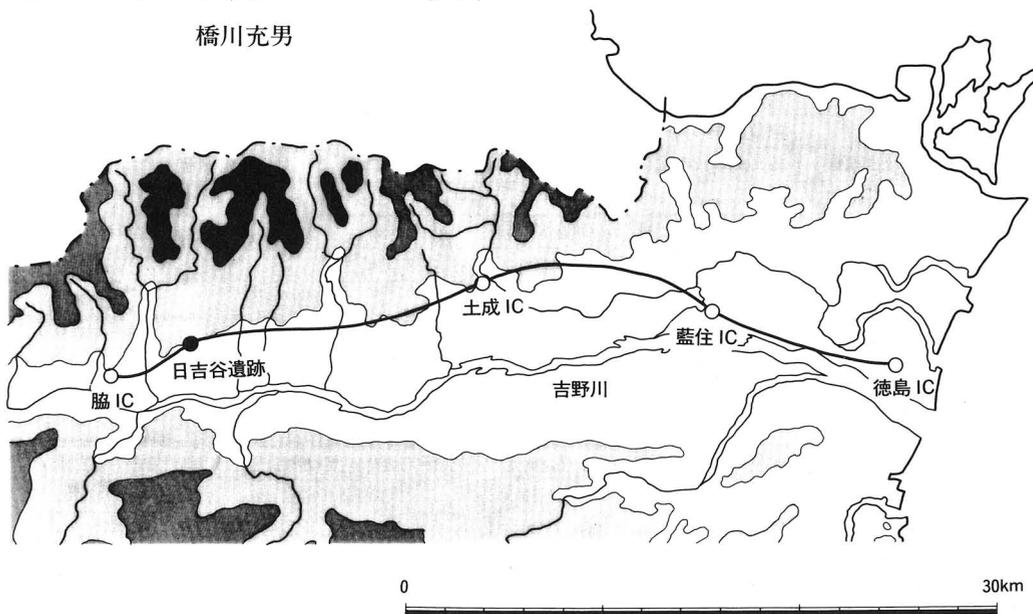
研究補助員 十川道雄 (当時)

基礎整理業務

研 究 員 久保脇義朗 湯浅利彦

調査報告書作成業務

研 究 員 小泉信司 鎌田幸二
 橋川充男



第1図 四国縦貫自動車道 (徳島～脇) 路線図

第1表 四国縦貫自動車道（徳島～脇間）埋蔵文化財調査地一覧表

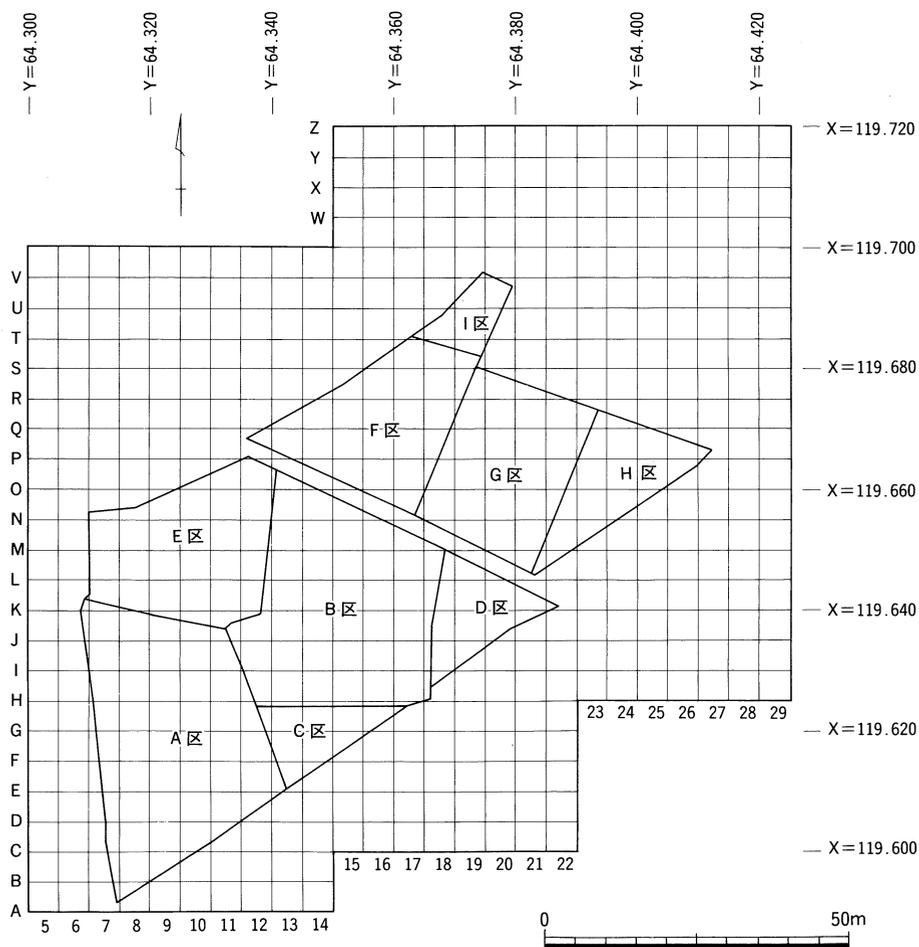
遺跡番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)				備考
			実掘面積	元年度	2年度	3年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170			
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100			
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30		
4	日吉谷遺跡	阿波郡阿波町日吉谷	4,080	1,840	2,240		本報告書所収
5	赤坂遺跡 (I)	阿波郡阿波町赤坂	800		800		報告書第1集所収
6	赤坂遺跡 (II)	阿波郡阿波町赤坂	50		50		報告書第1集所収
7	赤坂遺跡 (III)	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000		報告書第1集所収
8	桜ノ岡遺跡 (I)	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310		報告書第3集所収
9	桜ノ岡遺跡 (III)	阿波郡阿波町桜ノ岡	240	240			
10	桜ノ岡～東正広遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000		
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10		
12	山ノ神～八丁原遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30		
13	上喜来遺跡	阿波郡市場町大俣	1,160		900	260	
14	大俣山路～大俣宇佐遺跡	阿波郡市場町大俣	250			250	
15	上喜来蛭子～中佐古遺跡	阿波郡市場町上喜来	12,560		11,720	840	
16	八坂遺跡 (I)	阿波郡市場町尾開	11			11	
17	八坂遺跡 (II)	阿波郡市場町尾開	360	360			
18	八坂遺跡 (III)	阿波郡市場町尾開	114			85	29
19	八坂遺跡 (IV)	阿波郡市場町尾開	2,000	2,000			
20	日吉～金清遺跡	阿波郡市場町尾開	3,100	2,850	250		
21	古田遺跡 (I)	阿波郡市場町切幡	60		60		
22	古田遺跡 (II)	阿波郡市場町切幡	510	510			
23	坤山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	60			60	
24	乾山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	850			850	
25	乾山遺跡	阿波郡市場町切幡	2			2	
26	金蔵～上井遺跡	板野郡土成町浦池	2,730	2,730			報告書第1集所収
27	北原～大法寺遺跡	板野郡土成町土成	4,890		4,890		
28	前田遺跡	板野郡土成町土成	10,810		7,710	3,100	報告書第2集所収
29	椎ヶ丸～芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550		
30	北門～涼堂遺跡	板野郡土成町吉田	200			200	
31	広坪～宮ノ下遺跡	板野郡土成町宮川内	60		60		
32	向山古墳群	板野郡土成町宮川内	50			50	
33	葬ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400		
34	けやき原～林遺跡	板野郡土成町高尾	210		210		
35	西谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650	
36	法教田遺跡 (I)	板野郡土成町高尾	10		10		
37	十楽寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		430		
38	安楽寺谷墳墓群	板野郡上板町引野	2,140			2,140	
39	関堀窯跡	板野郡上板町引野	20			20	
40	天神山遺跡	板野郡上板町引野	1,330		1,330		報告書第1集所収
41	青谷遺跡	板野郡上板町引野	3,980		3,110	870	報告書第1集所収
42	明神池古墳群	板野郡上板町引野	194		80	114	

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)				備 考
			実掘面積	元年度	2年度	3年度	
43	柿谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650	
44	新池遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31	
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142
46	菖蒲谷西山A遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330	
47	菖蒲谷西山B遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250
48	菖蒲谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115	
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200	
50	山田古墓	板野郡上板町神宅	8			8	
51	山田古墳墓B	板野郡上板町神宅	775			525	250
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30
53	大谷薬師遺跡	板野郡上板町神宅	180		180		
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90
55	聖天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115
56	黒谷窯跡	板野郡板野町黒谷	91				91
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860	
58	蓮華谷古墳群(I)	板野郡板野町犬伏	353			65	288
59	蓮華池遺跡(I)	板野郡板野町犬伏	340		340		報告書第4集所収
60	蓮華谷古墳群(II)	板野郡板野町犬伏	1,220		1,220		報告書第4集所収
61	蓮華池遺跡(II)	板野郡板野町犬伏	40	40			
62	黒谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町犬伏	10,580	130	10,450		
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840
64	西中富遺跡(I)	板野郡板野町西中富	975			975	
65	西中富遺跡(II)	板野郡板野町西中富	125			125	
66	東中富遺跡	板野郡藍住町東中富	760			550	210
67	前須遺跡	板野郡藍住町徳命	876			625	251
68	新居須遺跡	板野郡藍住町徳命	190				190
計			133,464				

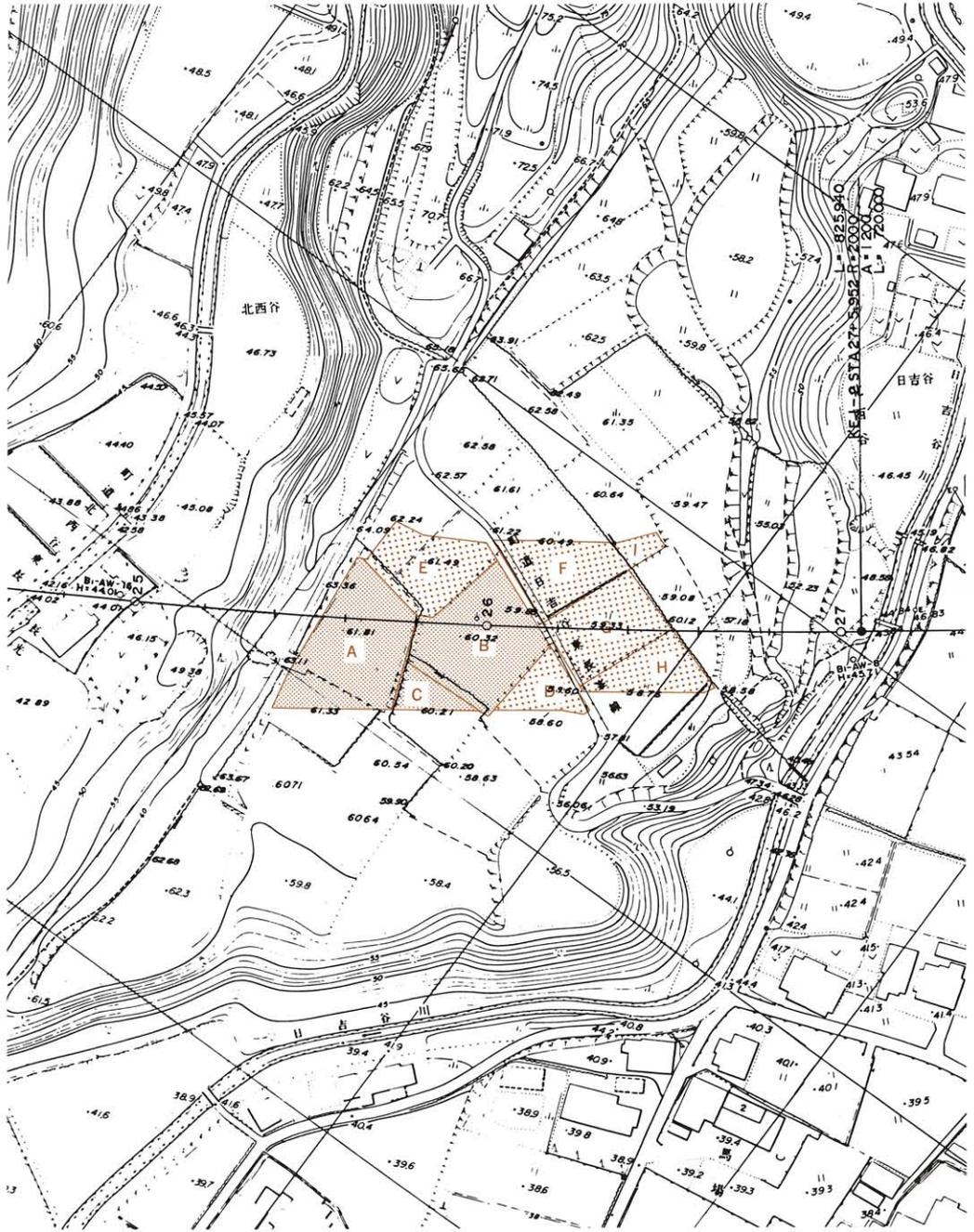
2 調査の経過

(1) 調査の経過

日吉谷遺跡は、分布調査によって弥生土器片、石鏃等の分布が認められた。その結果4,080㎡が調査対象面積にあげられた。しかし、土地未買収地があり、試掘調査は2度に分けられ、試掘・発掘調査は平成元年11月25日から平成2年3月24日（1次調査・面積1,840㎡）と平成2年9月17日から平成2年12月20日（2次調査・面積2,240㎡）に行われた（第3図）。



第2図 グリッド配置図



 平成元年度調査区

 平成2年度調査区



第3図 調査区位置図

(2) 発掘調査の方法

調査の基準となるグリッドの配置は、第4系国土座標を基準とし、5m×5mの方眼を国土座標に沿って設定し、調査区内のグリッドについてはX軸方向は西から1～29の数字を、Y軸方向は南からA～Zの記号をつけてグリッド名とした。(第2図)

調査区は道路、用水、田畑区画等で分断されているため、A～H区の調査区を設定した。(A・B・C・D区は1次調査、E・F・G・H・I区は2次調査)。

I区の東、G・H区の北部分については、試掘の結果、大幅に地形の変更が認められる地区や、急斜面のため包含層が堆積していなかったため調査区から除外した。

(3) 調査日誌抄

1次調査	2月27日	A区だめ押し掘り開始。
1989年	3月3日	A区旧石器出土層確認のための溝堀り。
12月12日		試掘調査開始。
12月18日	3月6日	A区旧石器出土部分掘り下げ。
12月20日	3月8日	A区旧石器出土部分平板測量開始。
12月21日		A区人力掘削開始。
12月22日	3月23日	A区Iグリッドから遺構検出開始。遺構確認。
1990年	2次調査	
	1990年	
1月8日	9月12日	E区機械掘削開始。
1月9日	9月21日	F区機械掘削開始。
1月10日	9月25日	E区人力掘削開始。
1月19日	10月2日	E区遺構検出開始。
1月23日	10月3日	F区人力掘削開始。
2月2日	10月9日	E区遺構検出完了。E区遺構検出写真、平板測量開始。G・I区機械掘削開始。
2月9日		B・C区遺構掘り下げ開始。
2月14日	10月11日	D区試掘調査、調査区設定。D区機械掘削開始。
2月15日		B区S B1002掘り下げ開始。
2月19日		現地説明会開催。
2月22日	10月15日	E区平板測量終了。D区機械掘削終了。
2月26日		B区だめ押し掘り開始。

10月16日	E区遺構掘り下げ開始。	E・F・I区だめ押し堀り開始。	
10月22日	I区人力掘削、遺構検出開始。	11月22日	G区遺構掘り下げ、平板測量開始。
10月24日	F区遺構検出開始。	11月26日	H区平板測量開始。D区人力掘削開始。
10月25日	H区機械掘削開始。	11月27日	D区遺構検出開始。
10月29日	E・I区遺構掘り下げ開始。	12月3日	H区遺構掘り下げ開始。
10月30日	G区人力掘削開始。	12月13日	空中撮影。
11月1日	F区平板測量、遺構掘り下げ開始。G区遺構検出開始。	12月14日	D・G・H区だめ押し堀り開始。
11月15日	空中撮影。	12月21日	2次調査終了。
11月19日	H区人力掘削、遺構検出開始。		

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

四国の東側に位置する徳島県は、山地が大部分を占めている。平地は吉野川を中心として形成されているが、段丘・扇状地などの部分を含んで平野の部分は約2割を占めるにすぎない。中央構造線と呼ばれる大断層に沿う吉野川下流域平野をはさんで北側に阿讃山脈が連なり南部には北より順に四国山地・剣山地・海部山地がそれぞれ東西方向に並走しており、いずれの山地も西に高く東に低くなる傾向をもっている。また四国最大の河川吉野川は、池田でその流路を直角に転じて徳島市河口まで直線状に流れ紀伊水道に注いでいる。その流域である阿讃山脈南側には扇状地が発達し、南岸には段丘地形がみられる。

日吉谷遺跡は吉野川左岸ほぼ中央、阿波郡阿波町字日吉谷に位置する。阿波町の地形は山地と平地がほぼ半々に分布している。北部は阿讃山脈が東西に連なり、この山脈を曾江谷川・日開谷川が山脈を北から南に横断して吉野川に注ぐ先行性河谷をなし、阿讃山脈南麓の中位砂礫台地に多くの扇状地を形成している。この高位斜面台地状には多くの遺跡が知られている。本遺跡は長峰台地といわれる南北幅1～2 km、海拔50～150mの緩やかな中位河岸段丘上、標高60mの丘隆先端部に位置する。

地質は白亜系和泉層群（内帯）からなる阿讃山脈と吉野川との間であって、第四系の種類の地層からなる平地との二つからできている。また中央構造線の南側には三波川変成帯（外帯）があり、切戸・岩津では外帯の三波川結晶片岩類が露出している。

2 歴史的環境

本遺跡が所在する阿波町は旧石器～古墳時代にかけての遺跡が数多く分布している⁽¹⁾。（第4図）

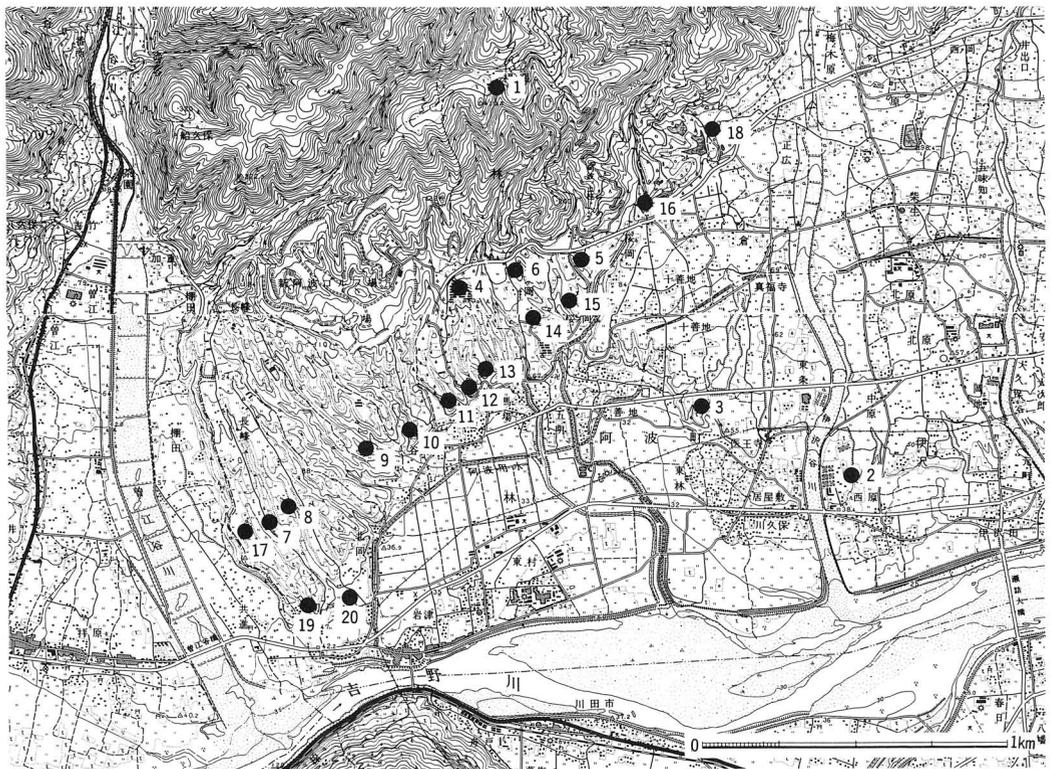
旧石器時代の遺物は、吉野川北岸中流域の阿波町から上板町に形成された扇状地には数多く認められる。阿波町内で確認されている旧石器関係遺跡は棚ヶ窪・天王坂・医王寺・赤坂東・桜ノ岡・名東岡・東長峰遺跡など10地点を数える。しかし、そのほとんどの地点が、表採資料にとどまっている。しかし、今回四国縦貫自動車道に伴う発掘調査が行われ赤坂遺跡（I）、桜ノ岡遺跡（I）・（III）⁽²⁾の調査が行われた。その結果、多数の資料の増加が認められた。しかし、層位的に安定した遺跡は少なく、今後の資料の増加が期待される。

縄文時代の遺物は、阿波町内では殆ど確認されておらず、表採資料として石鏃が認められるのみである。

弥生時代にはいと、曾江谷川左岸、段丘先端上に弥生時代中期中様～後期初頭に当たる、西長峰遺跡⁽³⁾、赤坂遺跡(I)・(III)、桜ノ岡遺跡(I)・(III)⁽⁴⁾が確認されている。また、『久勝町史』に銅鐸の出土が知られているが、出土地点等は明らかではない。

古墳時代には、阿波町内で現在確認されている古墳は、北岡西・東古墳、西林古墳、長峰古墳、桜ノ岡古墳、正広古墳、八つ塚古墳の七ヶ所で、伝承や地名から推定される物が数カ所ある。いずれも古墳時代後期の六世紀～七世紀前半に造営されたと推定される小規模な横穴式石室の円墳である。

石室の構造は、正広古墳は「忌部山型石室」の構造を呈し、北岡東・西古墳は「段の塚穴型石室」の構造を示している。本地域は「忌部山型石室」と「段の塚穴型石室」の石室構造



1. 羽ヶ窪遺跡 2. 天王坂遺跡 3. 医王寺遺跡 4. 赤坂東遺跡 5. 桜ノ岡遺跡
6. 名東岡遺跡 7. 西長峰遺跡 8. 中長峰遺跡 9. 東長峰遺跡 10. 日吉谷遺跡
11. 赤坂遺跡(I) 12. 赤坂遺跡(II) 13. 赤坂遺跡(III) 14. 桜ノ岡遺跡(I) 15. 桜ノ岡遺跡(III)
16. 桜ノ岡古墳 17. 長峰古墳 18. 正広古墳 19. 北岡西古墳 20. 北岡東古墳

第4図 周辺の遺跡分布図

の異なる両グループが共存しており、両グループの政治・文化の接点に当たる物として注目される⁽⁵⁾。

古代においては、窯跡が2基確認されている。西ノ岡の須恵器窯は、奈良時代から平安時代前期にかけての窯跡と考えられている。周囲には須恵器片が散在している。西原の瓦窯は、登り窯が数基あったといわれ、付近から瓦の破片も多数出土している。時期は白鳳～平安期に当たるといわれている。どちらの窯跡も現地地形をとどめておらず、所在地は不明である。

中世には、文献資料により伊沢庄・東拝師庄・西拝師庄の各荘園の存在が知られている。しかし所在地については不明である。

また久千田城跡、西野川城跡、実宗城跡、柴生城跡、川久保城跡、西林城跡等文献には古城跡が報告されているがそれを実証する資料は現在まで確認されていない。

注

- (1) 菅原康夫『日本の古代遺跡37 徳島』 保育社 1988
- (2) 財徳島県埋蔵文化財センター 『徳島県埋蔵文化財センター vol.2』 1991
- (3) 徳島県教育委員会『西長峰遺跡現地説明会資料』 1990
- (4) 前掲注(2)
- (5) 前掲注(1)

参考文献

- 曾父江勝孝・野崎利夫 「第一編 自然」『阿波町史』 阿波町史編纂委員会 1979
- 岡 泰 『阿讃峠みち 地理・歴史編』 1985
- 香川県・徳島県 「国土調査 脇町」『阿讃山地開発地域 土地分類基本調査』 1977
- 東端節也・金岡慶男 「第二編 歴史」 『阿波町史』 阿波町史編纂委員会 1979
- 天羽利夫・岡山真知子 『徳島の遺跡散歩』 徳島市立図書館 1985

III 調査成果

1 基本層序

本遺跡は長峰面と呼ばれる開析作用の進んだ段丘面中央部の先端近くに位置している。本遺跡の土層断面の観察と記録は基本的には調査区の南北の二壁において行われている。土層図の整理は南北二壁を中心に行い、土層断面模式図を作成した。(第5図)

本遺跡の現地表面はかなり起伏が認められ、標高62.36~59.18mを測る。現表土の高さを比べると最も高いE調査区の南端で62.36m、最も低いH調査区の南端で59.18mを測りその比高差は3.18mを測る。調査区は西側から東側に向けて緩やかに傾斜している。各調査区の遺構面は現地表から浅いところで0.2mを測り、深いところで1.16mを測る。調査以前は全調査区とも水田・畑作に利用されていた。

A調査区は本遺跡の中でE調査区と並び現地表の標高が高い調査区である。この調査区は弥生時代の遺構面と、旧石器時代の包含層が存在し、1層(耕作土)、2層(床土)、3層(攪乱層)、4~6層(旧耕作土)、7層(包含層)の下から弥生時代の遺構面を検出した。1~2層は比較的水はけの良い砂質土で、酸化鉄・マンガンが全体に薄く堆積している。その下は旧耕作土を整地する際に出来た3層が堆積している。4~6層の堆積層は水はけの良い砂質土に酸化鉄・マンガンが全体に薄く堆積している。7層は弥生時代~中世にわたる包含層である。②の土層模式図には旧石器包含層にあたる9~10層の堆積が認められ、この地点を中心に半径5mの範囲で観察された。出土遺物は旧石器時代、弥生時代~中世にわたっている。

B・C調査区は、基本的にはA調査区と同じ状況を呈して、1層(耕作土)・2層(床土)・3層(攪乱層)・7層(遺物包含層)・8層(地山)である。3層は耕地整理のために施されたものであろう。出土遺物は、弥生時代~中世まで出土している。

D調査区はB・C調査区で見られた3層がなくなり、1、12層(耕作土)・13層(包含層)・8層(地山)の順番で堆積する。13層は7層と対応し、遺物は弥生時代~中世まで出土している。

E調査区は現調査区の中でもっとも標高が高く、標高62.36mを測る。堆積状況は1・12層(耕作土)・2層(床土)・4~5層(旧耕作土)・14層(包含層)・8層(地山)である。2、4、5層は酸化鉄・マンガンが全体的に薄く堆積している。14層は7層と対応関係にあり、弥生時代~中世まで出土している。

F調査区の⑧は前述までの基本土層と同じ1、12層(耕作土)・2層(床土)・14層(包含層)・8層(地山)である。⑨は耕作土整地のための15層(盛土)が上層に認められる。基本

的な土層序に変化は認められない。包含層出土遺物は、弥生時代～中世にわたる。

G調査区の基本的な土層堆積は1層（耕作土）・4層（旧耕作土）・14層（包含層）・8層（地山）の順番に堆積している。⑨で見られた15層は認められない。出土遺物は弥生時代～中世にわたる。

H調査区は1層（耕作土）・2層（床土）・16層（包含層）・8層（地山）の順に堆積している。16層は7層と対応し、出土遺物は弥生時代～中世が出土している。

I調査区は1、12層（耕作土）・2層（床土）・15層（盛土）・5層（旧耕作土）・14層（包含層）・8層（地山）の順番に堆積している。15層は耕地整理の為になされた物であろう。出土遺物は、縄文時代、弥生時代～中世にわたっている。

本遺跡は以上の土層堆積状況を示している。基本的には耕作土・床土・旧耕作土・包含層・地山という状況である。上層は地区により後世の攪乱を所々で受けている。しかし、包含層は全調査区に安定して認められ、前述した堆積状況が全調査区にわたって見られる。

2 遺構と遺物

本遺跡は調査区をA～I調査区に分け、4080㎡の調査を行った。旧石器時代の遺物は総点数377点を数える。主な遺物は、ナイフ形石器、スクレイパー、楔形石器、翼状剥片、剥片、石核等である。ナイフ形石器は形態的には国府型ナイフ形石器を主体として占め、瀬戸内技法を剥片剥離技術基盤に持ち、いわゆる国府石器群である。旧石器時代遺物の垂直面・層位面からみた出土状況は、原位置を遊離しておらず、一つのブロックを形成している。遺物は弥生時代包含層からも出土し、ブロック出土遺物との接合資料も認められ、これよりブロックは広範囲に広がる可能性も考えられる。

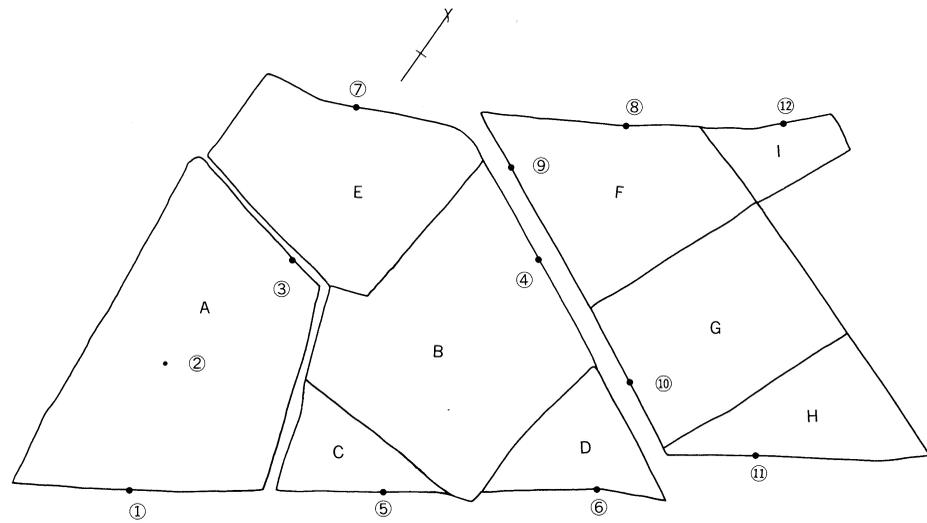
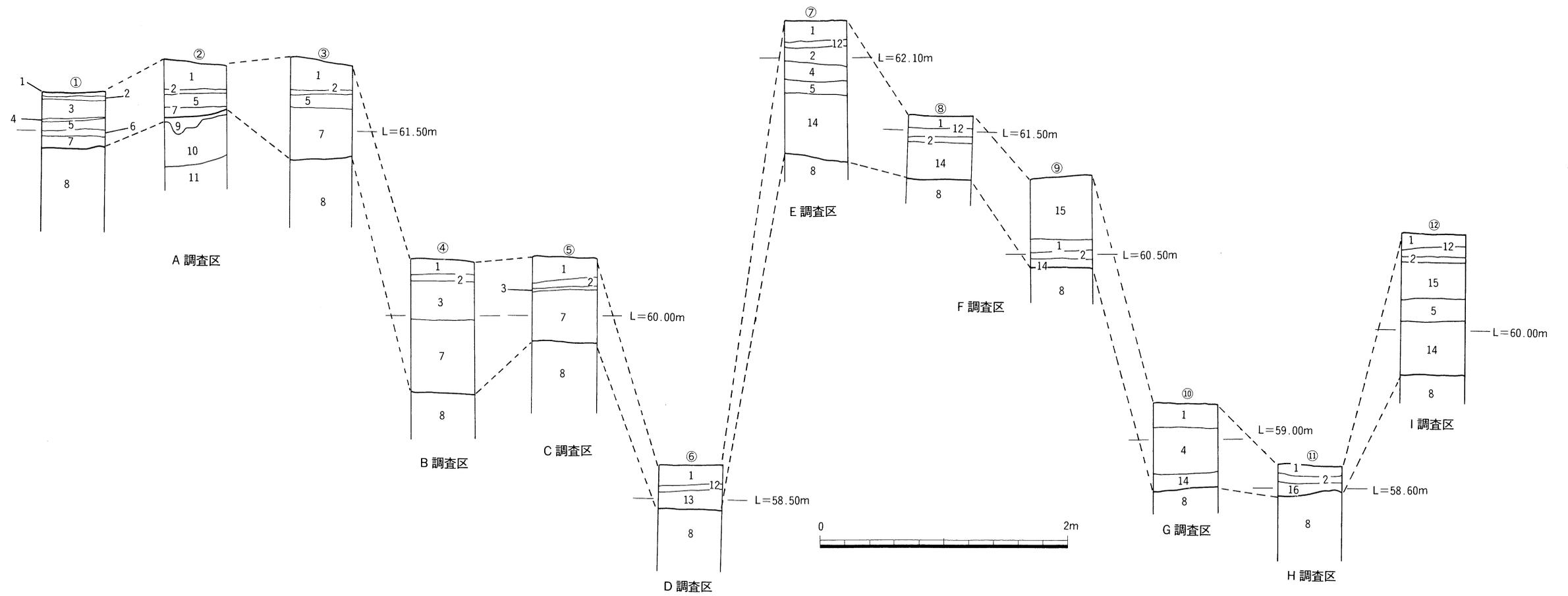
縄文時代はI調査区より柱穴1が検出されている。遺物は原下層式に当たると思われる。

弥生時代は調査区の北側を中心とし、遺構・遺物の出土が認められる。竪穴住居跡3、掘立柱建物跡33、土坑114、溝4、不明遺構15が検出されている。これらの遺構は出土遺物から弥生時代中期中様（第II～III様式）に位置づけられる。弥生土器は櫛描直線文や口縁端部に凹線文が認められる。

古墳時代から古代にかけての遺構・遺物はA区より竪穴住居跡1、土坑9が調査区の西側を中心に出土している。出土遺物から7世紀初頭～9世紀代に位置づけられる。

中世には掘立柱建物跡7、土坑38、不明遺構3が検出される。中世は調査区の南側に遺構、遺物が集中する傾向が認められる。これらの遺構は出土遺物より13～15世紀に位置づけられる。

以上、本章では各調査区で検出された遺構を時期ごとに報告する。



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 にぶい黄褐色10YR5/3砂質土(耕作土) | 11 浅黄色2.5Y7/4砂質土 |
| 2 灰黄褐色10YR6/2砂質土(床土) | 12 褐灰色10YR5/1粘性砂質土(耕作土) |
| 3 にぶい黄褐色10YR6/3砂質土(攪乱) | 13 にぶい黄褐色10YR5/3砂質土(包含層) |
| 4 にぶい黄褐色10YR6/3砂質土(旧耕作土) | 14 暗褐色10YR3/3粘性砂質土(包含層) |
| 5 にぶい黄褐色10YR6/4砂質土(旧耕作土) | 15 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(盛土) |
| 6 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土(旧耕作土) | 16 にぶい黄色2.5Y6/3砂質土(包含層) |
| 7 褐色10YR4/4砂質土(包含層) | |
| 8 浅黄色2.5Y7/3砂質土(地山) | |
| 9 浅黄色2.5Y8/4砂質土(旧石器包含層) | |
| 10 浅黄色2.5Y7/4砂質土(旧石器包含層) | |

第5図 基本土層柱状図

(1) 旧石器時代

はじめに

日吉谷遺跡出土の石器は総点数で377点の遺物が出土した。石材は圧倒的にサヌカイトを使用している。主要な遺物はナイフ形石器25点、スクレイパー5点、楔形石器2点、翼状剥片石核4点、翼状剥片11点、剥片115点等である。出土した石器は全て瀬戸内技法を技術基盤とし、素材には全て翼状剥片を用いている。ナイフ形石器は細身の形態を示す物が多く、一側縁に調整加工を施した国府型ナイフ形石器である。石材はサヌカイトを使用しているが、チャートも石材として使用したナイフ形石器が1点認められる。日吉谷遺跡の石器群の石器組成は、素材には全て翼状剥片を用い、国府型ナイフ形石器を主体としている。また、角錐状石器とは併伴しておらず、単純な石器組成を示していることから、瀬戸内技法の盛行期とされる、AT降灰前後の時期に位置づけられると思われる。

旧石器時代の遺物の出土状況は、A調査区E9グリッドを中心に半径5mの範囲内に集中的に出土した。第6図は旧石器が集中的に出土した地点の土層堆積状況である。全調査区の基本的層序は前述しているため、ここでは表土（耕作土）及び遺物包含層（弥生時代）は省略し、弥生時代の遺構面から提示しておく。1層は土層柱状図の9層と、2層は10層と対応関係にある。1・2層はA調査区の窪地状の部分にのみスポット的に堆積しており、他の調査区においては安定した堆積は確認することはできなかった。

第7図は旧石器時代の遺物を器種別に平面分布及び垂直分布を表した図面である。日吉谷遺跡出土の石器は、原位置を遊離しておらず、遺物はE9グリッドの半径2mの範囲内で集中的に出土し、一つのブロックを形成している。しかし、同じE9グリッドの弥生時代包含層より出土のナイフ形石器がブロック出土のナイフ形石器と接合しており、ブロックは更に広がる可能性も考えられる。垂直分布では1・2層より出土が認められるが、その密度は1層で顕著に認められ、西側は2層にのみ出土が確認できる。地形は西側から東側に向かって緩やかに傾斜している。次に個々の石器について、便宜上ブロック出土遺物と遺物包含層出土遺物に分け器種ごとに説明を行う。

ブロック出土遺物

①ナイフ形石器（第8図）

ナイフ形石器は13点確認されており、5点を図化した。接合した資料にはブロック出土の4～6と包含層出土30～32がある。石材として圧倒的にサヌカイトを用いているが、1点の

みチャート製の国府型ナイフ形石器の先端部が出土している。日吉谷遺跡出土のナイフ形石器はすべて一側縁加工で、打点側の側縁部を腹面側から調整加工を施している。形態的には細身の国府型ナイフ形石器がその主体を占め、瀬戸内技法を剥片剥離技術基盤に持ち、素材には全て翼状剥片が用いられる。日吉谷遺跡の石器群は国府型ナイフ形石器を主体とした、いわゆる国府石器群である。以下、個々のナイフ形石器について観察を述べていきたい。

1は背面はポジティブな底面とネガティブな2枚の剥離面、腹面はポジティブな剥離面1枚で形成される。打面部は素材である剥片の一側縁に調整加工を施し、背部を形成している。背部の上半部は腹面側より調整加工が施される。下半部は背面側より調整加工が認められるが、翼状剥片を剥ぎ取る時の打面調整と思われる。形態は幅広で、三角形状を呈している。

2はナイフ形石器上半部である。背面がポジティブな底面とネガティブな2枚の剥離面で構成される。腹面はポジティブな剥離面を持つ。背面は素材となる剥片の打面部の一側縁に腹面側より調整加工が施される。

3の背面はポジティブな底面と打点を移動して剥離した2枚のネガティブな剥離面で構成されている。腹面はポジティブな剥離面を持つ。調整加工は腹面側より、打面部側側縁部および基部の刃縁部側の一部に施されている。

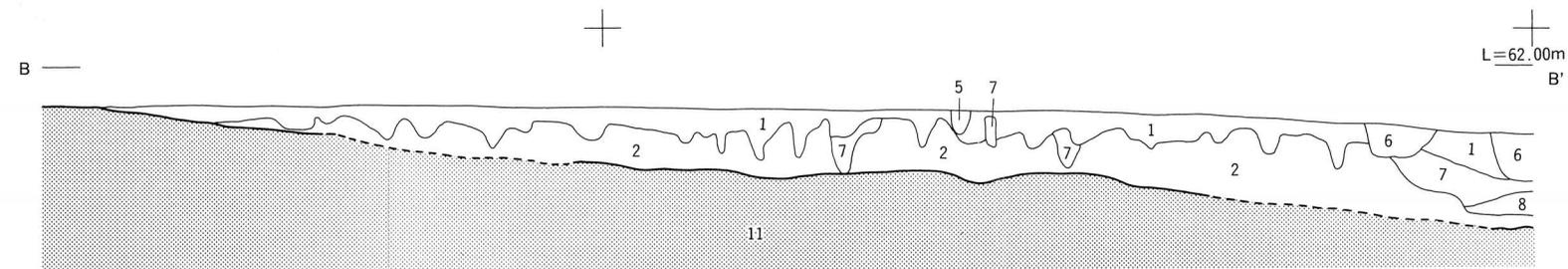
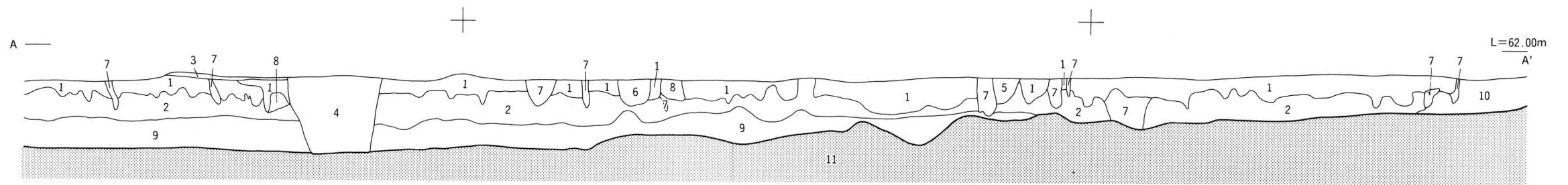
4は接合資料である。ナイフ形石器の製作途上に折損したものと思われる。一側縁加工の細身の国府型ナイフ形石器である。背面はポジティブな底面と2枚のネガティブな剥離面で構成され、腹面にはポジティブな1枚の剥離面で構成される。打面部側の側縁に腹面側より調整加工を施している。

5は接合資料4の上半部である。背面はポジティブな底面と2枚のネガティブな剥離面で構成される。腹面はポジティブな剥離面1枚を持つ。素材となる剥片の打面部の一側縁に腹面側より調整加工を施している。先端部は丸みを帯び、折損面は背面側より調整加工が施され器体を整えている。

6は接合資料4の下半部である。背面はポジティブな底面と複数のネガティブな剥離面により構成される。腹面はポジティブな剥離面1枚である。素材となる剥片の打面部側一側縁に腹面側より調整加工を施している。打面部は上下両端2ヵ所に大まかな剥離痕が施されている。下端部の調整剥離は翼状剥片剥離工程上生じた打面部である。上端部の剥離痕は折損後に残った剥片に何らかの目的をもって施された調整加工であろう。

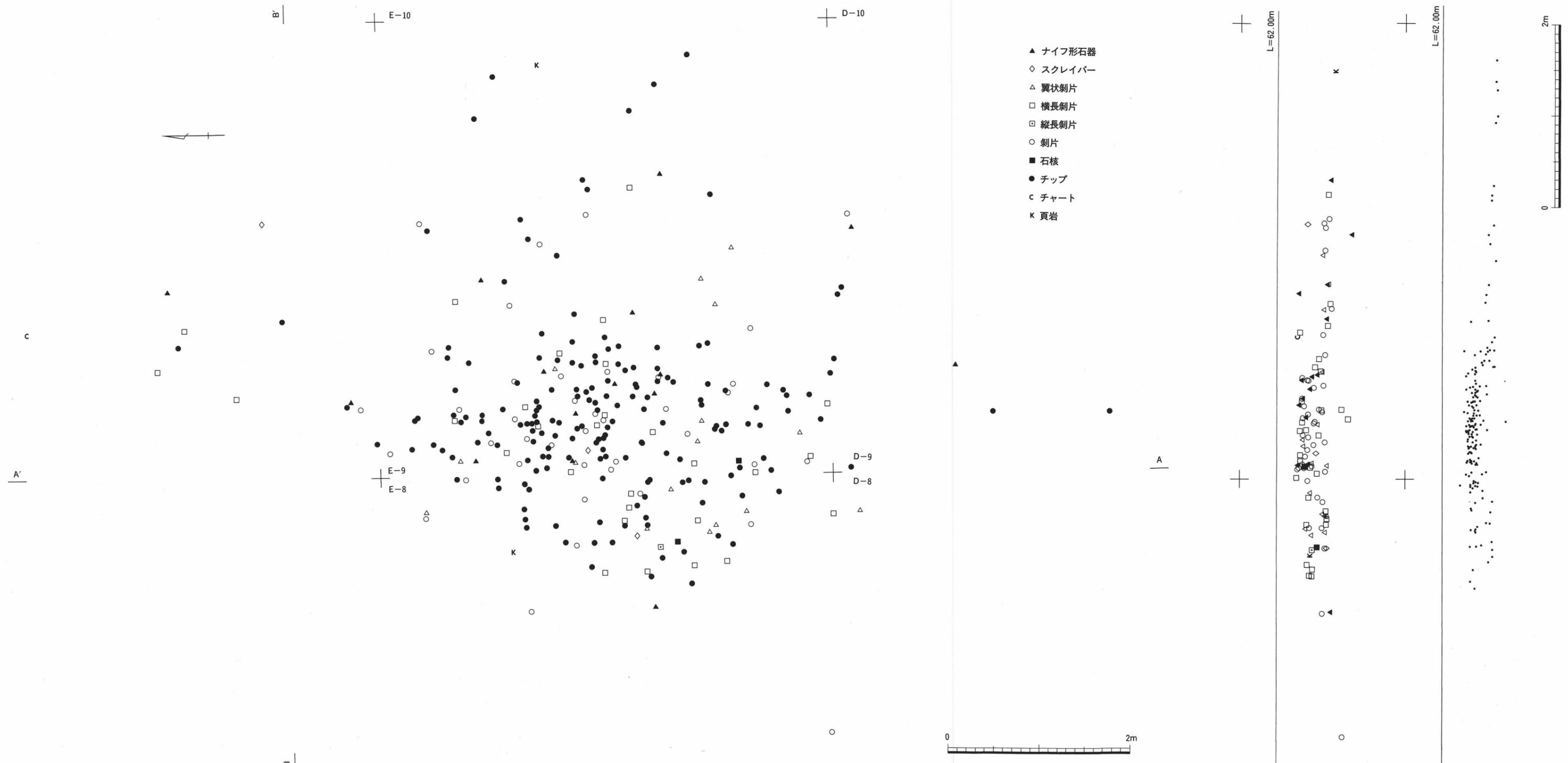
②スクレイパー（第9図）

ブロックからはナイフ形石器以外の石器として、スクレイパーが2点出土している。2点とも石核を素材としている。石材はサヌカイトである。以下遺物の説明を行う。



- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 淡黄色2.5Y8/4砂質土(旧石器包含層) | 7 浅黄色2.5Y7/4砂質土 |
| 2 浅黄色2.5Y7/4砂質土(旧石器包含層) | 8 にぶい黄橙色10YR6/4砂質土 |
| 3 にぶい黄橙色10YR6/4砂質土(床土) | 9 浅黄色2.5Y7/4砂質土 |
| 4 にぶい黄橙色10YR6/3砂質土(攪乱) | 10 浅黄色2.5Y7/4砂質土(無遺物層) |
| 5 にぶい黄褐色10YR5/3砂質土 | 11 明黄褐色2.5Y7/6粘質土(無遺物層) |
| 6 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土 | |

第6図 旧石器土層断面図

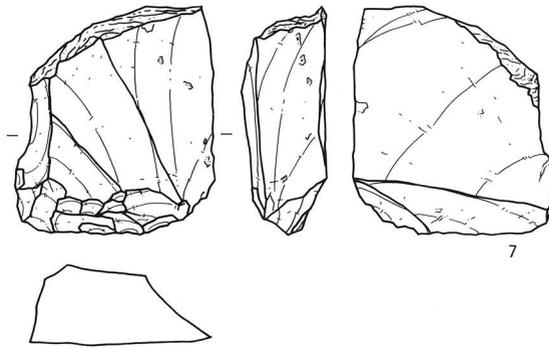


第7図 旧石器遺物出土状況図・垂直分布図

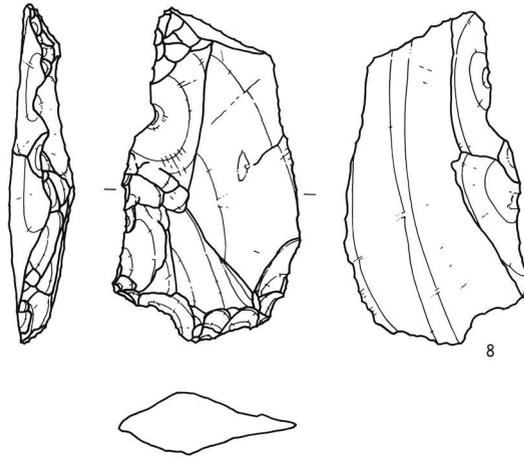


第 8 図 ナイフ形石器

7は石核転用のスクレイパーである。背面は複数のネガティブな剝離面、腹面はポジティブな剝離面1枚で構成され、一部自然面が残存している。素材には翼状剝片石核を半割して器体を整え、折断面に急斜度で粗雑な調整加工を施し、刃部を作出している。



8は背面はネガティブな複数の剝離面、腹面はポジティブな剝離面1枚で構成されている。7と同様に素材として翼状剝片石核を用い、左側縁辺部と下縁辺部に急斜度で粗雑な調整加工を施し、器体を整え、素材の縁辺部に刃部を作出している。



第9図 スクレイパー

③剝片 (第10・11図)

剝片は総点数88点、そのうち図化したのは19点である。石材は全てサヌカイトである。剝片類はほとんど瀬戸内技法関連資料である翼状剝片(9~11・13~16)で占められる。その他の剝片には横長剝片・打面調整剝片(12・17~27)がある。以下、個々の剝片について観察を行う。

9は翼状剝片である。背面はネガティブ、腹面はポジティブな1枚の剝離面で構成される。打面部には石核の打面調整痕がみられる。

10は背面は底面のポジティブな剝離面1枚とネガティブな複数の打面調整痕の剝離面を持ち、一部自然面が残存している。腹面はポジティブな剝離面1枚で構成される。打面部には打面調整のネガティブな剝離面がみられる。

11は背面側は底面に当たるポジティブな剝離面とネガティブな複数の剝離面、腹面側はポジティブな剝離面1枚で構成される。打面部は背腹両面から打面調整が行われている。

12は背面側は底面のポジティブな剝離面1枚と複数のネガティブな剝離面から構成される。腹面側はポジティブな剝離面1枚で構成される。打面部には打面調整痕がみられる。

13は背面側はポジティブな剝離面の底面とネガティブな剝離面各1枚、腹面側はポジティブな剝離面1枚で構成される。打面部には打面調整痕がみられる。

14は背面はポジティブな剝離面とネガティブな複数の剝離面、腹面はポジティブな剝離面1枚から構成されている。打面部には打面調整痕がみられ、剝片の縁辺部には一部腹面側からの調整加工がみられる。

15は背面は底面に当たるポジティブな剝離面とネガティブな剝離面の2枚、腹面はポジティブな剝離面1枚で構成されている。打面部には打面調整痕がみられる。

16は背面はネガティブな剝離面、腹面はポジティブな剝離面各1枚で構成される。打面部には背面からの打面調整痕がみられる。

17は背面はネガティブな複数の剝離面、腹面はポジティブとネガティブな2枚の剝離面で構成される。剝離の状況より石核の打面調整剝片と思われる。

18は17と同様、石核調整のための剝片と思われる。背面に複数のネガティブな剝離面、腹面はポジティブな剝離面で構成される。

19は背面はネガティブな複数の剝離面を形成し、腹面はポジティブな剝離面で構成されている。打面部には背面より打面調整痕がみられる。上部（基部）を欠損している。

20は背面は底面のポジティブな剝離面と複数のネガティブな剝離面を持ち、腹面はポジティブな剝離面1枚で構成される。打面部は腹面より打面調整痕がみられる。

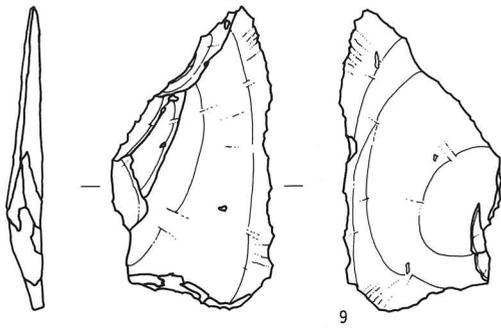
21は背面側は底面のポジティブな剝離面と、ネガティブな剝離面各1枚を持ち、腹面側はポジティブな剝離面1枚で構成される。打面部には打面調整痕がみられる。

22は背面側と腹面側にポジティブな剝離面を各1枚ずつ構成している。打面部にはネガティブな打面調整痕がみられる。

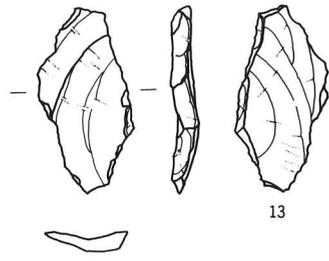
23は背面側はネガティブな複数の剝離面を持ち、一部自然面を残している。腹面側はポジティブな剝離面で構成される。打面部には石核の打面調整痕がみられる。

24は背面側は底面のポジティブな剝離面とネガティブな剝離面を各1枚持ち、腹面側はポジティブな剝離面で構成される。打面部は背面側よりネガティブな打面調整痕がみられる。

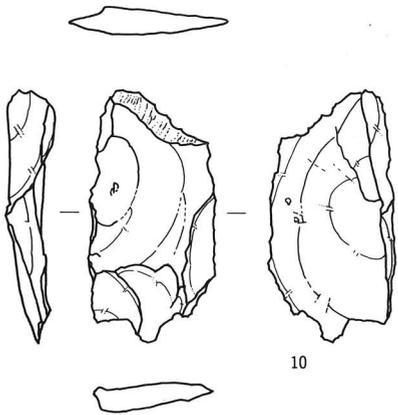
25は背面側はポジティブな剝離面とネガティブな複数の剝離面を持ち、腹面側はポジティブ



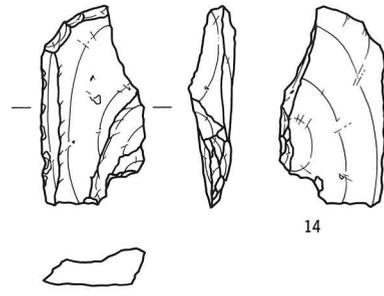
9



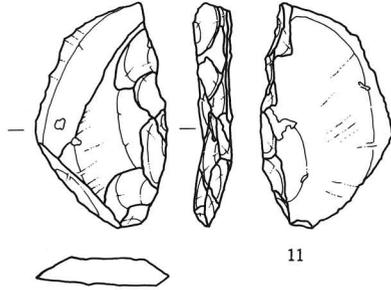
13



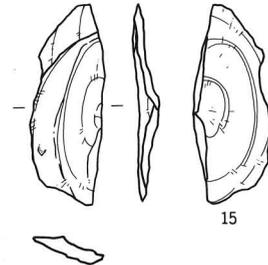
10



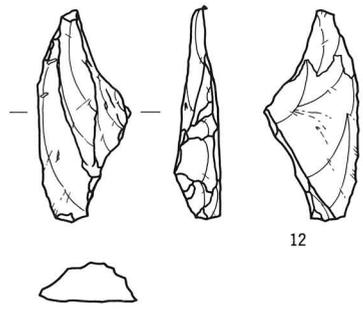
14



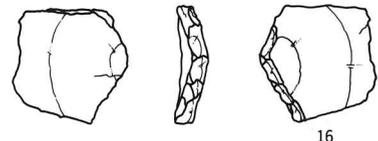
11



15



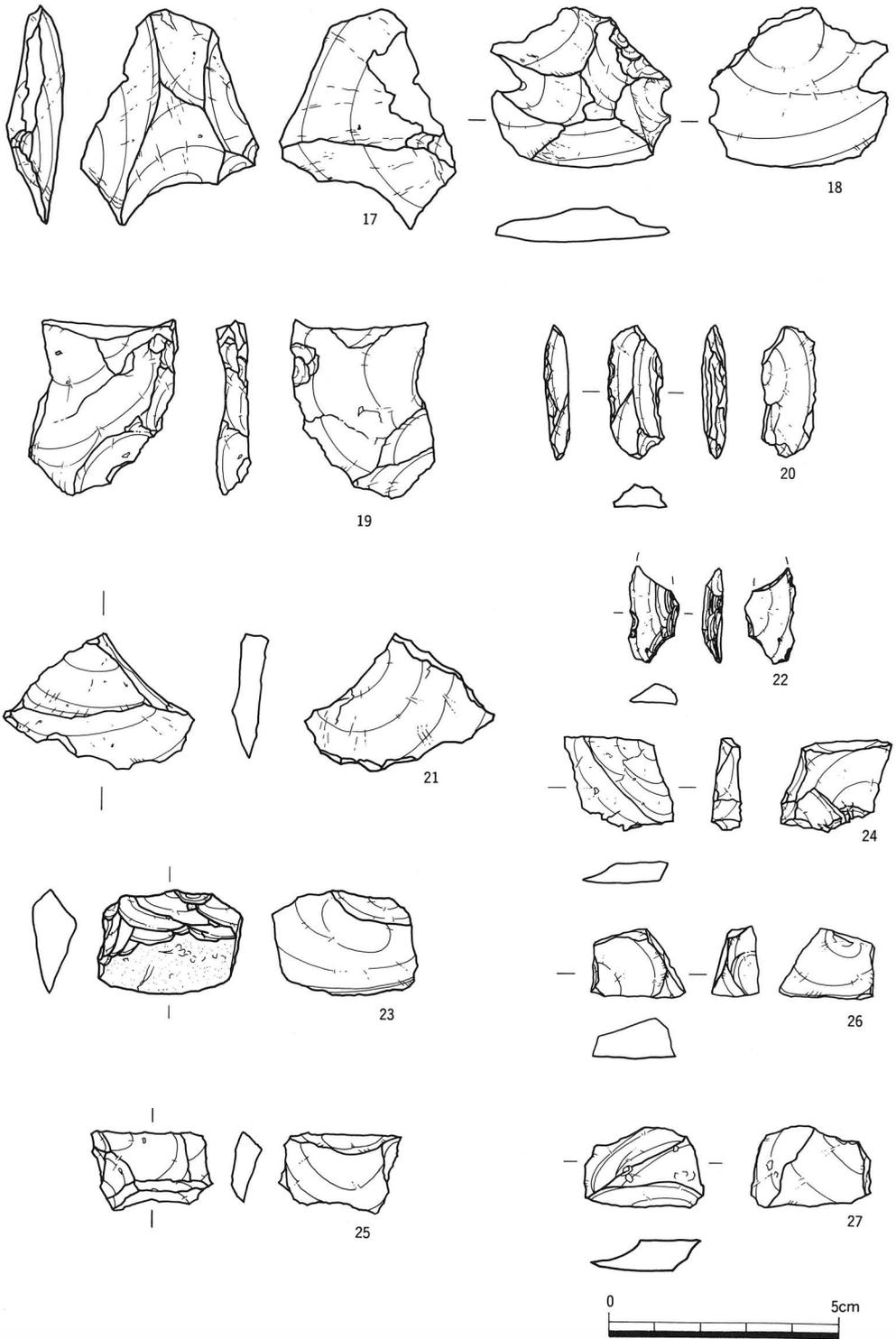
12



16



第10图 剥片 (1)



第11图 剥片 (2)

ブな剥離面で構成される。打面部には打面調整痕がみられる。

26は背面側はネガティブな剥離面を、腹面側はポジティブな剥離面1枚で構成される。

27は背面側はネガティブな複数の剥離面を持ち、腹面側はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面で構成される。

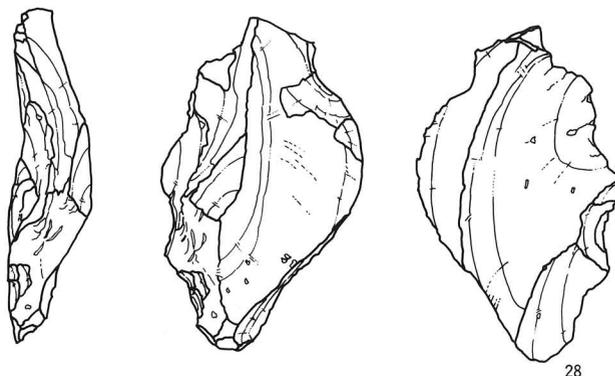
④石核 (第12図)

石核は計2点出土している。材質は全てサヌカイトである。ここにあげる石核はいわゆる瀬戸内技法を技術基盤にした翼状剥片石核である。以下遺物の説明を行う。

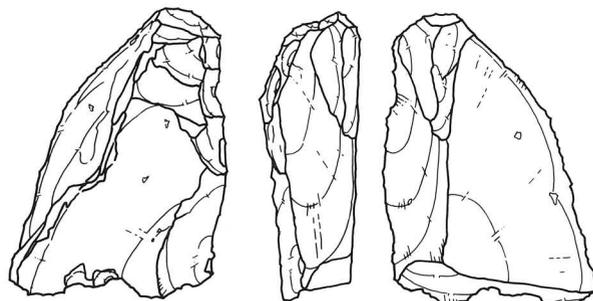
28は背面側はネガティブな複数の剥離面を持ち、腹面側はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面で構成される。石核の背面側縁辺部には瀬戸内技法第2行程に当たる打面調整痕がみられる。石核

は片面にのみ打面調整痕を持ち、一定形状の目的剥片を剥取したものであろう。打面転移は認められない。

29は下縁部を欠損している盤状剥片の最終段階と考えられる。背面側はネガティブな剥離面を持ち、腹面側はポジティブな剥離面で構成される。石核の背面側縁辺部には瀬戸内技法第2行程に当たる打面調整痕がみられる。腹面側上縁部には何らかの目的を意図した



28



29



第12図 石核

剥離痕が認められる。

包含層出土遺物

⑤ナイフ形石器（第13・14図）

ナイフ形石器は、包含層中より11点出土し、そのうち9点を図化した。ナイフ形石器は全て翼状剥片を素材として、剥片の一側縁に調整加工を施した国府型ナイフ形石器である。形態的には小形で細身の傾向を示す。石材はほとんどがサヌカイトを用いているが、中にはチャート製の国府型ナイフ形石器（39）が1点出土している。30～32は接合資料であるが、ブロック出土の接合資料のように折損後の調整加工は施されていない。接合資料の31は包含層から出土、32はブロックから出土しており、調査時において、ブロックは1基しか確認されなかったが、複数のブロック、あるいはブロックがさらに広がっていた可能性が考えられる。以下、個々のナイフ形石器について述べていく。

30は接合資料である。折損面には調整加工はみられないことから、意図的な折断ではなくナイフ形石器製作途中で折損した物と思われる。先端部は欠損している。背面は底面のポジティブな剥離面とネガティブな剥離面の2枚、腹面はポジティブな剥離面1枚で構成される。調整加工は素材となる剥片の打面側の側縁を腹面側より施している。形態は細身である。

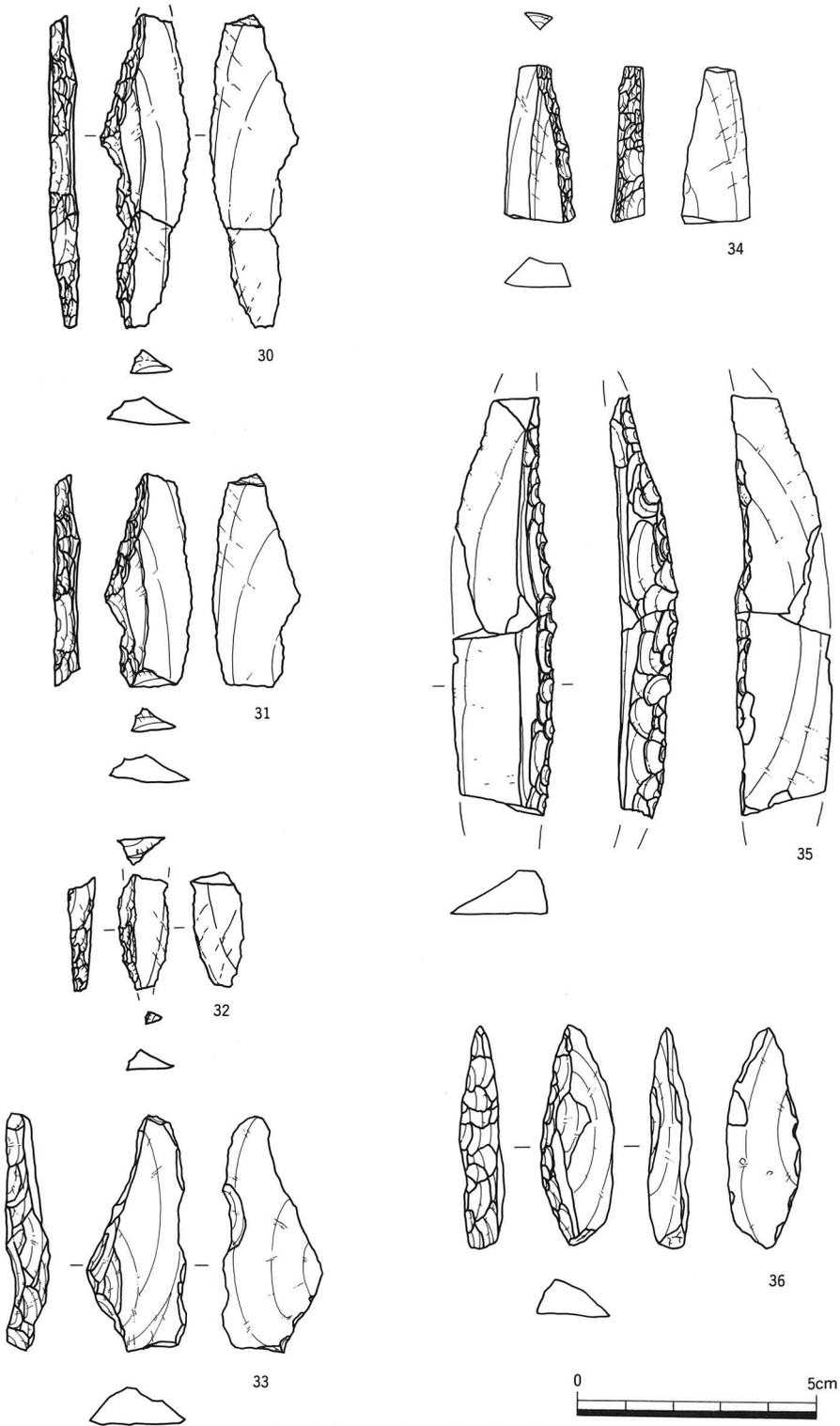
31は30の上半部である。背面はポジティブな剥離面の底面およびネガティブな剥離面の2枚、腹面はポジティブな剥離面1枚で構成される。素材となる剥片の打面部側の側縁に調整加工が施される。折損面には調整加工は認められない。下半部は製作途中で折損した物である。

32は30の下半部である。背面は底面であるポジティブな剥離面1枚と腹面のポジティブな剥離面で構成される。腹面側より素材である剥片の打面部側の側縁に調整加工が施される。基部は背面側からも調整加工が施される。

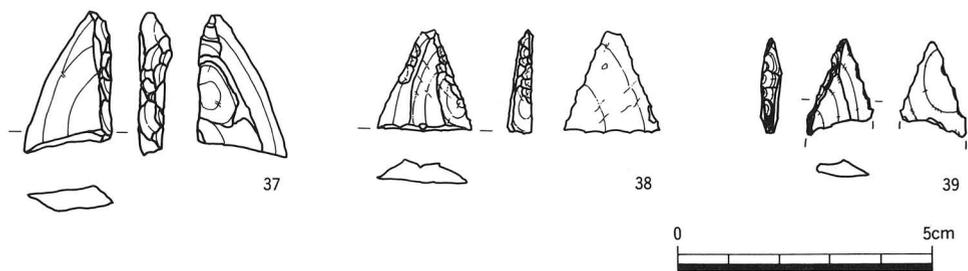
33は背面はポジティブな剥離面の底面とネガティブな剥離面で構成される。腹面はポジティブな剥離面1枚である。素材と成る剥片の側縁に腹面側より調整加工を施す。

34は背面は底面であるポジティブな剥離面とネガティブな剥離面の2枚、腹面はポジティブな剥離面1枚で構成されている。素材と成る剥片の側縁に背腹両面から調整加工が施されている。先端部と下半部は欠損している。

35は大型で細身のナイフ形石器である。小形のナイフ形石器が多数を占める本石器群の中で異質である。先端部と基部は欠損している。背面はポジティブな剥離面の底面とネガティブな剥離面2枚で、腹面はポジティブな剥離面1枚で構成される。素材となる剥片の打点側



第13図 ナイフ形石器 (1)



第14図 ナイフ形石器 (2)

の側縁に腹面側より急斜度な調整加工を施し、鋸歯状を呈している。このナイフ形石器に対応する石核は出土しておらず、サヌカイト原産地周辺からの搬入であろう。

36はファーストフレック素材と思われるナイフ形石器である。背面は底面のポジティブな剥離面とネガティブな剥離面の2枚で構成されている。腹面はポジティブな剥離面1枚で構成される。素材となる剥片の打面部側の側縁を腹面側より調整加工が施される。一部自然面が残存している。

37は背面をポジティブな剥離面の底面とネガティブな2枚の剥離面、腹面はポジティブな剥離面1枚で構成される。素材となる剥片の打面部側の側縁に背面側より調整加工を施している。器体下半部は欠損している。

38は背面はポジティブな剥離面の底面とネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面で構成されている。素材となる剥片の打面部側の側縁に腹面側より調整加工が施される。下半部を欠損している。

39はチャート製の国府型ナイフ形石器の先端部である。背面は底面に当たるとされるポジティブな剥離面とネガティブな剥離面を形成する。腹面側にはポジティブな剥離面1枚を持っている。打面部には素材である剥片の側縁に腹面側より調整加工を施している。

⑥スクレイパー (第15図)

包含層出土遺物の中でスクレイパーとみなしたものは3点(40・41・42)である。石材はすべてサヌカイトである。スクレイパーには素材として石核を転用したものと剥片を使用したものがある。以下、個々の石器について述べて行く。

40は翼状剥片石核転用のスクレイパーである。背面は自然面とネガティブな複数の剥離面、腹面はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面で構成される。背面部には石核の打面調整の複数のネガティブな剥離面がみられる。素材となる翼状剥片石核を半割して器形を整え、

打面部側の縁辺に腹面側より急斜度の調整加工を施し、刃部を作出している。

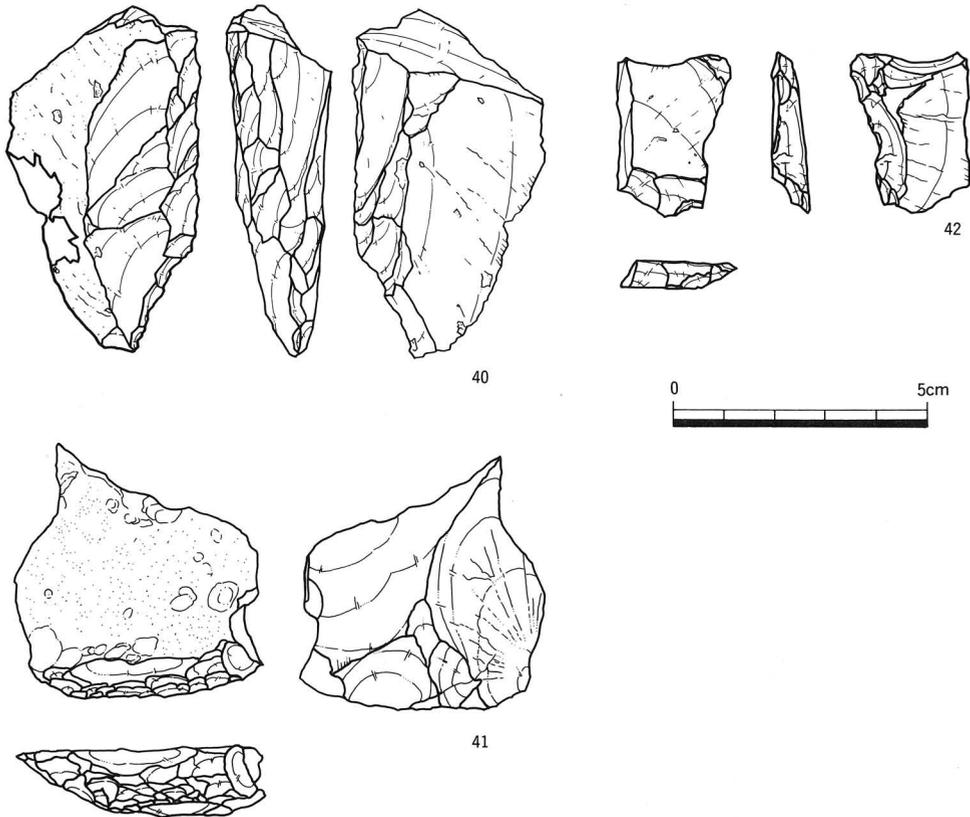
41は石核の打面調整剥片を素材として用いている。背面は自然面、腹面はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面で構成されている。素材と成る剥片を折断して器形を整え、刃部は背面と腹面の両側から急斜度の調整加工により作出している。

42は背面にネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面で構成している。剥片縁辺部に背面および腹面側から調整加工を施し、刃部を作出している。

①楔形石器 (第16図)

楔形石器は2点 (43・44) 出土している。2点とも石材はサヌカイトであり、風化が著しい。以下個々の石器について説明を行う。

43は素材として横長剥片を用いている。背面は複数のネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面1枚で構成される。右側縁辺部と下縁辺部に背面と腹面の両面から急斜度の調



第15図 スクレイパー

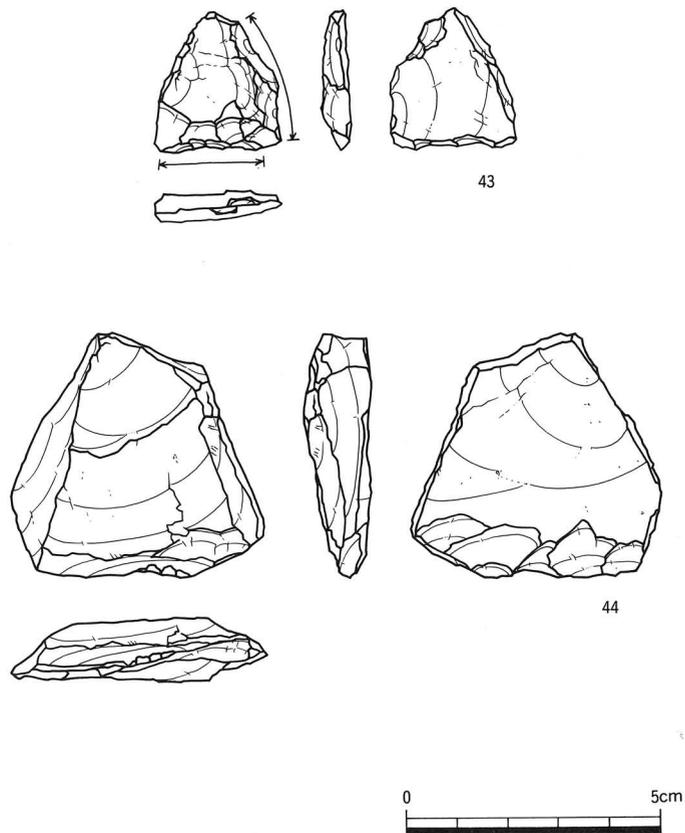
整加工を施し刃部を作出している。

44は横長剥片を素材として用いる。背面は複数のネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面で構成される。剥片の下縁辺部に背面と腹面の両面から急斜度の調整加工を施し刃部を作出している。

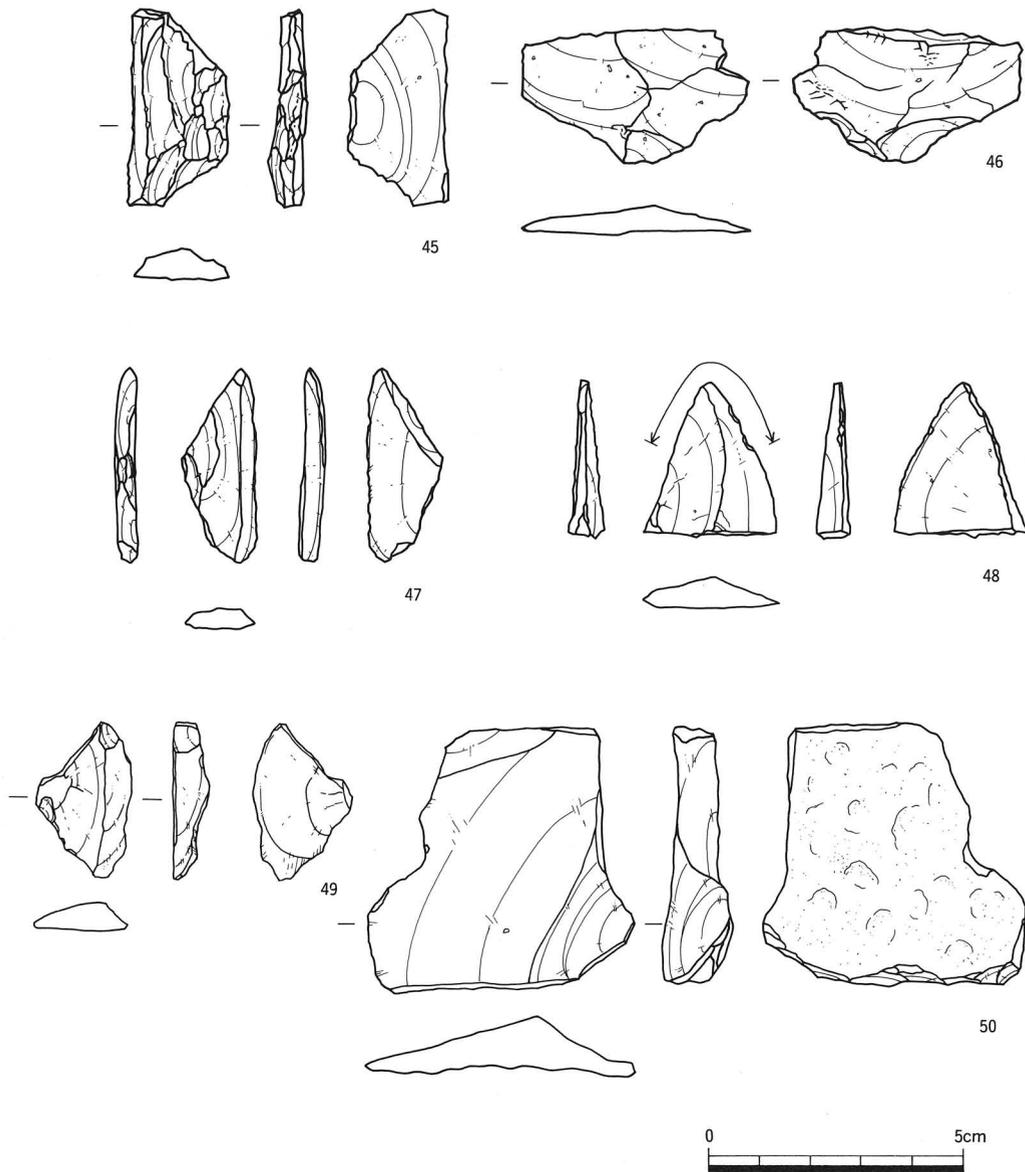
⑧剥片（第17・18図）

包含層出土の剥片は総数で37点出土し、そのうち実測を行ったのは12点である。剥片は瀬戸内技法関連資料の翼状剥片（45～49）と横長剥片（50～54）と縦長剥片（55）である。石材は全てサヌカイトを使用している。以下遺物の説明を行う。

45は翼状剥片である。背面は底面のポジティブな剥離面と複数のネガティブな打面調整痕の剥離面を持ち、腹面はポジティブな剥離面を構成している。打面部には打面調整痕がみら



第16図 楔形石器

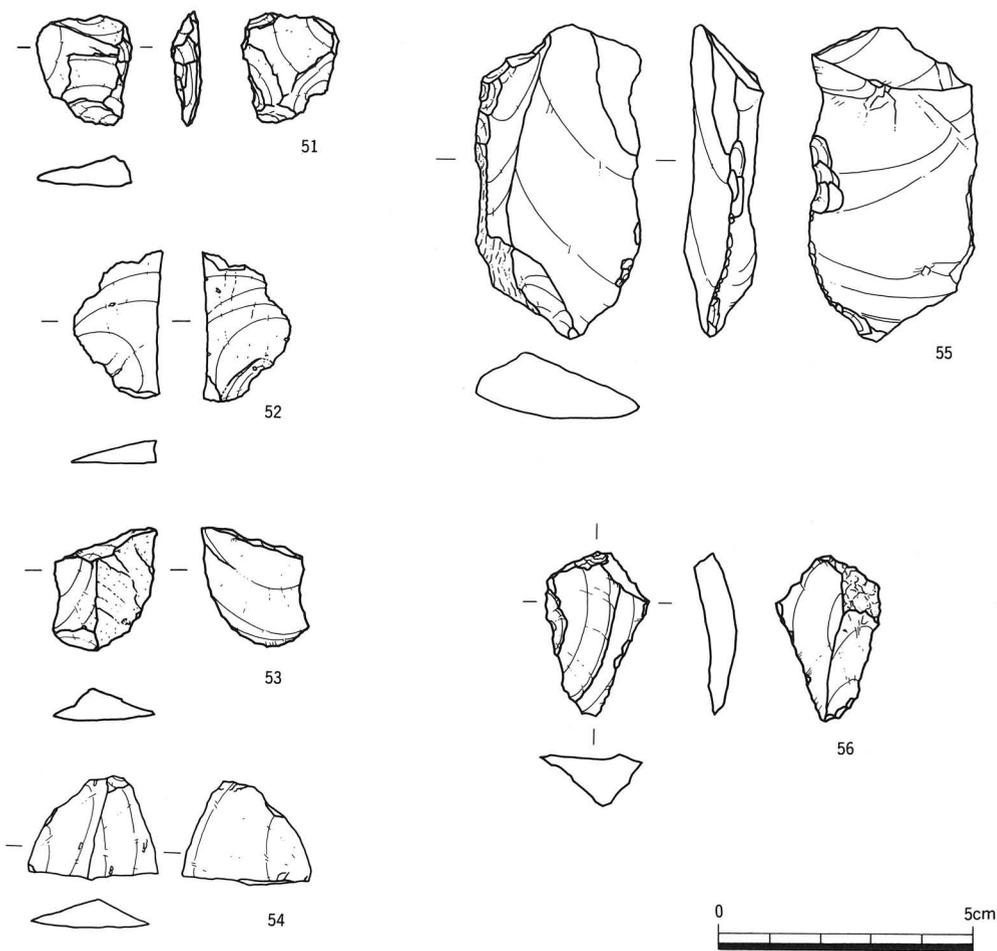


第17図 剥片 (1)

れる。

46は背面は複数のネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面1枚で構成される。打面部には打面調整痕がみられる。

47は背面は底面のポジティブな剥離面とネガティブな複数の剥離面を持ち、腹面はポジティブな剥離面1枚で構成される。打面部には打面調整痕がみられる。



第18図 剥片 (2)

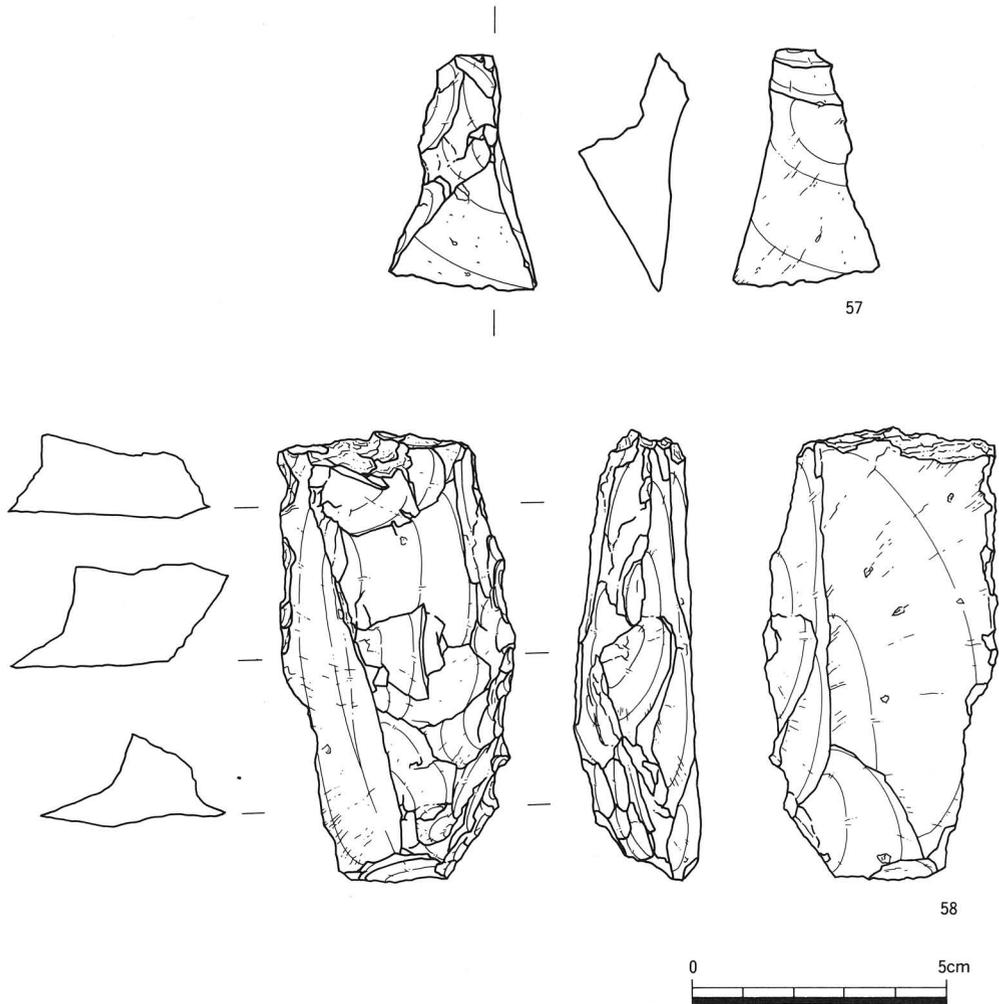
48は背面は底面に当たるポジティブな剥離面とネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面1枚で構成される。打面部には打面調整痕がみられる。

49は背面は底面のポジティブな剥離面とネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面で構成される。打面部は腹面側よりネガティブな打面調整痕がみとめられる。

50は石核の打面調整剥片と思われる。背面は自然面が残存している。腹面はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面で構成されている。

51はかなり風化が甚だしい。背面は複数のネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面とネガティブな複数の剥離面で構成される。石核の打面調整剥片と思われる。

52は背面はネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面で構成されている。調整剥片と思われる。



第19図 石核

53は石核の打面調整剥片と思われる。背面はネガティブな剥離面と一部自然面が残存し、腹面はポジティブな剥離面で構成されている。

54は背面はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面で構成されている。

55は背面はネガティブな複数の剥離面と一部自然面を残存している。腹面はポジティブな剥離面で構成されている。腹面の左縁辺部には背面側より急斜度の調整加工を持つ。剥片は形状、剥離の状況より石核の打面調整剥片と思われる。

56は打面調整剥片と思われる。背面は底面に当たるポジティブな剥離面とネガティブな剥離面、腹面はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面で構成される。剥片の上縁部には自

然面が残存している。

⑨石核（第19図）

包含層より出土した石核は2点（57・58）である。石核はいわゆる瀬戸内技法を技術基盤とした、翼状剥片石核である。石材はサヌカイトである。以下、個々の遺物の観察を行う。

57は背面はポジティブな剥離面とネガティブな複数の剥離面、腹面はポジティブな剥離面とネガティブな剥離面で構成される。背面の左側縁辺部には打面調整痕がみられる。

58は背面は瀬戸内技法第2行程に当たるネガティブな複数の打面調整痕、腹面はポジティブな剥離面とネガティブな複数の剥離面で構成される。上縁辺部には自然面が残存している。

(2) 縄文時代

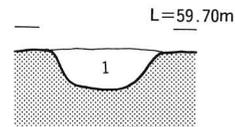
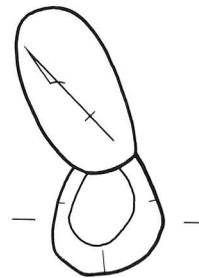
はじめに

本遺跡では縄文時代晩期に位置づけられる遺物が1点出土している。遺物はI調査区より検出された遺構より出土した。(第20図)しかし、遺物が本当に遺構出土のものか、流れ込みかは不明である。柱穴の状況もあわせて説明する。

柱穴

1798号柱穴 (SP1798) (第21図)

I調査区の南側T-19グリッドに位置し、SP1799に切にられた状態で検出された。平面プランは不整円形状を呈し、規模は長軸29cm、短軸26cm、深さ11cmを測る。断面はU字状を呈する。埋土は1層で、鈍い黄褐色砂質土である。遺物は埋土より出土している。



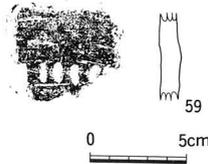
1 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土



第21図 SP1798実測図

出土遺物 (第22図)

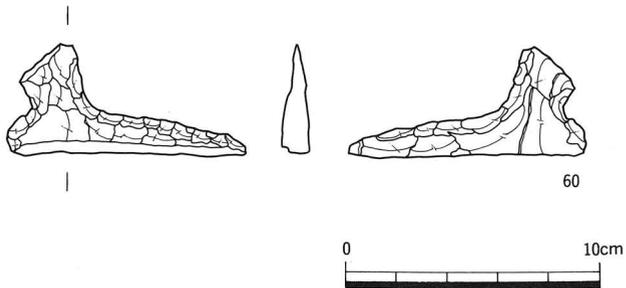
59は縄文土器の細片である。体部外面に爪形文を1条配している。



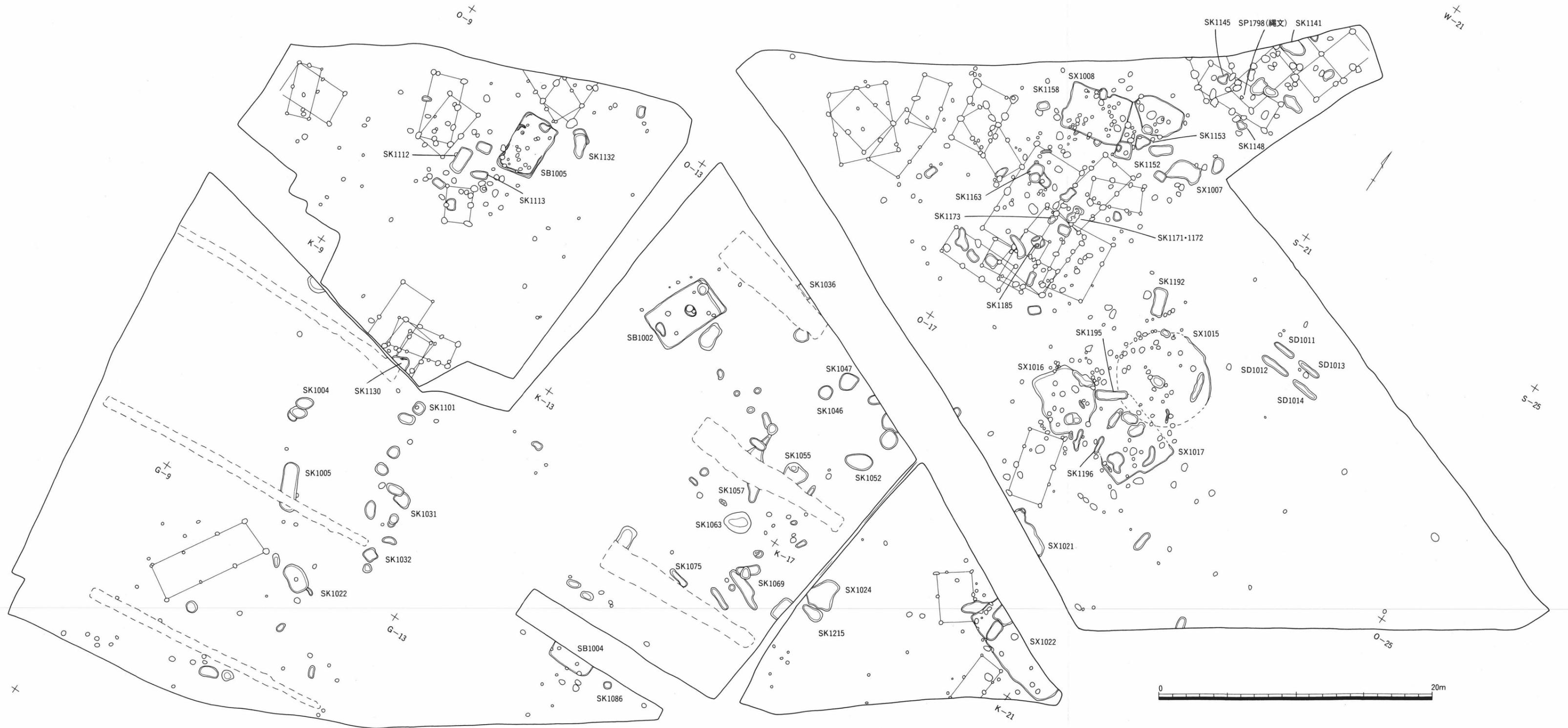
原下層式に位置する物と思われる。第22図 SP1798出土遺物実測図

包含層出土遺物

60はサヌカイト製の石匙である。(第23図)横長剥片を素材として用い、上部につまみの部分を作成している。刃部を欠損しており、全容は不明であるが横型と思われる。



第23図 遺物包含層出土遺物実測図



第20図 縄文・弥生時代遺構配置図

(3) 弥生時代

はじめに

縄文時代以後、日吉谷遺跡は弥生時代中期（Ⅱ～Ⅲ様式）の段階に再び遺構が検出される。この時代の遺構は、調査区の北側部分を中心に全域に広がっている。（第20図）

当期の最低限度確認できる主な遺構をまとめると、竪穴住居跡3・掘立柱建物跡33・土坑114・溝4・不明遺構15等が確認できた。しかし、時期を確定できる遺構は、弥生・古代・中世の遺構面を一括処理している事や、遺構自体からの出土遺物が少ないために、遺構検出密度は高いにもかかわらず少ない。掘立柱建物跡については柱穴出土遺物の中に時期確定が不明瞭な遺物も含まれるが、掘立柱建物跡として設定している。以下遺構・遺物の説明をおこなってゆく。

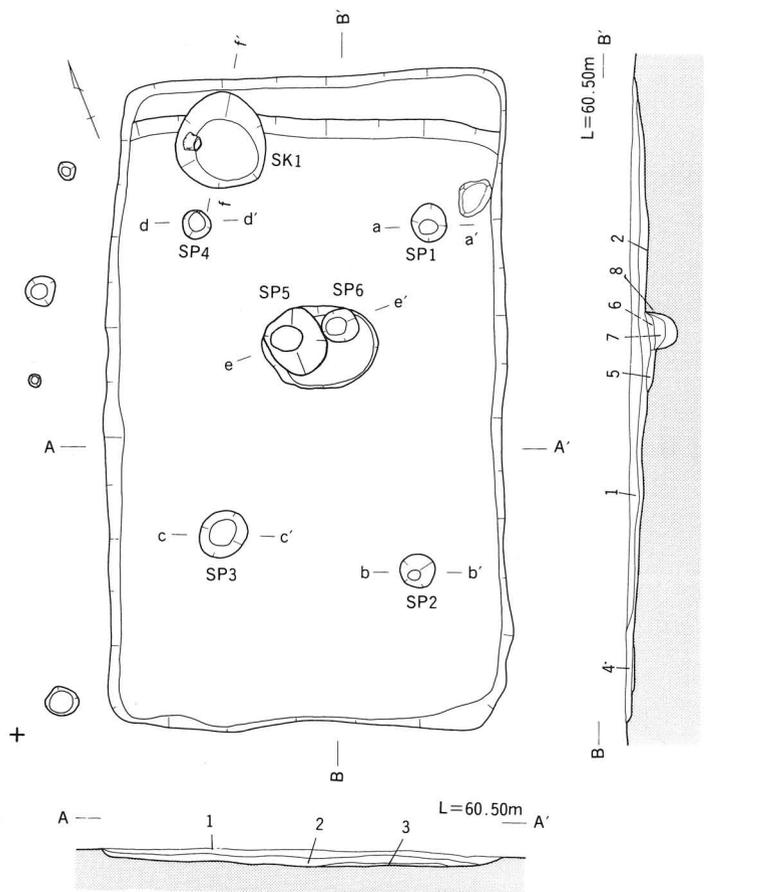
竪穴住居跡

2号竪穴住居（S B 1002）（第24図）

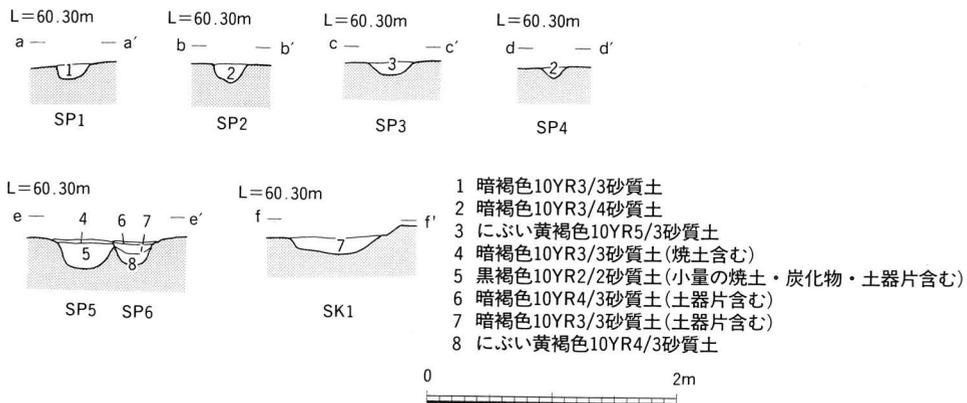
B調査区M-13グリット、調査区の北東側で検出され、S K 1035の西に位置する。平面プランは長方形を呈する竪穴住居跡である。本住居跡は南北方向に長い長方形で長辺525cm、短辺315cm、深さ9cmを測り、復元面積は16.96㎡を計る。主軸方位はN-21°-Eである。壁高は検出面から約8cmを測る。住居跡内の埋積土は3層に分層され、暗褐色砂質土（砂礫を少し含む）、暗褐色砂質土（砂礫を多く含む）、黒褐色砂質土（炭化物を含む）となる。内部構造は、北壁より幅80cmのベット状の高まりを持つ。

主柱穴と推定されるピットは4基確認されている。柱穴は直径22～38cm、深度は10cm前後を数え、4本主柱の構造が考えられる。各柱間距離はP 1 - P 2 が280cm、P 2 - P 3 が130cm、P 3 - P 4 が220cm、P 4 - P 1 が160cmを測る。

床面中央部に位置する炉跡は、ファイヤーピットを持っている。平面プランは不整円形状を呈し、規模は長軸84cm、短軸66cm、深さ24cmを測る。炉内の堆積状況は、暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、黒褐色砂質土の3層に分かれる。炭化物と焼土の広がり炉跡中央部分で認められる。また、南壁より北側20cm付近には長軸108cm、短軸60cmにわたって炭化物の広がりが検出された。北壁より南側10cm付近にはベット状遺構を切る形で土坑が検出された。平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸76cm、短軸70cm、深さ14cmを測る。床面は船底型を呈し、緩やかに傾斜している。遺構内埋積土は暗褐色砂質土である。土坑内からは直口壺の頸部より上の部分が横倒しの状態で検出された。土坑の性格は竪穴住居に伴う貯蔵穴と思われる。



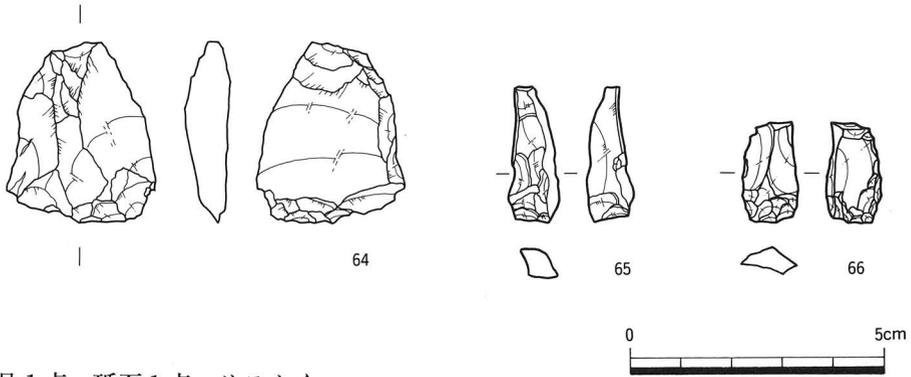
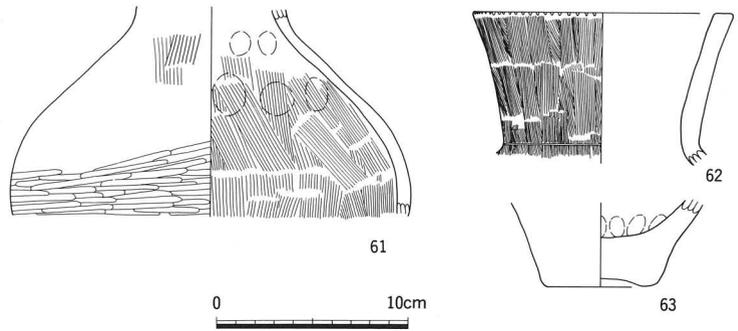
- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色10YR3/4砂質土(土器片含む) | 5 明赤褐色5YR5/6砂質土(焼土含む) |
| 2 暗褐色10YR3/3砂質土(土器片含む) | 6 暗褐色10YR4/3砂質土(土器片含む) |
| 3 黒褐色10YR3/2砂質土(土器片・炭化物含む) | 7 暗褐色10YR3/3砂質土(土器片含む) |
| 4 黒褐色10YR2/2砂質土(炭化物含む) | 8 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土 |



第24図 S B 1002実測図

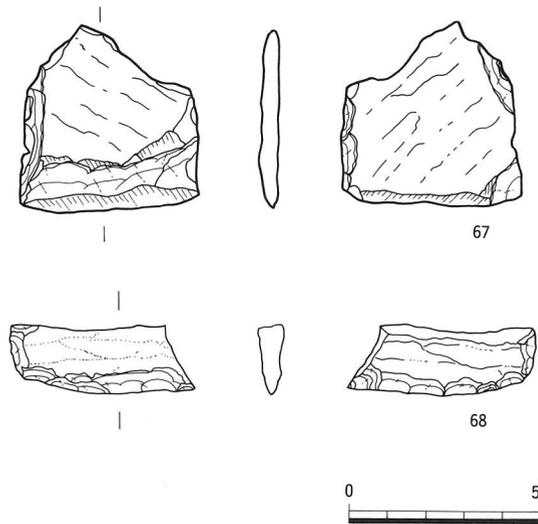
出土遺物(第25・26図)

出土遺物は壺形土器 6
点、甕形土器27点、弥生
土器細片414点、土師質土
器細片 2点、瓦質土器細
片 1点、紡錘車 1点、打
製石庖丁 1点、石鏃 2点、
楔形石器 4点、磨製石斧



状石製品 1点、砥石 1点、サヌカイ
ト片10点、結晶片岩片16点、チャ
ート片 1点、石英片 2点が出土した。
遺物は細片が多く図化可能な 9点を
示した。

61は壺形土器の頸部から体部中位
までの破片である。最大径を体部中
位に持ち、体部は緩やかに内湾しな
がら頸部に向かって立ち上がってい
る。調整は体部外面上位にタテハケ
メで部分的に調整し、体部中位にヨ
コヘラミガキがみられる。頸部内面
には指頭圧痕が認められ、体部はタ



第25図 S B 1002出土遺物実測図 (1)

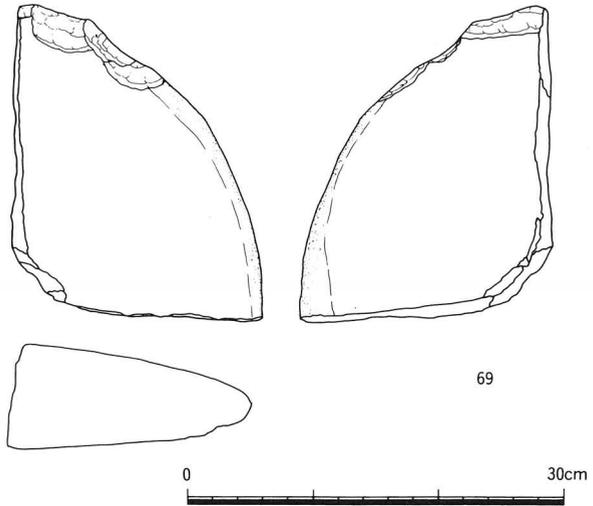
テハケメがみられる。62は直口壺の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁端部は平坦
におさめ、頸部より緩やかに外反している。口縁端部には刻目文がみられ、口縁部は内外面
ヨコナデ、外面はタテハケメで調整する。63は壺形土器の底部である。底部は上げ底を呈し
ている。これらの特徴より中期中様の様相を呈する物と思われる。

64～66はサヌカイト製の楔形石器である。64は台形状を呈し、下端部両面に調整加工を施し刃部を作出している。65は両側縁に裁断面を持ち、下端部両面に調整加工を施している。66は長方形形状を呈し一方の側縁に裁断面を配し、下端部両面に調整加工を施している。

67は結晶片岩製の磨製石斧状石製品である。薄い素材を用い、基部両面に研磨を施すことにより刃部を作出している。形状より偏平片刃石斧の破損品を再利用しているものと思われる。

68は打製石包丁の破片である。石材は結晶片岩を用いている。端辺は欠損しているため、全体の形状は不明である。下端部の両面に調整加工を施し刃部を作出している。

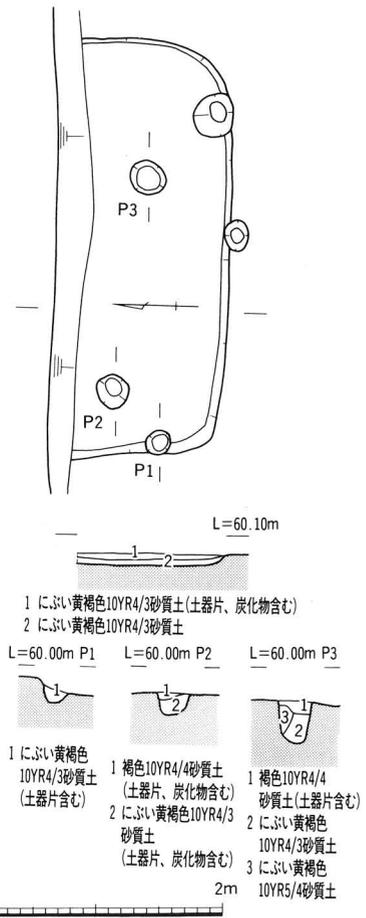
69は砂岩製の砥石である。両端を欠損しており全体の形状は不明であるが、両面に研磨痕が認められる。



第26図 S B 1002出土遺物実測図 (2)

4号竪穴住居 (S B 1004) (第27図)

B調査区南側に位置し、G-15グリットから検出された。S P 269・274が南壁の一部を切っている。全体の半分を調査したが、北半分は土地が取得できず、全体の規模は不明である。残存値で長軸340cm、短軸115cm、床面までの深さ14cmを測る。床面はほぼ平坦である。住居跡内の埋積土は、2層に分層され、にぶい黄褐色砂質土(炭化物を含む)、にぶい黄褐色砂質土となる。ピットは遺構内で5基確認されている。このうち支柱穴は2基と思われる。柱穴は直径24～28cm、深さ20～32cmを測る。支柱穴P2・P3間の柱間距離は177cmを測る。遺物は埋土中より弥生土器細片61点、土師器4点、サヌカイト片3点、



第27図 S B 1004実測図

結晶片岩片3点、石鏃1点出土しているが、遺物は細片のため実測可能遺物はみられない。

5号竪穴住居（S B 1005）（第28図）

E調査区北端微高地上に位置し、M・N-10グリットから検出された。平面プランは長方形を呈する竪穴住居跡である。本調査時に一部削平を受けている。規模は長軸450cm、短軸275cm、深さ8cmを測り、復元面積は12.15㎡である。主軸の方位はN-7°-Sを測る。住居跡内埋積土は暗褐色砂質土1層である。周溝は南壁と西壁で一部検出された。南壁では側壁に沿ってコの字状に中央付近にまでおよび、また、北西の隅に一部と西壁中央部付近にL字状に一部検出されている。規模は幅15cm、深さ5cmを測り、断面はU字状を呈する。

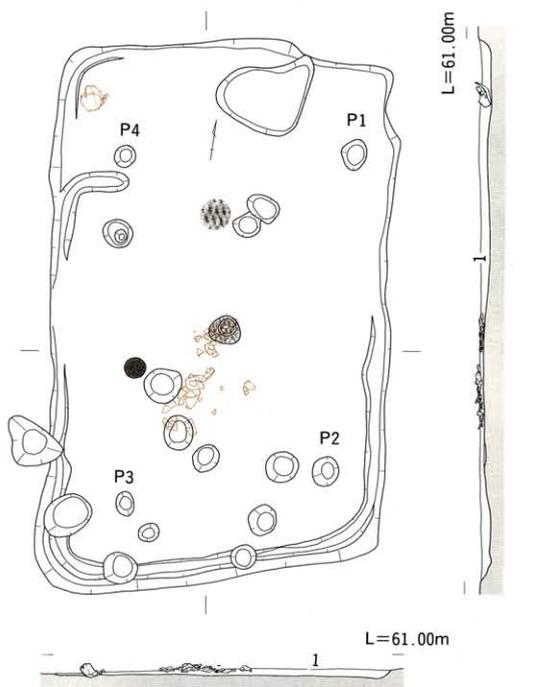
炉跡は住居中央部やや北寄りに長径28cmの大きさに焼土の広がり確認されており、地床炉であったと考えられる。

住居跡内出土の柱穴は19ヶ所確認されている。このうち主柱穴はP-1からP-4は直径17~24cm、深度8~16cmを測る、4本主柱の構造と思われる。各柱穴間距離はP-1からP-2が240cm、P-2からP-3が150cm、P-3からP-4が274cm、P-4からP-1が168cmを測る。また、北壁中央付近には直軸78cm、短軸56cmを測る土坑が検出されている。土坑内の埋積土は、少量の炭化物と土器片が混入しており、貯蔵穴的な性格を持つ物であろう。床面からは北西壁付近から壺形土器が横倒しの状態で、また床面中央付近で土器と炭化物が集中的に出土している。

出土遺物（第29図）

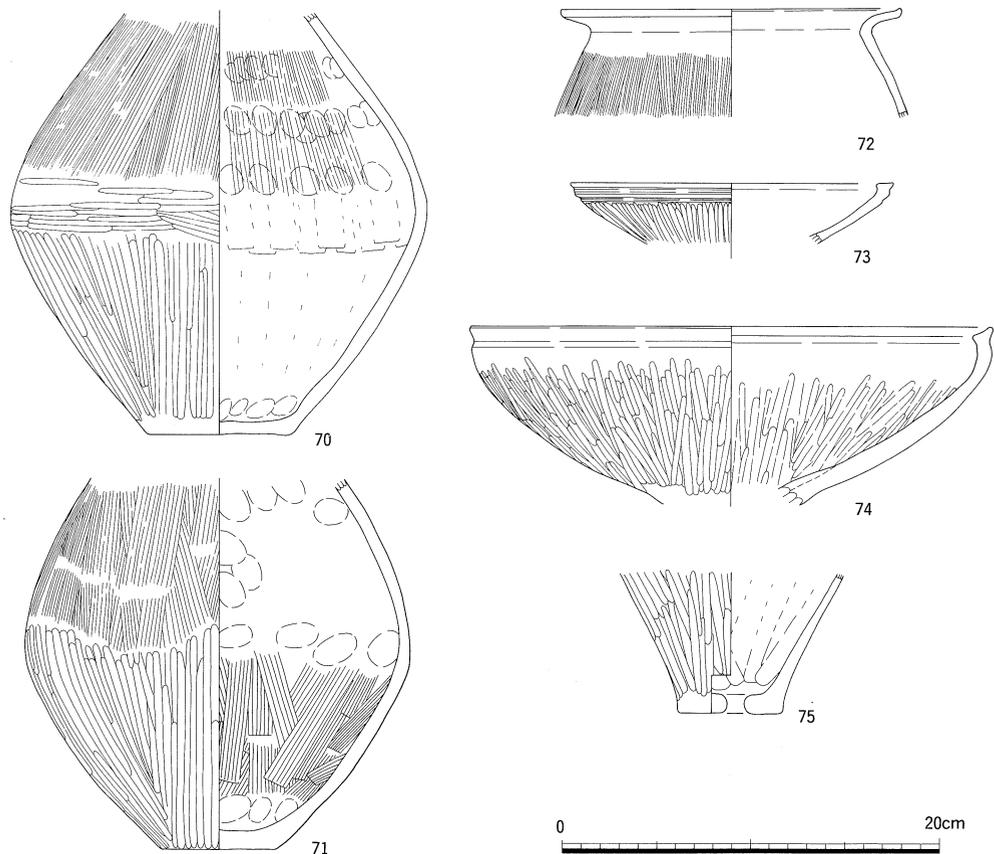
出土遺物は壺形土器2点、甕形土器4点、高杯形土器3点、弥生土器細片171点、サヌカイト片4点、結晶片岩片1点が出土した。遺物は細片が多く実測可能な6点を図化した。

70・71は壺形土器の体部である。体部は算盤玉形に横にやや強く張り出し、体部中位に最



1 暗褐色10YR4/4砂質土

第28図 S B 1005実測図



第29図 S B 1005出土遺物実測図

大径がくる。底部は平底である。70は体部外面上位にタテハケメ、中位にヨコヘラミガキ、下位にタテヘラミガキで調整する。体部内面は上位に指頭圧痕の後、タテハケメ、中位から底部にかけてイタナデを施している。71は体部外面上位にタテハケメ、中位以下はタテヘラミガキで調整する。体部内面上位は指頭圧痕、下位はタテハケメが顕著にみられる。72は甕形土器である。口縁端部は方形におさめられ、やや上方に拡張される。口縁部は「く」の字状に外反している。体部外面はタテハケメ、口縁部は内外面ヨコナデである。73・74は高杯形土器である。73は口縁端部方形におさめ、端部は両端がやや拡張される。体部は皿状を呈し、口縁部外面に2条の凹線文を施している。体部外面はタテヘラミガキで調整される。74は口縁端部が両端に拡張され、口縁部はやや内湾して立ち上がる。体部は皿状を呈し、口縁部外面に1条の凹線文を施している。体部は内外面をタテヘラミガキで調整される。75は甕形土器の底部である。底部は平底を呈し、底部中央に穿孔が認められる。体部外面にタテヘラミガキ、内面をタテヘラケズリで調整される。これらの特徴より中期中様から後様に向け

ての様相を呈する物と思われる。

掘立柱建物跡

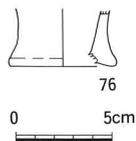
1号建物跡（S A 1001）（第30図）

A調査区F・E-9・10グリッドから検出され、調査区の中央寄りに位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-30°-Eで、梁間1間、桁行3間である。梁間2.6m、桁行7.8mを測る。柱穴はP-1からP-8を確認しており、柱穴間距離は梁間2.6m、桁行2.3~2.7mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径20~50cmを測る。柱穴深度は6~28cmを数える。出土遺物はピット内埋土より弥生土器細片が出土している。

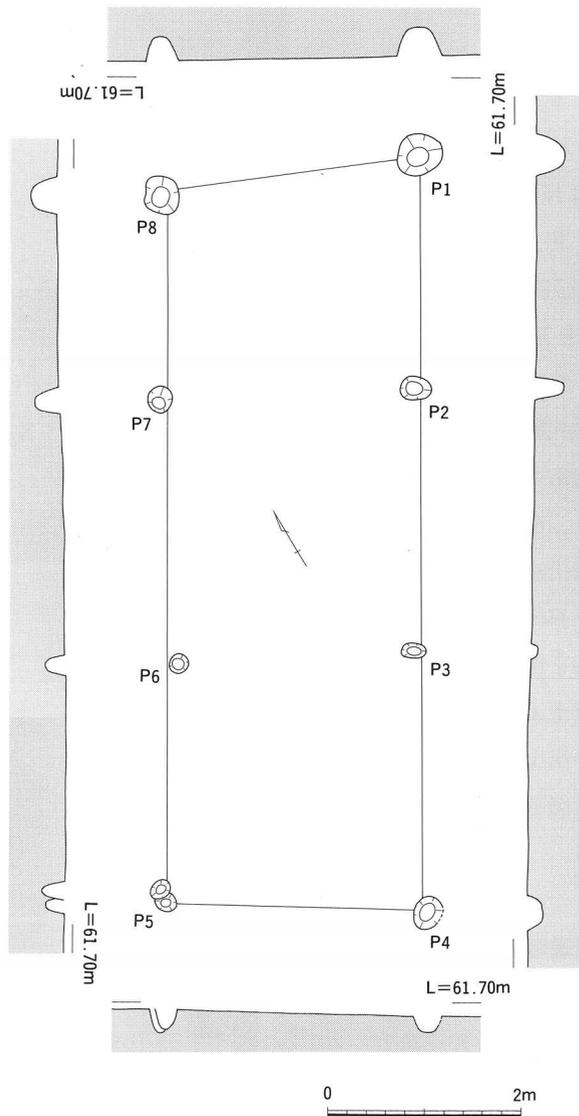
出土遺物（第31図）

出土遺物は甕形土器1点、弥生土器細片6点が出土した。

76は甕形土器の底部



第31図 S A 1001出土遺物実測図



第30図 S A 1001実測図

である。底部はやや上げ底を呈している。体部に向かいやや内湾しながら立ち上がる。

2号建物跡

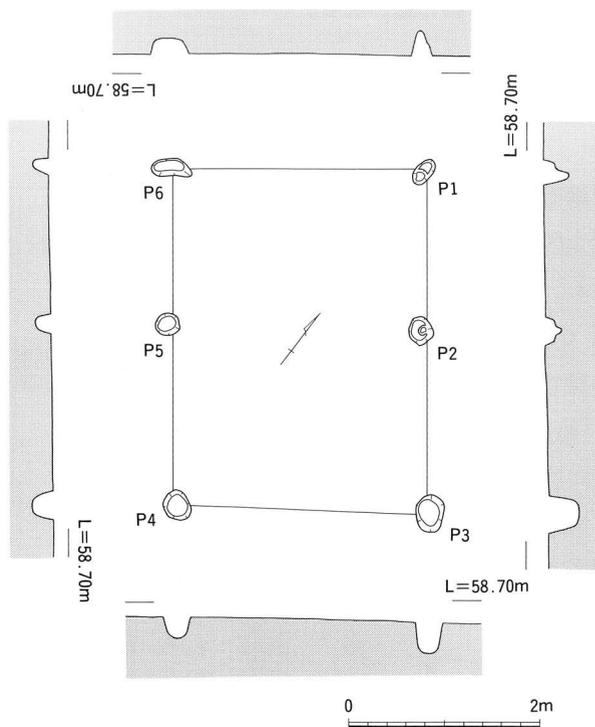
(S A 1002) (第32図)

D調査区の東側に位置し、K・L-19・20グリッドから検出された掘立柱建物跡である。主軸はN-38°-Wで、梁間1間、桁行2間であり、梁間2.7m、桁行3.4mを測る。柱穴はP-1からP-6を数え、柱穴間距離は梁間2.7m、桁行1.5~1.8mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径20~44cm、深度は4~26cmを測る。出土遺物は埋土より弥生土器細片が出土しているが、実測可能遺物は認められない。

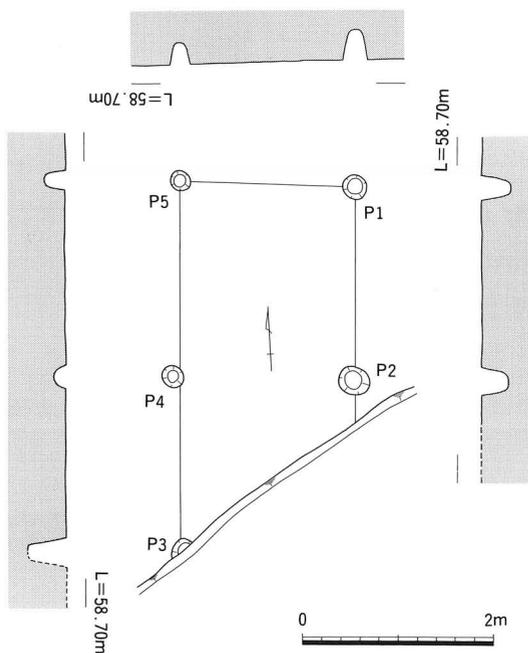
3号建物跡

(S A 1003) (第33図)

D調査区J・K-20グリッドから検出され調査区の南端に位置する掘立柱建物跡である。

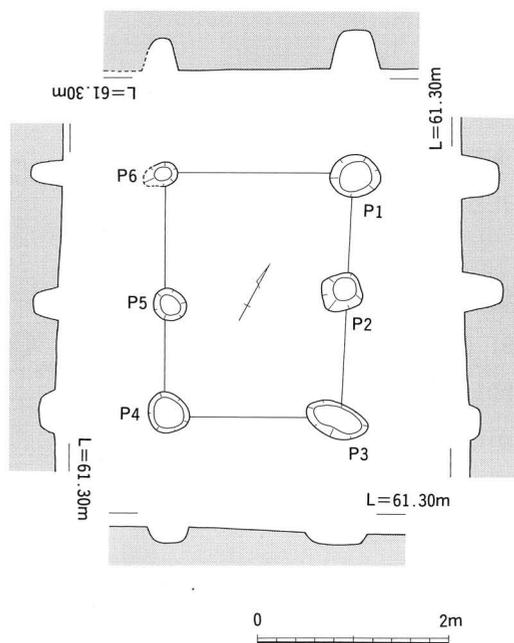


第32図 S A 1002実測図



第33図 S A 1003実測図

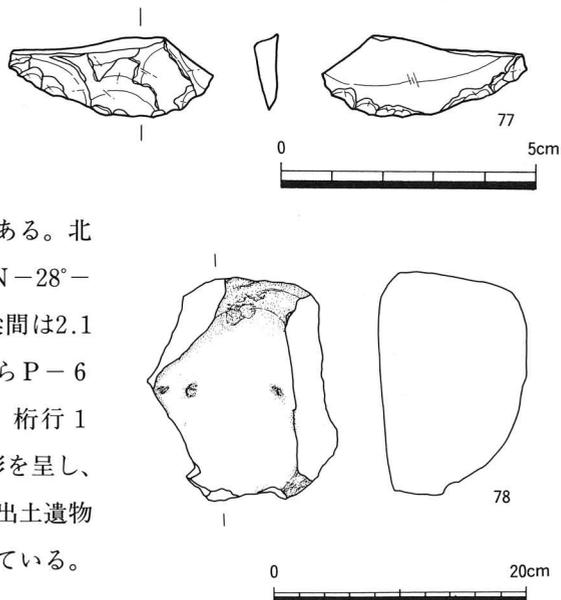
南側部分は調査区外のため全様は不明である。主軸はN-3°-Eで、梁間1間、桁行2間以上を数える。梁間1.8m、桁行3.7m以上を数える。柱穴はP-1からP-5を数え、柱穴間距離は梁間1.8m、桁行1.8~1.9mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径22~31cm、深度は8~40cmを測る。出土遺物は埋土より弥生土器細片が出土しているが、細片のため実測可能遺物は認められない。



第34図 S A 1004実測図

4号建物跡 (S A 1004) (第34図)

E調査区の中央に位置し、L-10グリッドから検出された掘立柱建物跡である。北側にはS B 1005が位置している。主軸はN-28°-Wで、梁間1間、桁行2間を数える。梁間は2.1m、桁行は2.5mを測る。柱穴はP-1からP-6を数え、柱穴間距離は梁間1.8~2.1m、桁行1~1.3mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径22~63cm、深度は9~41cmを測る。出土遺物は埋土より弥生土器細片、砥石が出土している。



第35図 S A 1004出土遺物実測図

出土遺物 (第35図)

出土遺物は弥生土器細片、リタッチド・フレイク、砥石が出土した。

77はサヌカイト製のリタッチド・フレイクである。横長剥片を素材とし、下縁部に調整加

工を施している。

78は砥石である。砂岩の自然礫を用い、礫の表面中央部に研磨痕が認められる。

5号建物跡

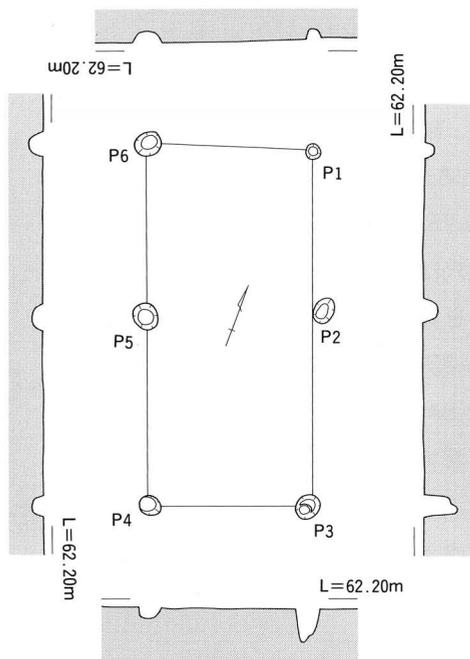
(S A 1005) (第36図)

E調査区L・M-7グリッドから検出され、調査区の西側に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-20°-Wで、梁間1間、桁行2間を数える。梁間1.7m、桁行3.7mを測る。柱穴はP-1からP-6を数え、柱穴間距離は梁間1.7m、桁行1.6~2mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径15~28cm、深度は6~36cmを測る。出土遺物は埋土より弥生土器細片が出土している。

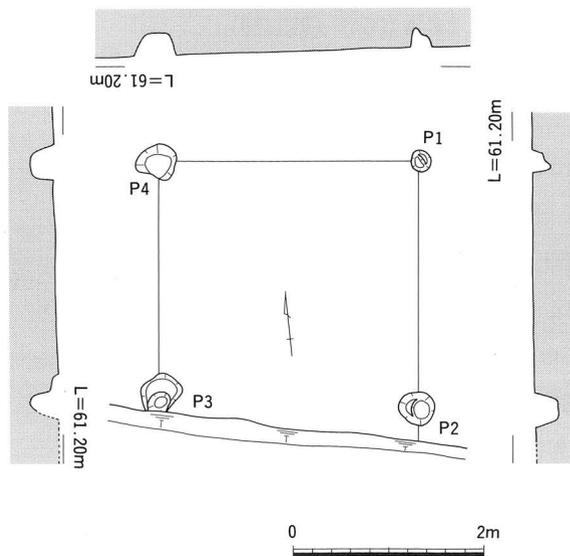
6号建物跡

(S A 1006) (第37図)

E調査区J-10・11グリッドから検出された掘立柱建物跡である。調査区の南端に位置する。南側部分は調査区外のため、全様は不明である。主軸はN-5°-Eで、梁間1間、桁行

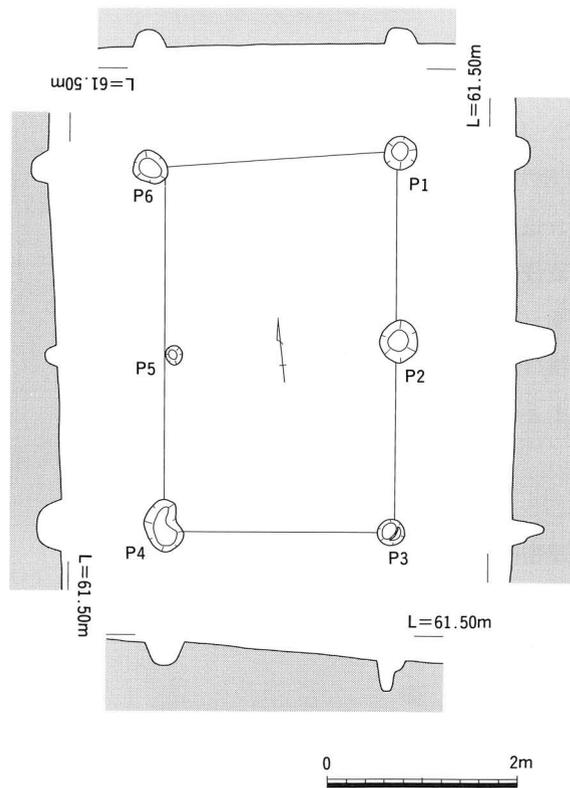


第36図 S A 1005実測図



第37図 S A 1006実測図

2間以上を数え、梁間2.6m、桁行2.5m以上を測る。柱穴はP-1からP-4以上を数え、柱穴間距離は梁間2.6m、桁行2.5mを測る。平面プランは楕円形を呈し、柱穴の直径は18~51cm、深度は18~28cmを測る。出土遺物は弥生土器細片が埋土より出土している。



第38図 S A 1007実測図

7号建物跡

(S A 1007) (第38図)

E調査区M・N-9・10グリッドから検出され、調査区の北側に位置する掘立柱建物

跡である。主軸はN-5°-Eで、梁間1間、桁行2間を数える。梁間は2.6m、桁行は3.8mを測る。柱穴はP-1からP-6を数え、柱穴間距離は梁間2.6m、桁行1.7~1.9mを測る。平面プランは楕円形を呈し、柱穴の直径は19~50cm、深度は4~42cmを測る。出土遺物は弥生土器細片が埋土より出土している。

8号建物跡 (S A 1008) (第39図)

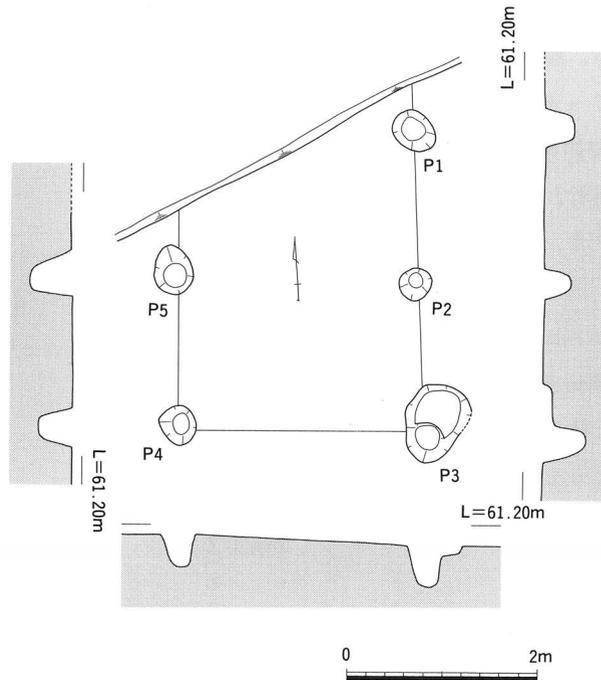
E調査区の北端に位置し、N・O-10・11グリッドから検出された、掘立柱建物跡である。北側部分は調査区外のため、全様は不明である。主軸はN-5°-Eで、梁間1間、桁行2間以上を数え、梁間2.5m、桁行3.3mを測る。柱穴はP-1からP-5までを数える。柱穴間距離は梁間2.5m、桁行1.6mを測る。平面プランは楕円形を呈しており、柱穴の直径は32~90cm、深度は25~44cmを測る。出土遺物は弥生土器細片を埋土より出土している。

9号建物跡 (S A 1009) (第40図)

E調査区J-10・11グリッドから検出され、調査区の南端に位置する掘立柱建物跡である。

主軸はN-80°-Eで、梁間1間、桁行3間を数え、梁間2.1m、桁行4.4mを測る。柱穴はP-1からP-8を数え、

柱穴間距離は梁間1.6~2.1m、桁行1.2~1.8mを測る。平面プランは円形を呈し、柱穴の直径は20~39cm、深度は9~39cmを測る。出土遺物は弥生土器細片を埋土より出土している。

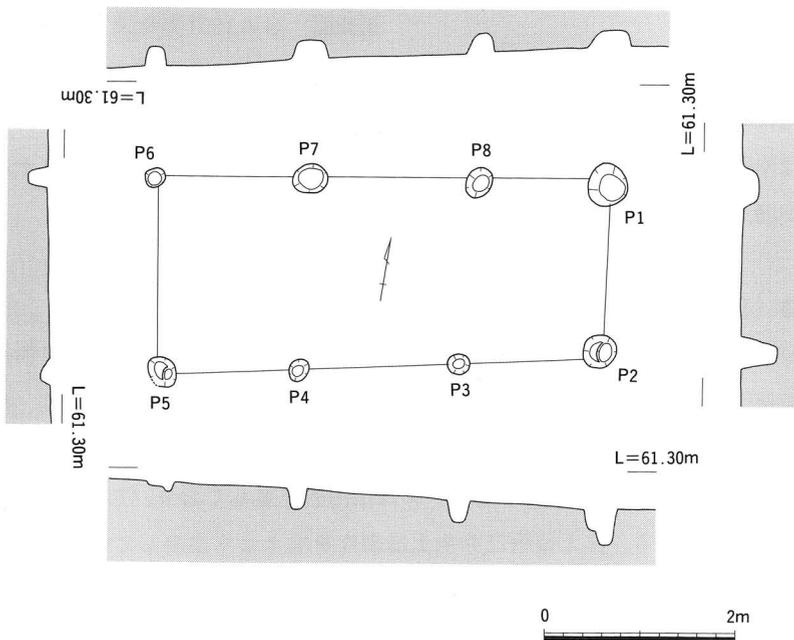


第39図 S A 1008実測図

10号建物跡

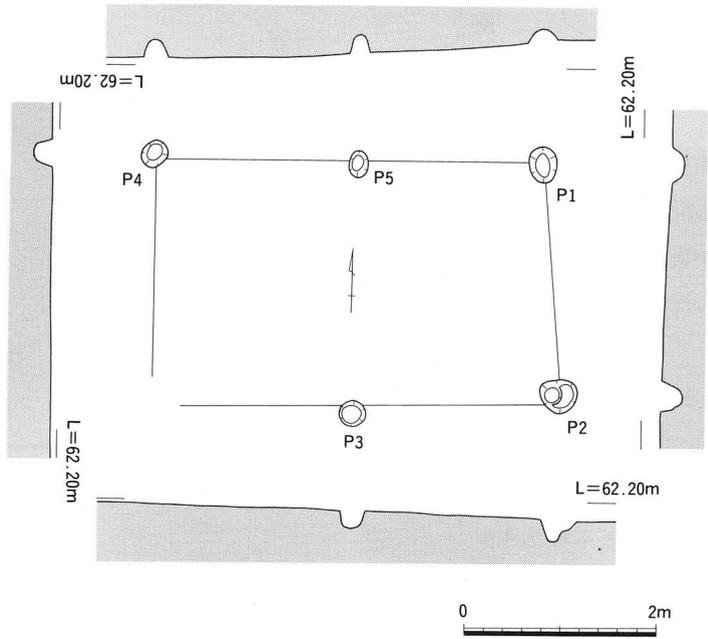
(S A 1010) (第41図)

E調査区L-8グリッドから検出され、調査区の西側に位置する



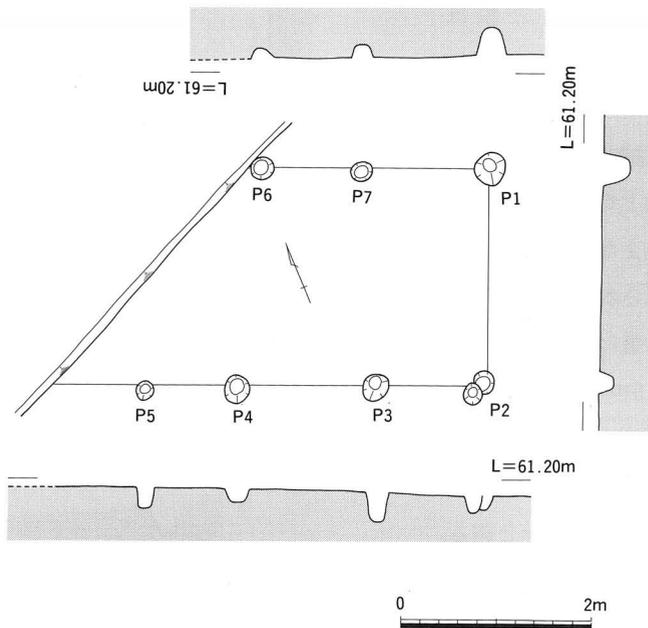
第40図 S A 1009実測図

掘立柱建物跡である。主軸はN-88°-Eで、梁間1間、桁行2間を数える。梁間2.5m、桁行3.9mを測る。柱穴はP-1からP-5までを数えるが、南西端の柱穴は遺構面を掘削しており検出できなかった。柱穴間距離は梁間2.5m、桁行1.8~2.1mを測る。柱穴の平面プランは総じて円形を呈しており、柱穴の直径は21~38cm、深度は10~20cmを測る。出土遺物は埋土より弥生土器細片、石斧が出土しているが、実測可能遺物は認められない。



第41図 SA 1010実測図

11号建物跡
(SA 1011) (第42図)
E調査区の北端に位置し、N-10・11グリッドから検出された掘立柱建物跡である。主軸はN-67°-Wで、梁間1間、桁行3間以上を数える。梁間2.2m、桁行3.3m以上を測るが、北側部分は調査区外に位置し、全様は不明である。柱穴はP-1からP-7まで数える。柱穴間距離は梁間



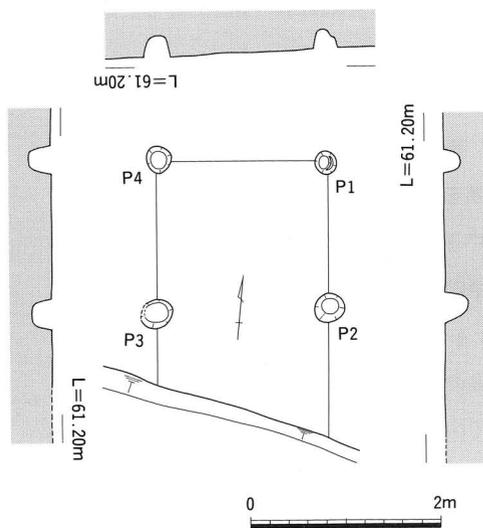
第42図 SA 1011実測図

2.2m、桁行0.9~1.4mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径は17~32cm、深度は13~28cmを測る。出土遺物は埋土より弥生土器細片が出土しているが実測可能遺物は認められない。

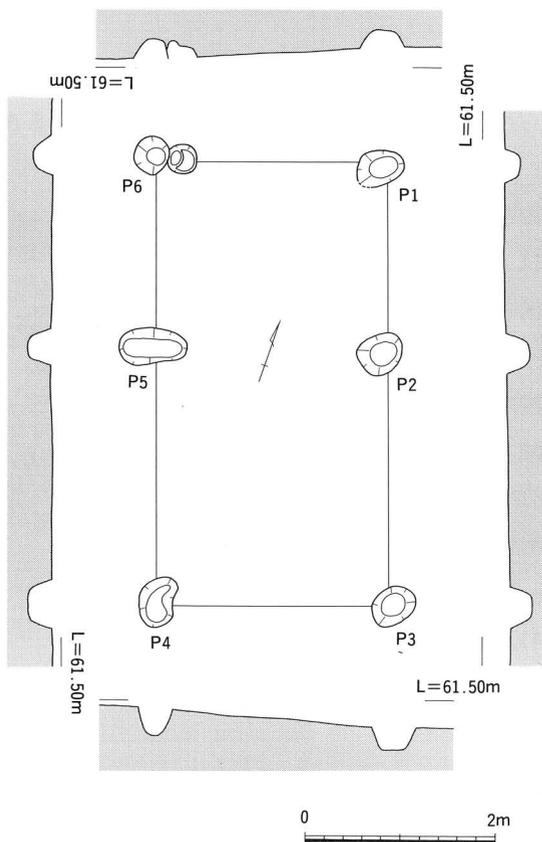
12号建物跡

(S A 1012) (第43図)

E調査区J-10・11グリッドから検出され、調査区の南端に位置する掘立柱建物跡である。調査区の南側は調査区外のため遺構の全様は不明である。主軸はN-5°-Wで、梁間1間、桁行2間以上を数え、梁間1.6m、桁行1.6m以上を測る。柱穴はP-1からP-4まで確認されている。柱穴間距離は梁間1.6m、桁行1.6mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈して、直径19~30cm、深度は19~25cmを測る。出土遺物は埋土より弥生土器細片が出土しているが実測可能遺物は



第43図 S A 1012実測図



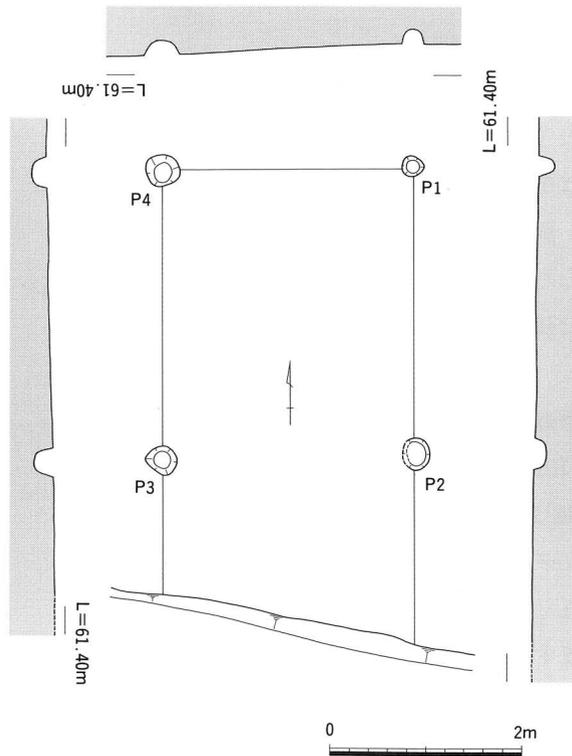
第44図 S A 1013実測図

認められない。

13号建物跡 (S A 1013)

(第44図)

E調査区の北側に位置し、M・N-9・10グリッドから検出された、掘立柱建物跡である。主軸はN-20°-Wで、梁間1間、桁行2間を数え、梁間2.4m、桁行4.7mを測る。柱穴はP-1からP-6まで確認され、柱穴間距離は梁間2.3~2.4m、桁行1.9~2.7mを測る。柱穴の平面プランは円形と一部楕円形状を呈し、直径33~70cm、深度



第45図 S A 1014実測図

は13~25cmを測る。出土遺物は埋土より弥生土器細片が出土しているが実測可能遺物は認められない。

14号建物跡 (S A 1014) (第45図)

E調査区J・K-10・11グリッドから検出され、調査区の南端に位置する掘立柱建物跡である。南側部分は調査区外に当たり、全様は不明である。主軸はほぼ南北方向を示し、梁間1間、桁行2間以上を数え、梁間2.6m、桁行3m以上を測る。柱穴はP-1からP-4まで確認され、柱穴間距離は梁間2.6m、桁行3mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈してをり、直径20~31cm、深度は11~16cmを測る。遺物は弥生土器細片が出土しているが実測可能遺物は認められない。

15号建物跡 (S A 1015) (第46図)

F調査区P・Q-18グリッドから検出され、調査区の中央に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-1°-Wで、梁間1間、桁行4間を数えるが、やや不揃いである。柱穴はP-1からP-9まで確認され、梁間3.3m、桁行4.8mを測る。柱穴間距離は梁間3.3~2.9m、桁行

1～1.6mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径17～43cm、深度は3～25cmを測る。遺物は壺形土器、甕形土器、弥生土器細片が出土したが、実測可能遺物は認められない。

16号建物跡

(S A 1016) (第47図)

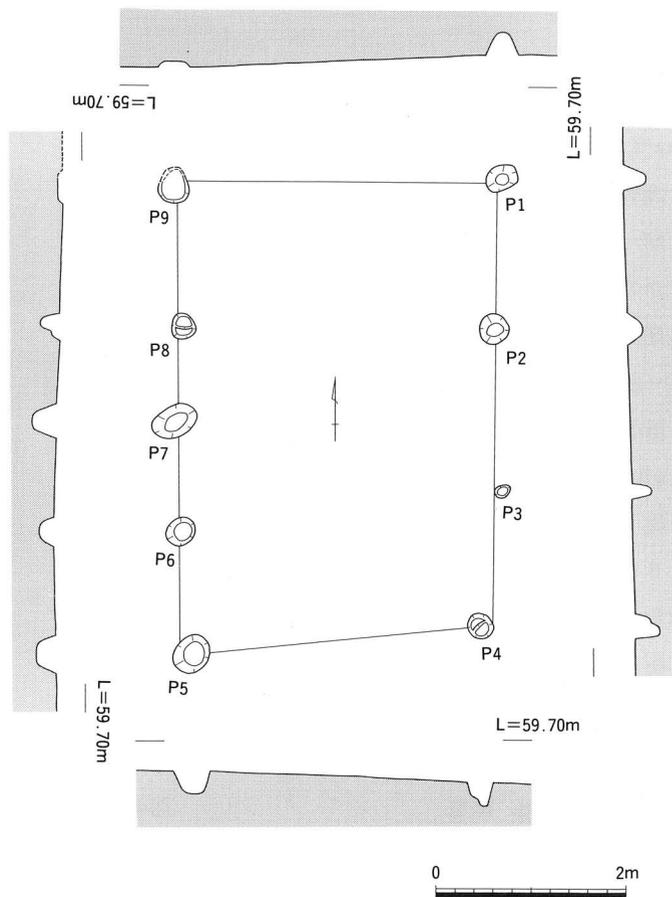
F 調査区 Q・R-15・16グリッドから検出され、調査区の北側に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-5°-Wで、梁間1間、桁行3間を数える。柱穴はP-1からP-8まで確認され、梁間2.4m、桁行3.9mを測る。

柱穴間距離は梁間2.4m、桁行1.1m～1.5mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈したものと、楕円形状のものが認められる。柱穴は直径33～70cm、深度は36～53cmを測る。遺物は埋土より出土している。

出土遺物 (第48図)

遺物は壺形土器3点、甕形土器2点、弥生土器細片86点、打製石庖丁1点、石鏃1点、叩石1点が出土している。遺物は細片がほとんどであるが実測可能遺物6点を図化した。

79はP-7より出土した壺形土器の口縁部の破片である。口縁端部を方形におさめ、上下に拡張している。口縁部は緩やかに外反し、端部に斜交子文を施している。80はP-7より出土した壺形土器の体部の破片である。体部外面には上から簾状文、波状文、扇形文を1条ずつ施している。81はP-8から出土した甕形土器の口縁部の破片である。口縁端部を方形におさめ、端部を上下に拡張している。口縁部は「く」の字状に外反する。これらの遺物は



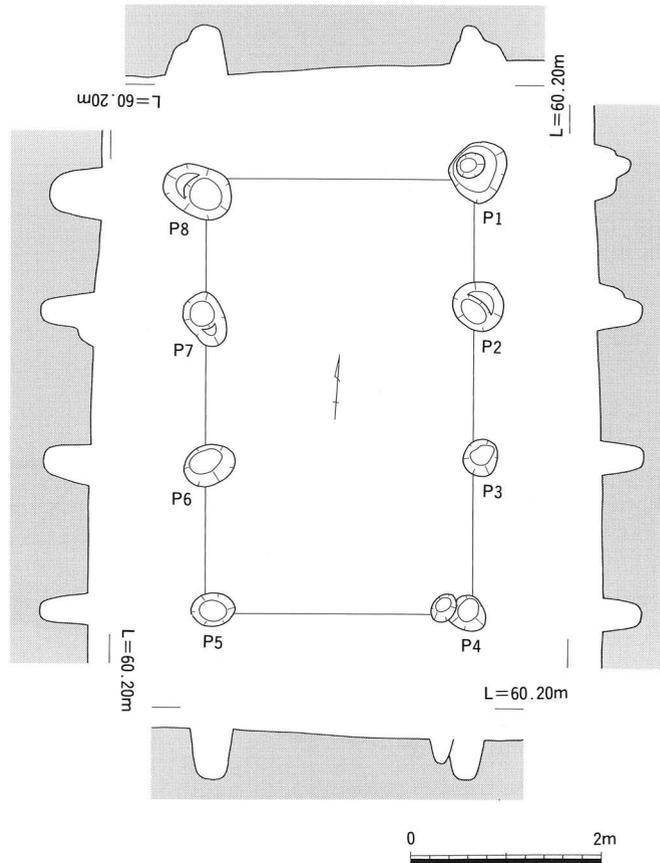
第46図 S A 1015実測図

中期中様の特徴を示す物と思われる。

82はP-4出土のサヌカイト製の石鏃である。基部を欠損しているが、両側縁に粗い調整加工を施している。

83はP-7より出土した結晶片岩製の打製石庖丁である。薄手の剥片を素材とし、両側縁両面に調整加工を施し刃部を作出している。端部に抉りは認められない。

84はP-3出土の叩石である。石材は結晶片岩をもち、素材として細長い楕円形状の礫を利用している。上部を欠損しているが、両側縁には敲打痕が認められる。



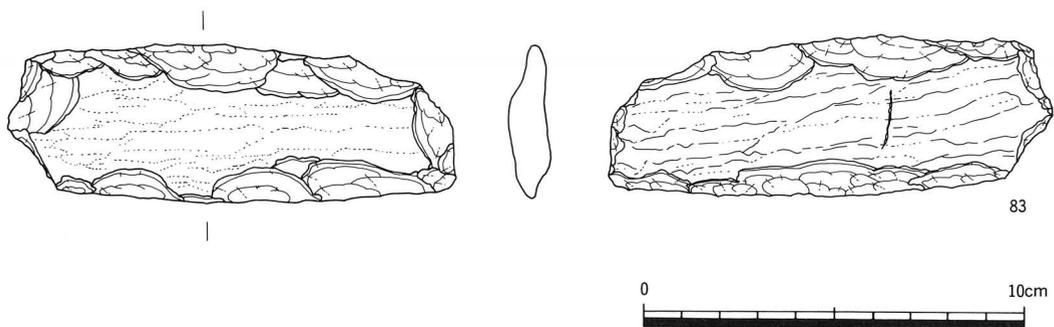
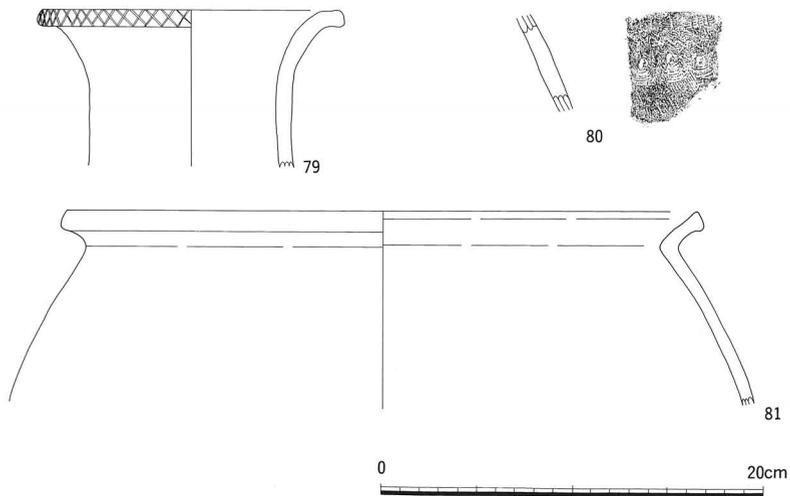
第47図 S A 1016実測図

17号建物跡 (S A 1017) (第49図)

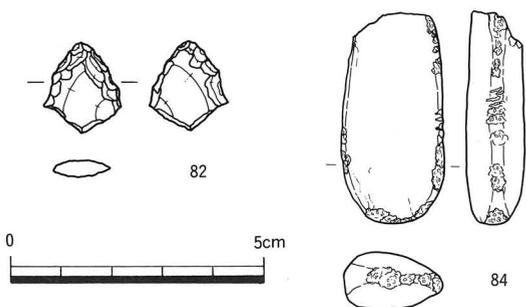
F調査区P・Q-16・17グリッドより検出され、調査区の中央に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-1°-Wで、梁間1間、桁行2間を数える。柱穴はP-1からP-6まで確認され、梁間3m、桁行5.5mを測る。柱穴間距離は梁間3m、桁行2.4~3.1mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈し、直径は30~63cm、深度は13~33cmを測る。遺物は埋土より弥生土器細片が出土しているが実測可能遺物は認められない。

18号建物跡 (S A 1018) (第50図)

F調査区P-17グリッドから検出され、調査区の中央に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-4°-Wで、梁間1間、桁行2間を数える。柱穴はP-1からP-6まで確認され、



梁間1.9m、桁行4.1mを測る。柱穴間距離は梁間1.9m、桁行1.8~2.1mを測り、柱穴の平面プランは円形を呈し、直径は18~36cm、深度は16~28cmを測る。遺物は埋土より甕形土器、弥生土器細片が出土しているが実測可能遺物は認められない。



19号建物跡 (S A 1019) (第51図)

F 調査区の北側に位置し、Q-15グリットから検出された掘立柱建物跡である。主軸はN-13°-Wで、梁間1間、桁行2間を数える。柱穴はP-1からP-6まで確認され、梁間2.2m、桁行3.4mを測る。柱穴間距離は梁間2.2m、桁行1.5~1.9mを測る。柱穴の平面プランは円形と楕円形が

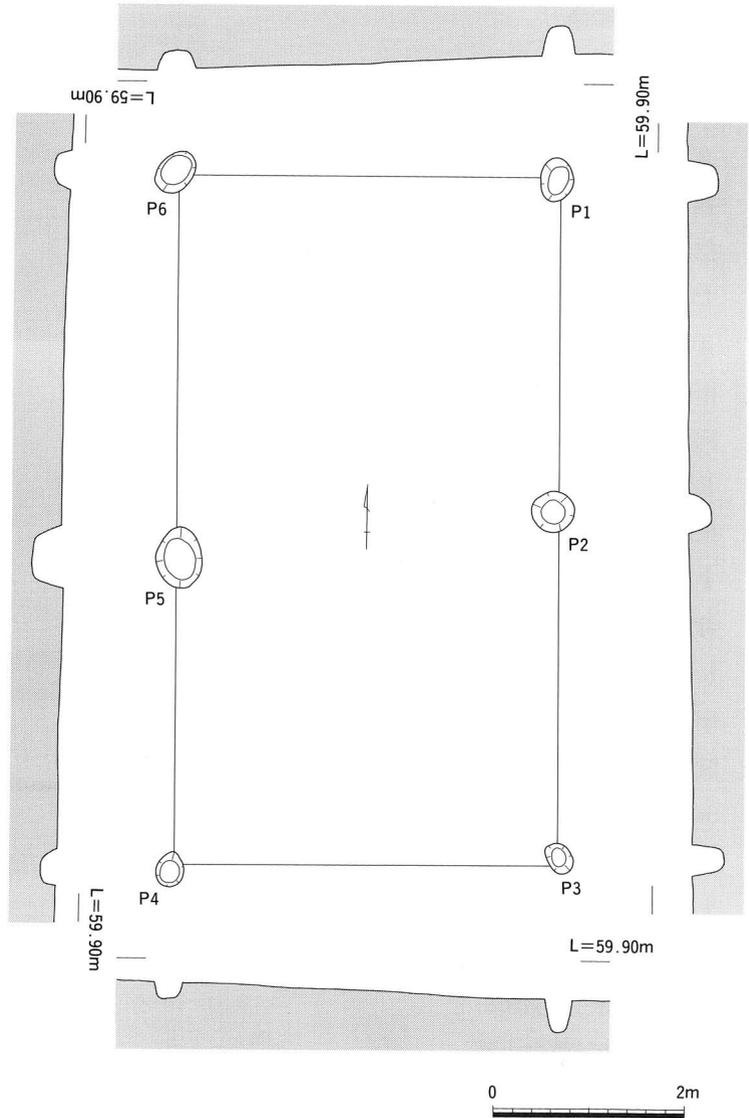


第48図 S A 1016出土遺物実測図

認められ、直径25～62cm、
 深度14～27cmを測る。遺
 物は埋土より弥生土器細
 片が出土しているが実測
 可能遺物は認められない。

20号建物跡 (S A 1020)
 (第52図)

F調査区Q・R-17・18
 グリッドから検出され、
 調査区の中央やや東より
 に位置する掘立柱建物跡
 である。主軸はN-4°-
 Eで、梁間1間、桁行4
 間を数える。柱穴はP-
 1からP-9まで確認さ
 れているが不整な並びを
 している。梁間2.5m、桁
 行5.2mを測る。柱穴間距
 離は梁間2.5m、桁行1
 ～2mを測る。柱穴は円
 形と、楕円形状のものが
 認められ、直径25～54cm、
 深度10～24cmを測る。



第49図 S A 1017実測図

出土遺物 (第53図)

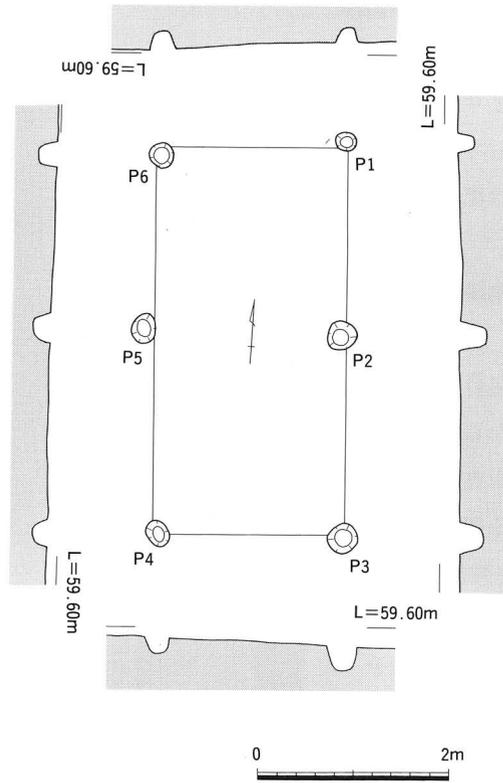
遺物は壺形土器、甕形土器、弥生土器細片が出土している。

85は甕形土器の口縁部の破片である。口縁端部は方形におさめ、口縁部は外方に屈曲する。口縁端部は刻目文、体部には楕描直線文を施している。

21号建物跡

(S A 1021) (第54図)

F調査区P・Q-15
グリッドから検出され、
調査区の中央西寄りに
位置する掘立柱建物跡
である。主軸はN-
4°-Eで、梁間1間、
桁行3間を数える。柱
穴はP-1からP-8
まで検出されており、
梁間2.5m、桁行4.6m
を測る。柱穴間距離は
梁間2.5m、桁行1.3~
1.6mを測る。柱穴は円
形を呈しており、直径
21~38cm、深度10~30
cmを測る。遺物は弥生
土器細片と石庖丁が埋
土より出土している。

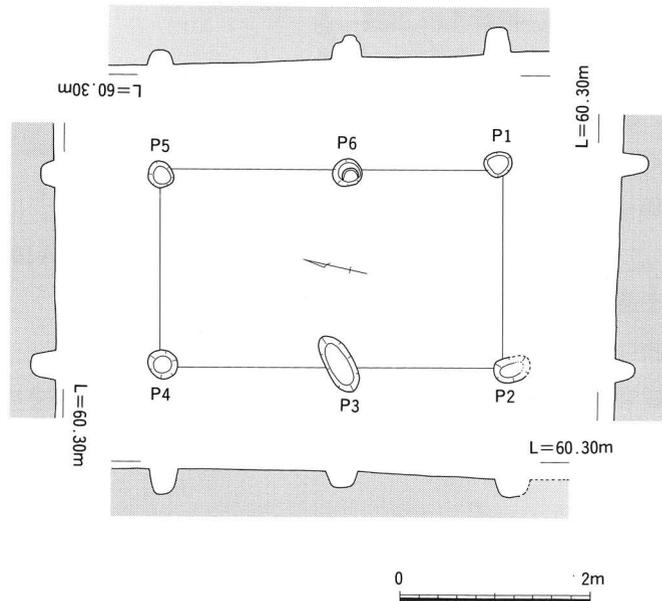


第50図 S A 1018実測図

出土遺物 (第55図)

出土遺物は弥生土器
細片17点、打製石庖丁
1点、結晶片岩片1点
が出土した。出土遺物
は細片が多く、この
うち実測可能遺物は2点
のみである。

86はP-3より出土
した壺形土器の底部の
破片である。底部は上
げ底を呈し、体部は直



第51図 S A 1019実測図

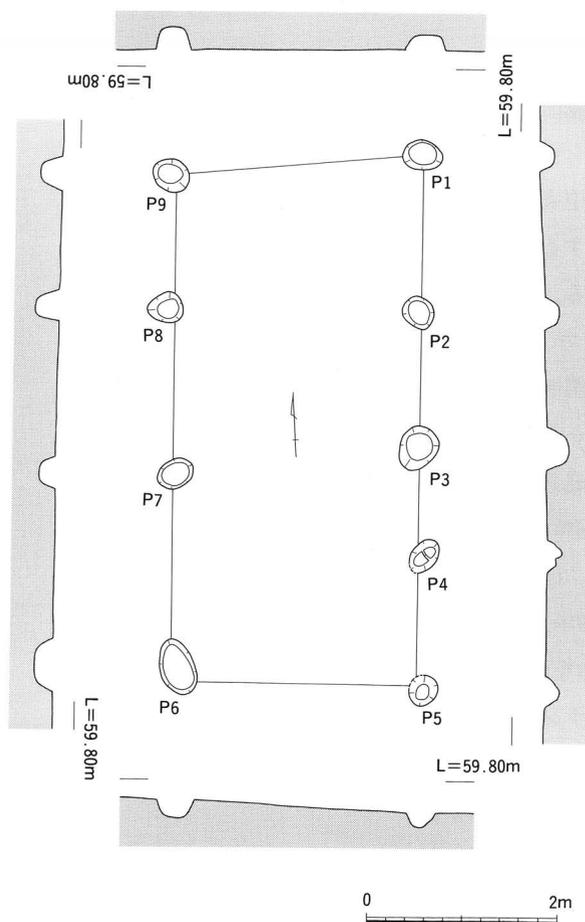
線的に立ちあがる。

87はP-3より出土した結晶片岩製の打製石庖丁である。薄手の剥片を素材として使用し、一側縁に調整加工を施す。両端は欠損している。

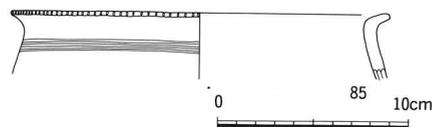
22号建物跡

(S A 1022) (第56図)

F調査区P・Q-17・18グリッドから検出され、調査区の中央に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-5°-Eで、梁間1間、桁行3間を数える。柱穴はP-1からP-8まで検出されており、梁間3.4m、桁行5.3mを測る。柱穴間距離は梁間3.4~3.9m、桁行1.3~2.4mを測る。柱穴は円形を呈しており、直径24~53cm、深度10~24cmを測る。出土遺物は弥生土器細片が埋土より出土しているが実測可能遺物は認められない。



第52図 S A 1020実測図



第53図 S A 1020出土遺物実測図

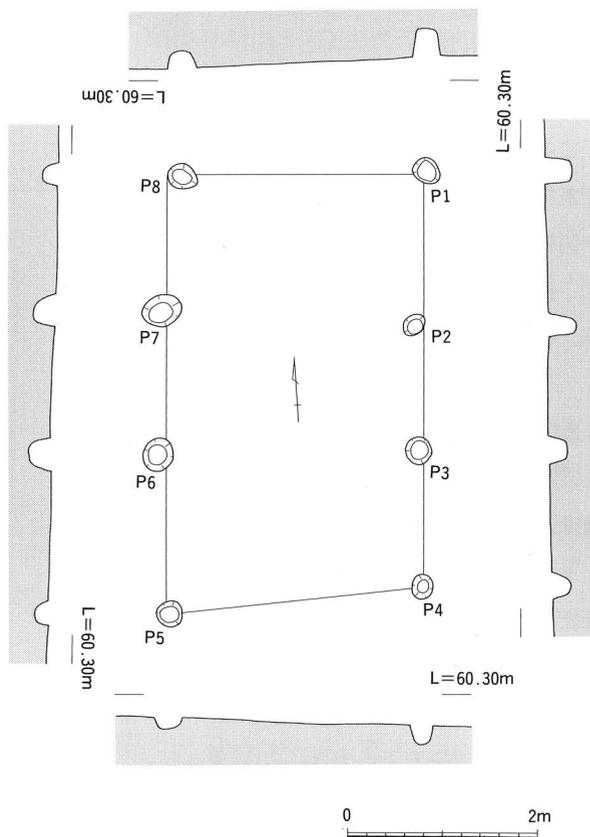
23号建物跡 (S A 1023) (第57図)

F調査区の中央に位置し、P-17グリッドから検出された、掘立柱建物跡である。主軸はN-83°-Eで、梁間1間、桁行3間を数える。柱穴はP-1からP-8まで検出されており、梁間2.1m、桁行5.1mを測る。柱穴間距離は梁間2.1m、桁行1.5~1.8mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈しており、直径24~53cm、深度11~26cmを測る。出土遺物は弥生土器細片が出土しているが、実測可能遺物は認められない。

24号建物跡

(S A 1024) (第58図)

F調査区Q-18グリッドから検出され、調査区の中央やや東寄りに位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-66°-Eで、梁間1間、桁行3間を数える。柱穴はP-1からP-8まで確認されており、梁間1.8m、桁行3.7mを測る。柱穴間距離は梁間1.8m、桁行0.9~1.3mを測る。柱穴の平面プランは、円形を呈するものと、隅丸形状を呈するものが認められる。直径21~51cm、深度11~30cmを測



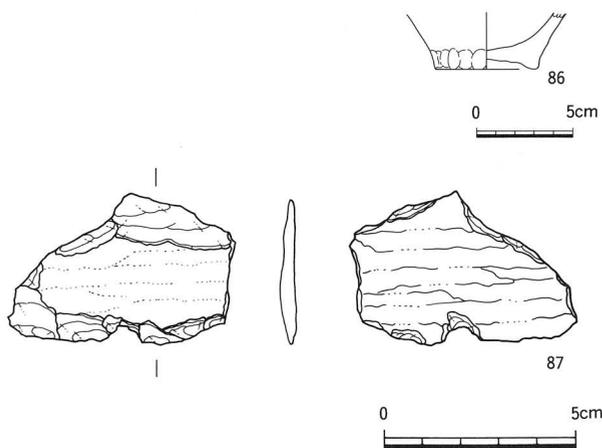
第54図 S A 1021実測図

る。出土遺物は埋土より壺形土器、弥生土器細片が出土しているが実測可能遺物は認められない。

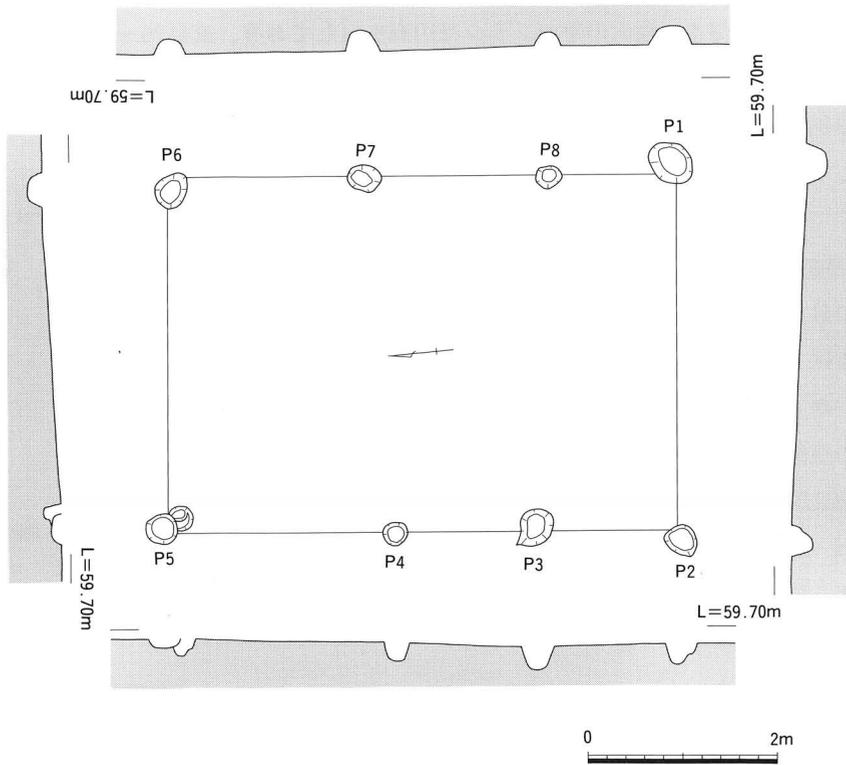
25号建物跡 (S A 1025)

(第59図)

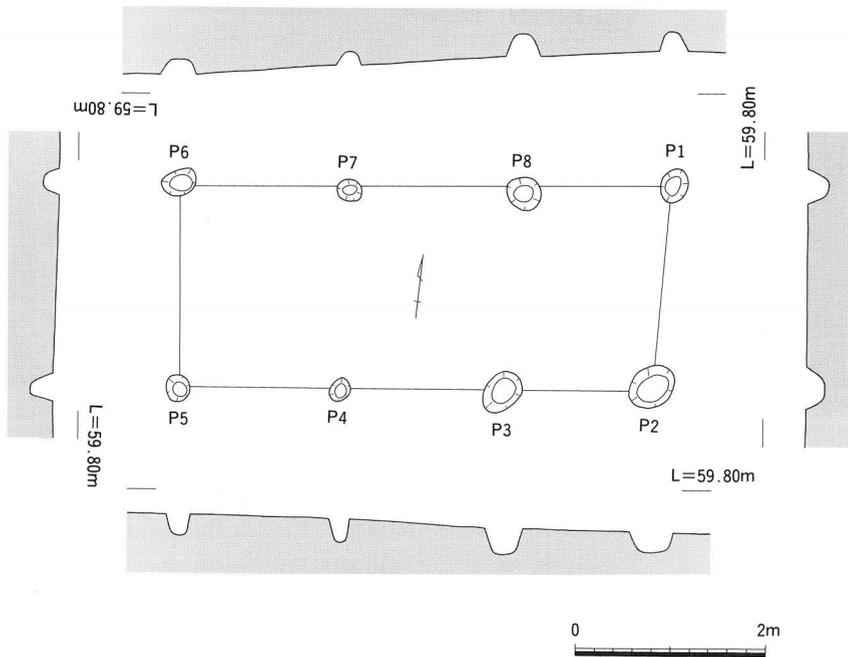
F調査区Q-16グリッドから検出され、調査区の中央やや西寄りに位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-65°-Wで、梁間1間、桁行3間を数える。柱穴はP-1からP-8まで数え、梁間2.1m、桁行5.2mを測る。柱穴間距離は梁間1.8~2.1m、



第55図 S A 1021出土遺物実測図



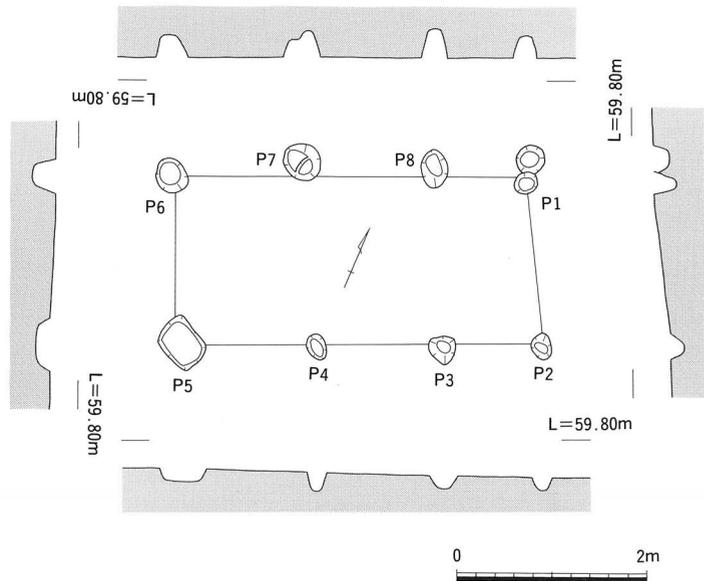
第56図 S A 1022実測図



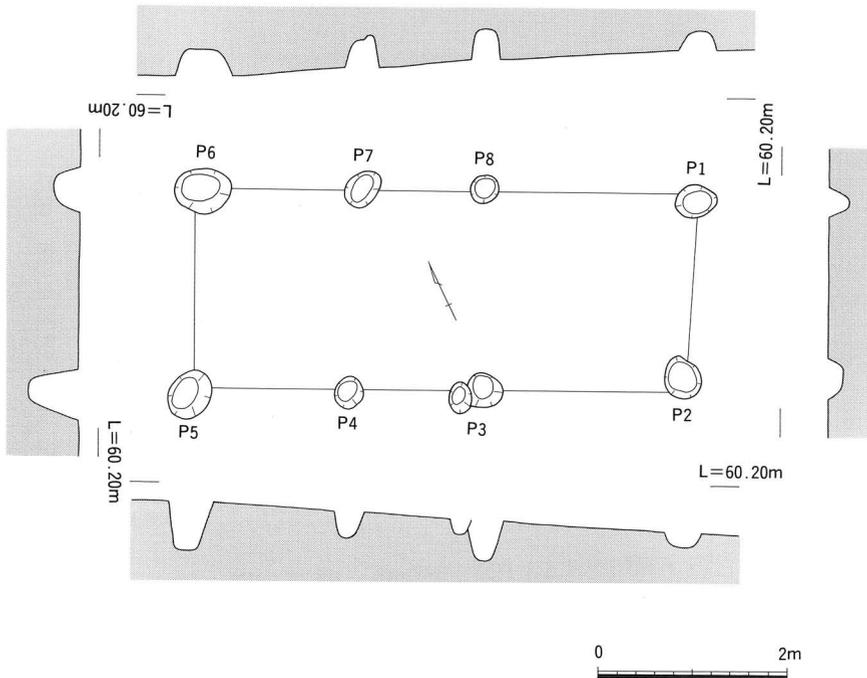
第57図 S A 1023実測図

桁行1.2~2.2mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈しており、直径26~60cm、深度14~51cmを測る。出土遺物は弥生土器細片が埋土より出土している。

26号建物跡
 (S A 1026) (第60図)
 F調査区P・Q-14
 グリッドから検出され、調査区の西側に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-82°-Wで、梁間1間、桁行2間を数える。柱穴はP-1からP-6まで数え、梁間3m、桁行3.6mを



第58図 S A 1024実測図



第59図 S A 1025実測図

測る。柱穴間距離は梁間2.8～3m、桁行1.8～1.9mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈しており、直径28～38cm、深度9～21cmを測る。出土遺物は弥生土器細片が埋土より出土している。

27号建物跡

(S A 1027) (第61図)

F調査区P・Q-14・15グリッドより検出され、調査区の西側に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-

43°-Wで、梁間2間、桁行3間を数え、柱穴はP-1からP-12まで数える。梁間4.2m、桁行4.8mを測る。柱穴間距離は梁間1.9～2.2m、桁行1.3～2.1mを測る。柱穴の平面プランは円形と楕円形状を呈した物が認められる。直径は19～45cm、深度7～25cmを測る。出土遺物は弥生土器細片が埋土より出土している。

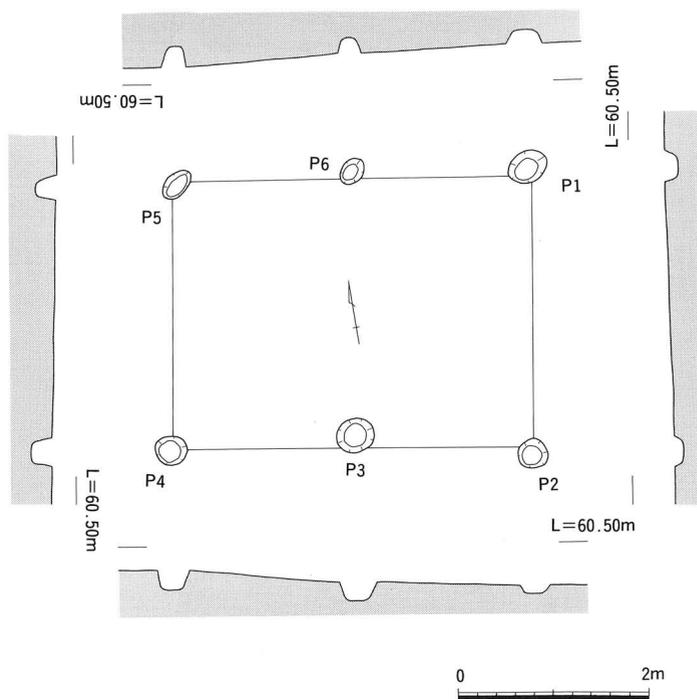
28号建物跡 (S A 1028) (第62図)

F調査区P-17・18グリッドより検出され、調査区の中央に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-87°-Wで、梁間1間、桁行3間を数える。柱穴はP-1からP-7まで数え、梁間2.1m、桁行5.2mを測る。柱穴間距離は梁間2.1m、桁行1.4～3.3mを測る。柱穴の平面プランは円形と楕円形状が認められ、直径27～60cm、深度10～60cmを測る。遺物は埋土より壺形土器、弥生土器細片が出土した。

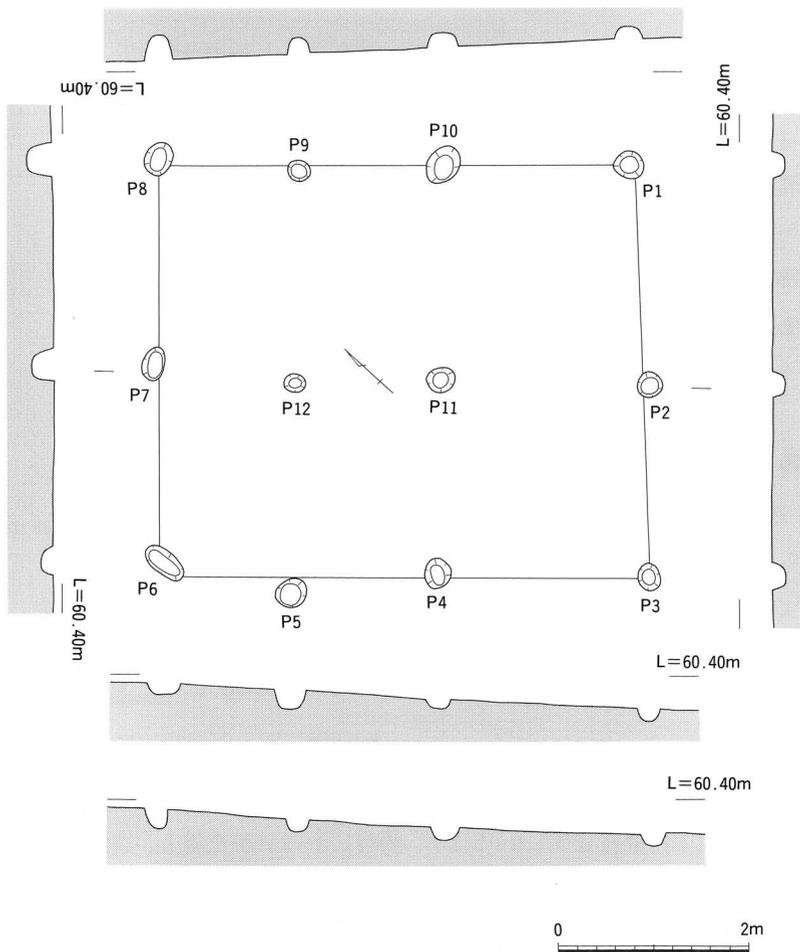
出土遺物 (第63図)

出土遺物は壺形土器2点、弥生土器細片16点が出土した。実測可能遺物1点を図化した。

88はP-2より出土した甕形土器の底部である。底部は平底を呈し、体部に向かい直線的に立ち上がる。外面はタテヘラミガキで調整される。



第60図 S A 1026実測図



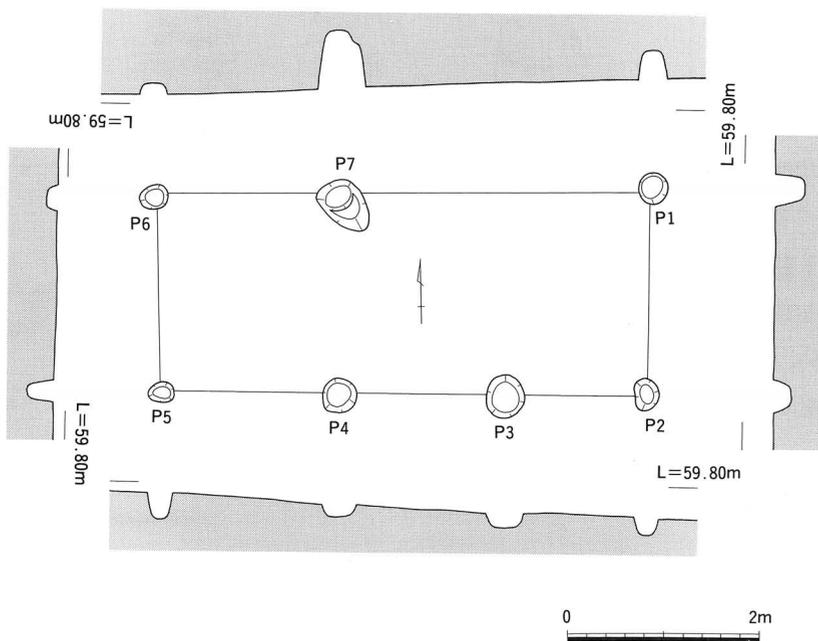
第61図 S A 1027実測図

29号建物跡 (S A 1029) (第64図)

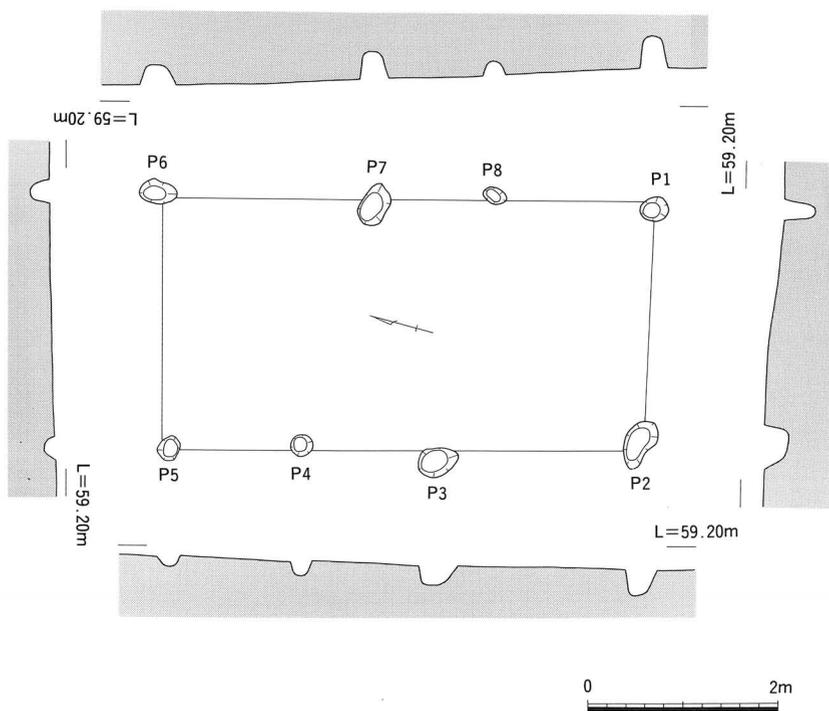
G調査区の南側に位置し、M・N-19グリッドから検出された掘立柱建物跡である。主軸はN-15-Wを示し、梁間1間、桁行3間を数える。柱穴はP-1からP-8まで数えられ、梁間2.6m、桁行5.2mを測る。柱穴間距離が梁間2.4~2.6m、桁行1.3~2.2mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈する物と、楕円形状を呈する物が認められ、直径は20~54cm、深度8~33cmを測る。遺物は埋土より出土している。

出土遺物 (第65図)

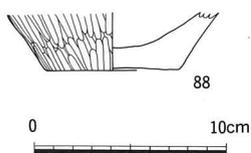
出土遺物は弥生土器細片3点、土師質土器鍋1点、土師質土器細片2点、叩石1点、サヌカイト片2点を出土した。遺物は細片のため、土器は実測可能遺物は認められない。実測可能遺物は1点のみである。



第62図 S A 1028実測図

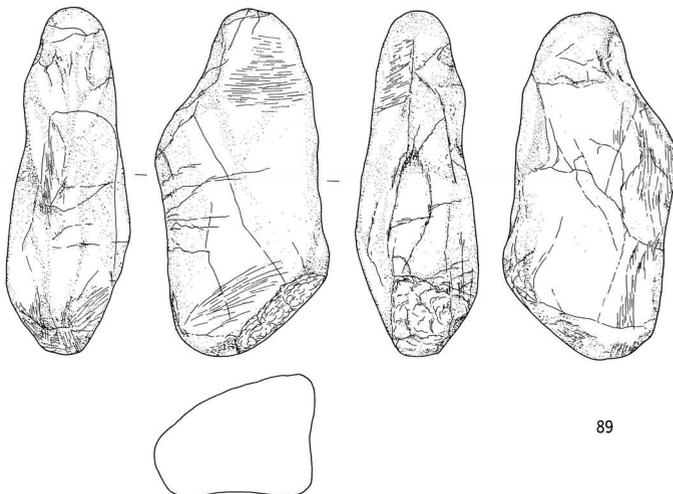


第64図 S A 1029実測図



第63図 S A 1028出土遺物実測図

89はP-2から出土したチャート製の叩石である。縦長な自然礫を素材として用い、下縁部の全面に敲打痕がみられる。



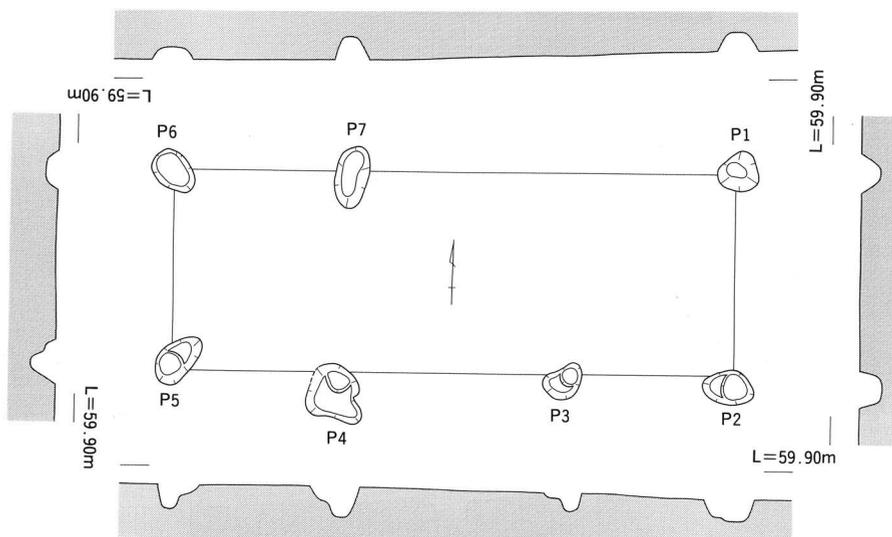
30号建物跡 (S A 1030)

(第66図)

I 調査区 T-18・19グ

第65図 S A 1029出土遺物実測図

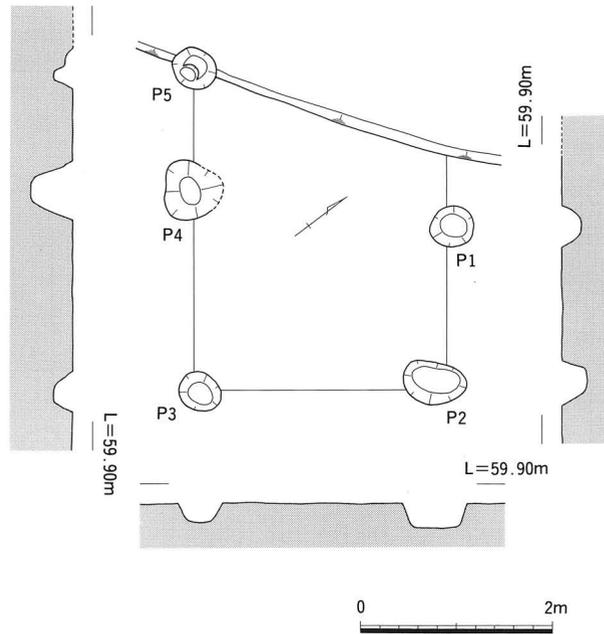
リッドから検出され、調査区の南側に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-88°-Eで、梁間1間、桁行3間を数える。柱穴はP-1からP-7まで数え、梁間2.2m、桁行5.8mを



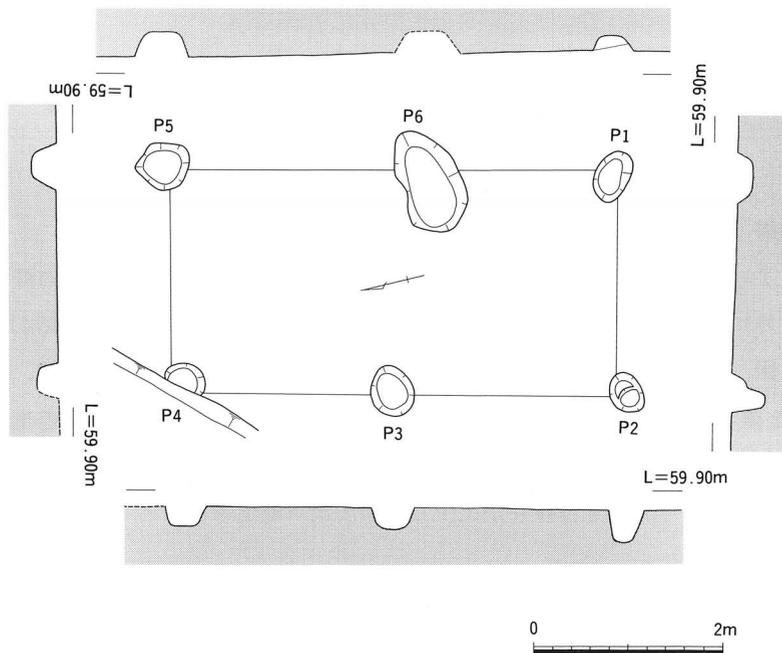
第66図 S A 1030実測図

測る。

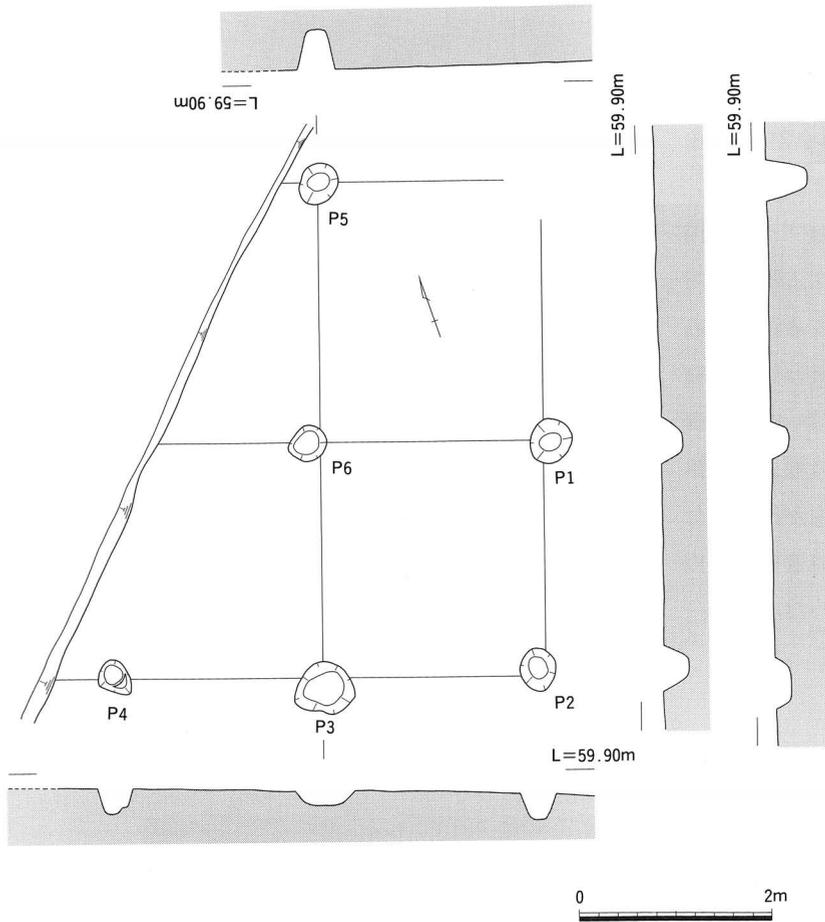
柱穴間距離は、梁間
1.9 ~ 2.2 m、桁行
1.6 ~ 4 mを測るが、並
びはやや不整である。
柱穴の平面プランは円
形状を呈する物、楕円
形状を呈する物が認め
られる。直径は29~61
cm、深度11~32cmを測
る。遺物は埋土より弥
生土器細片が出土した
が実測可能遺物は認め
られなかった。



第67図 S A 1031実測図



第68図 S A 1032実測図



第69図 S A 1033実測図

31号建物跡（S A 1031）（第67図）

I調査区T-18グリッドから検出され、調査区の南側に位置する掘立柱建物跡である。西側は調査区外に当たるために調査が行われておらず、全様は不明である。主軸はN-53°-Wで、梁間1間、桁行2間以上を数える。柱穴はP-1からP-5まで確認され、梁間2.4m、桁行3.3mを測る。柱穴間距離は、梁間2.4m、桁行1.2~2.1mを測る。柱穴の平面プランは円形状を呈している物と、楕円形状のものが認められる。直径は42~57cm、深度19~44cmを測る。遺物は埋土より弥生土器細片が出土したが実測可能遺物は認められない。

32号建物跡（S A 1032）（第68図）

I調査区T-19グリッドから検出され、調査区の中央に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-15°-Eで、梁間1間、桁行2間を数える。柱穴はP-1からP-6まで確認され、

梁間2.2m、桁行4.8mを測る。柱穴間距離は梁間2.2m、桁行1.9~2.7mを測る。柱穴の平面プランは円形状と、楕円形状を呈しており、直径30~110cm、深度15~34cmを測る。遺物は弥生土器細片が埋土より出土している。

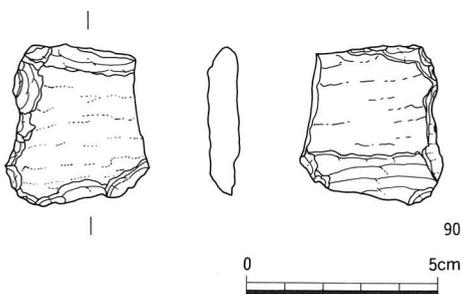
33号建物跡 (S A 1033) (第69図)

I 調査区の北側に位置し、T-19グリッドから検出された掘立柱建物跡である。主軸方位はN-18°-Eである。梁間2間、桁行3間以上を数える。柱穴はP-1からP-6まで確認されたが、北東隅の柱穴は削平され確認できなかった。規模は梁間5.2m、桁行4.4m以上を測り、柱穴間距離は梁間2.7m、桁行2.1~2.3mを測る。柱穴の平面プランは円形を呈する物と、楕円形を呈し、直径29~50cm、深度13~41cmを測る。遺物は弥生土器細片、サヌカイトが出土している。

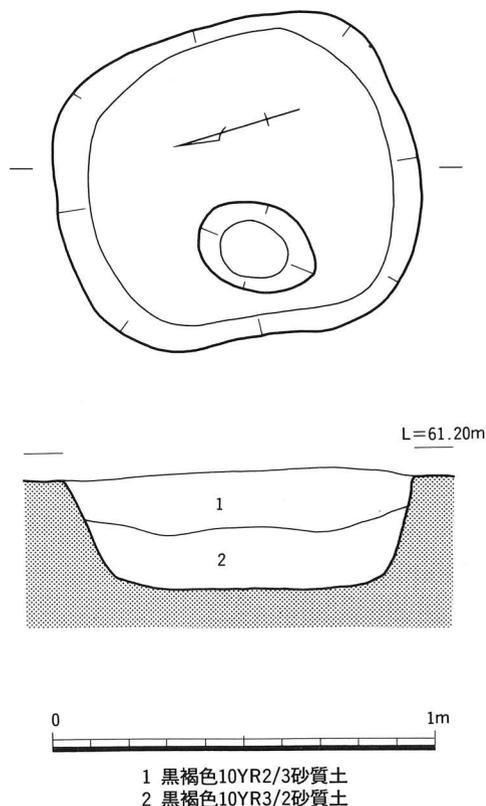
土坑

1号土坑 (S K 1001) (第70図)

A 調査区 I-11グリッド、調査区の北側に位置し、平面プランは楕円形を呈する土坑である。検出時の規模は長軸95cm、短軸85cm、深さ32cmを測る。床面はほぼ水平に掘削されている。壁面は緩斜面である。土坑内埋積土は2層に分層され、1. 黒褐色砂質土 (褐色砂質土をブロック状に混入) 2. 黒褐色砂質土が水平に堆積している。遺物は埋土中より多数出土している。



第71図 S K 1001出土遺物実測図

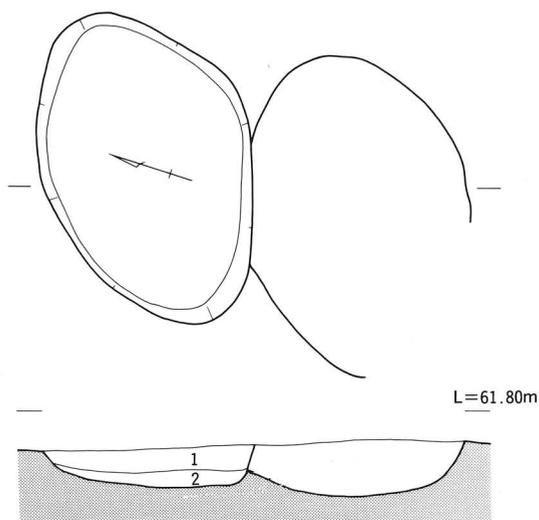


第70図 S K 1001実測図

出土遺物（第71図）

遺物は弥生土器細片48点、須恵器身細片1点、土師質土器細片2点、石庖丁1点、結晶片岩1点、チャート1点出土しているが、風化し摩滅を受けた細片が多く図化可能遺物は石庖丁1点のみである。

90は結晶片岩製の打製石庖丁である。一方の端辺を欠損している。薄手の横長剝片を素材とし、端部には抉りがはいる。縁辺部両面に調整加工を施し、刃部を作出している。



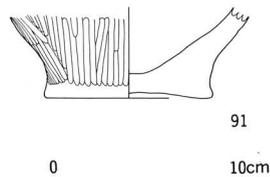
4号土坑（S K 1004）（第72図）

A調査区H-10グリッド、調査区のほぼ中央部から検出された土坑である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸135cm、短軸88cm、深さ16cmを測る。床面はほぼ水平に掘削されている。壁面は緩斜面である。埋土は2層に分層され、1. 褐色砂質土、2. 黄褐色砂質土がほぼ水平に堆積している。遺物は埋土中より出土している。

- 1 褐色10YR4/6砂質土
- 2 黄褐色10YR5/6砂質土



第72図 S K 1004実測図



第73図 S K 1004出土遺物実測図

出土遺物（第73図）

遺物は壺形土器5点と弥生土器細片が18点出土した。弥生土器は細片が多く図化可能な遺物は1点のみである。

91は壺形土器の底部である。底部は上げ底を呈し、底端部をやや外方に拡張し、体部はやや内湾しながら立ち上がっている。外面はタテヘラミガキで調整される。内面にはナデの痕跡が明瞭に認められる。

5号土坑（S K 1005）（第74図）

A調査区G-10グリッドから検出された土坑である。平面プランは隅丸方形を呈する。遺構の南側は一部、後世の濠堀による攪乱を受けている。規模は長軸360cm、短軸115cm、深さ28cmを測る。床面は中央部がややへこみ端辺に向かって緩やかに傾斜している。壁面は緩斜

面である。埋土は2層に分かれる。

1・2層ともにぶい黄褐色砂質土で下層のほうがしまりがよく、埋土はほぼ水平に堆積する。遺物は床面より出土している。

出土遺物 (第75図)

遺物は壺形土器・甕形土器が各1点、摩滅を受けて風化した弥生土器細片が9点出土した。弥生土器は細片が多く実測可能な1点を図化した。

92は壺形土器の底部である。底部は上げ底で、体部に向かい直線的に延びている。内面はナデの痕跡が明瞭にみられる。

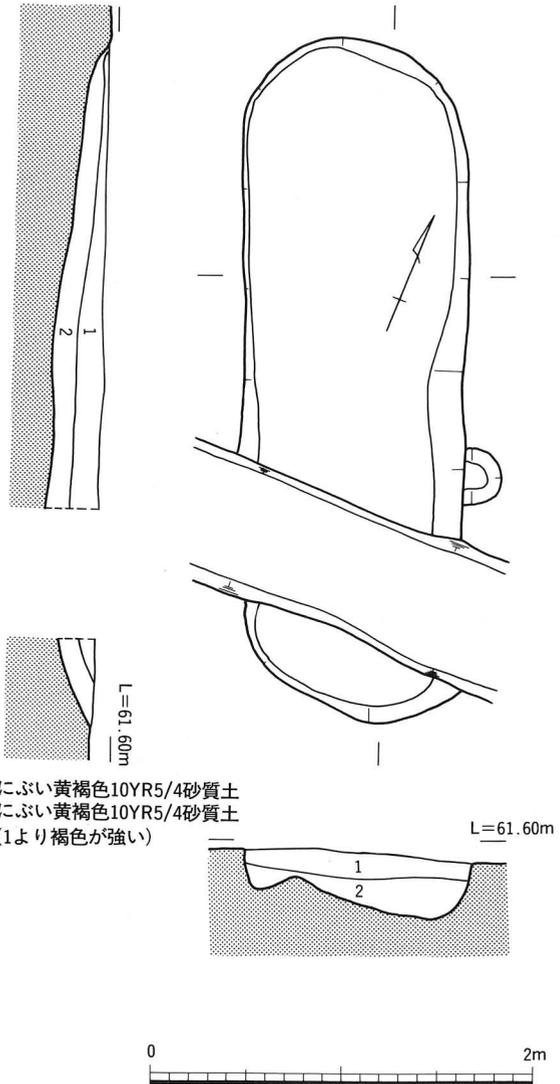
22号土坑 (S K 1022) (第76図)

A調査区F-11グリッド、調査区の中央寄りに位置する土坑である。平面プランは隅丸方形を呈する。規模は長軸220cm、短軸140cm、深さ10cmを測る。床面は中央部がやや盛り上がり、両端辺にやや凹みがみられる。壁面は緩斜面である。埋土は黄褐色砂質土1層である。遺物は埋土より出土している。

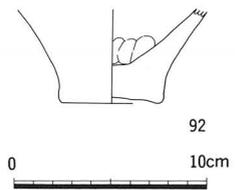
出土遺物 (第77図)

遺物は壺形土器が1点、風化して摩滅を受けた弥生土器細片90点、叩石1点、結晶片岩1点が出土している。弥生土器は細片が多く図化可能な2点を示した。

93は壺形土器の底部である。やや上げ底を呈し、底部より直線的に立ち上っている。外面はタテヘラミガキで調整される。



第74図 S K 1005実測図

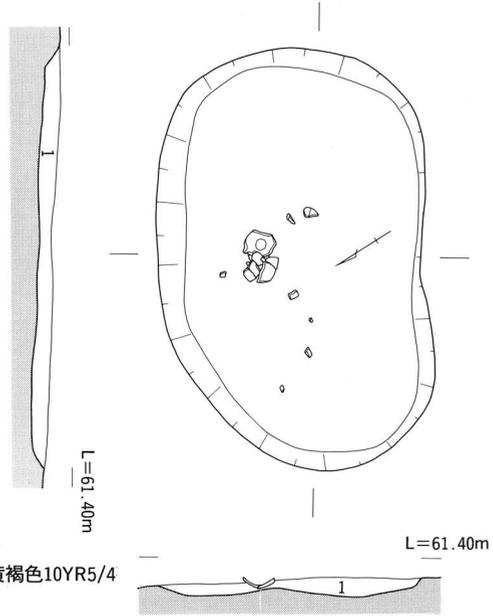


第75図 S K 1005出土遺物実測図

94は砂岩製の叩石である。偏平な楕円礫を素材として用い、両側縁に敲打痕を有する。基部は一部欠損している。

31号土坑 (S K 1031) (第78図)

A調査区H-12グリッド、調査区の東側に位置し、S K 1030に切られた状態で検出された。平面プランは隅丸方形を呈する土坑である。規模は長軸120cm、短軸95cm、深さ10cmである。床面は中央部でやや盛り上がりが見られ、端辺に凹みがある。壁面は緩斜面である。埋土にはふい黄褐色砂質土1層である。出土遺物は埋土中より出土している。



1 1にふい黄褐色10YR5/4砂質土

出土遺物 (第79図)

遺物は壺形土器1点、甕形土器2点、風化して摩滅を受けた弥生土器細片58点、結晶片岩1点出土している。弥生土器は細片が多く凶化可能な2点を示した。

第76図 S K 1022実測図

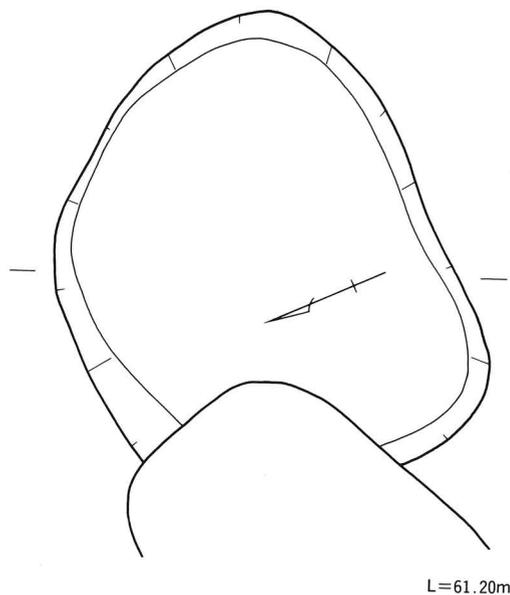
95・96は甕形土器の口縁部の破片である。95は口縁端部方形におさめ、口縁部は緩やかに外反している。口縁端部は刻目列点文、口縁下には楕描直線文が施されている。内面はヨコナデで調整されている。96は口縁端部を丸くおさめる。口縁部は緩やかに外反している。口縁部内面はヨコナデで調整されている。これらの弥生土器は弥生時代中期中様の様相を示す物と思われる。



第77図 S K 1022出土遺物実測図

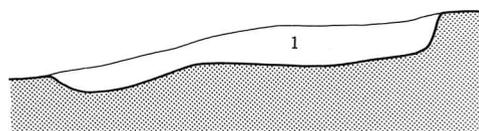
32号土坑 (S K 1032) (第80図)

A調査区G-12グリッド、調査区の東側に位置する土坑である。平面プランは枝豆状を呈し、規模は長軸105cm、短軸45cm、深さ12cmである。床面はほぼ水平を呈し、壁面は緩斜面である。埋土は褐色砂質土1層である。遺物は埋土中より出土している。



出土遺物 (第81図)

出土遺物は埋土より壺形土器2点、甕形土器2点、風化して摩滅を受けた弥生土器細片7点が出土している。遺物は細片で風化しており、図化可能な1点を示した。



97は壺形土器の口縁部の破片である。口縁端部を平坦におさめ、端部内面は強いヨコナデによりやや内面に拡張する。口縁部は緩やかに外反している。頸部は指頭圧痕突帯文が施される。口縁部内外面はヨコナデが顕著に認められる。

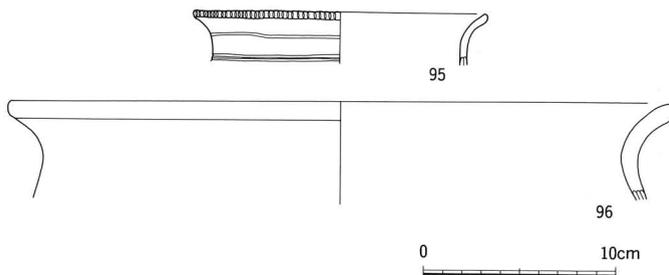


1 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

第78図 S K 1031実測図

36号土坑 (S K 1036)
(第82図)

B調査区N-15グリッドから検出され、調査区の北端に位置する。北側は生活用道路が、南側は土地が取得でき



第79図 S K 1031出土遺物実測図

ず遺構の両端の形状は不明である。規模は現況で長軸130cm、短軸35cm、深さ15cmを測る。床面はほぼ水平を呈し、壁面は緩斜面である。埋土は暗褐色砂質土1層である。遺物は埋土中

より出土した。

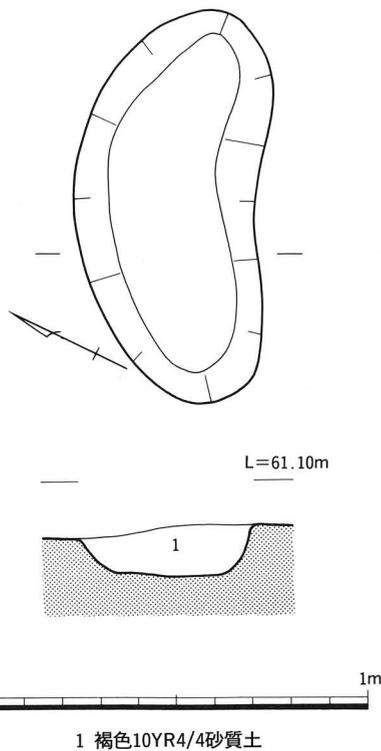
出土遺物 (第83図)

出土遺物は壺形土器 8 点、甕形土器 4 点、風化して摩滅を受けた弥生土器細片 131 点、土師質土器 1 点、サヌカイト 1 点、結晶片岩 8 点が出土した。遺物は細片が多く、摩滅を受けており実測可能遺物は 1 点のみである。

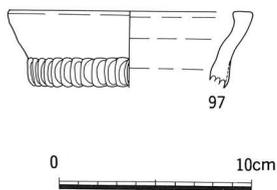
98は壺形土器の底部である。底部はやや上げ底を呈し、体部中位に向かって直線的に延びている。

46号土坑 (S K 1046) (第84図)

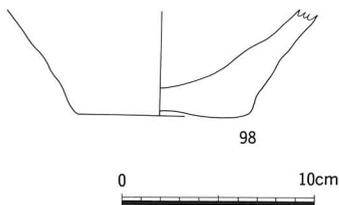
B調査区M-16グリッドから検出され、調査区の北側に位置する土坑である。平面プランは楕円形を呈する。規模は長軸110cm、短軸100cm、深さ16cmを測る。床面は南側から北側に緩やかに傾斜している。壁面はやや急斜面である。埋土は褐色砂質土である。本遺構は、拳大の砂岩礫が中央部付近に上部から下部にかけて集中的に検出された。このような礫の集中は偶然に堆積したものとは考えがたく、人為的に礫を集中したものと



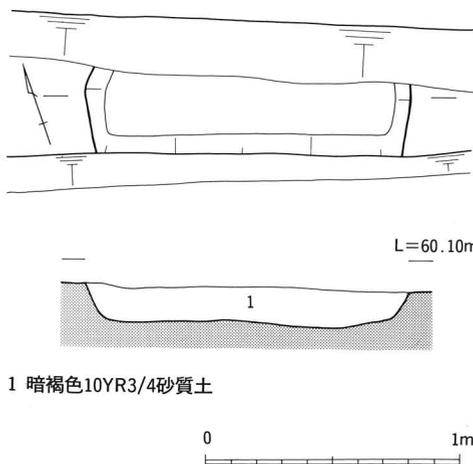
第80図 S K 1032実測図



第81図 S K 1032出土遺物実測図



第83図 S K 1036出土遺物実測図

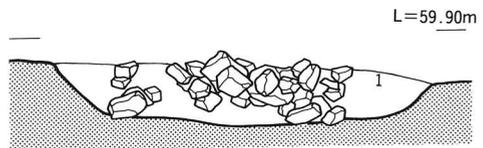
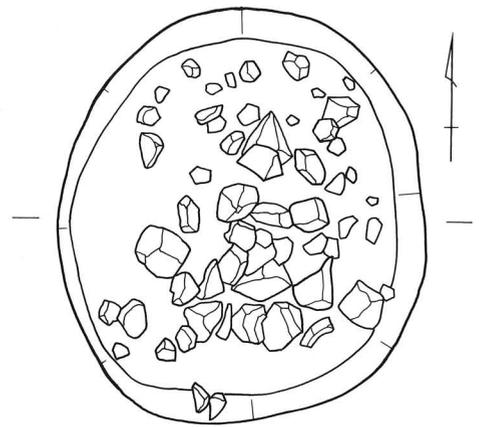


第82図 S K 1036実測図

思われる。埋土からは風化して摩滅を受けた弥生土器細片14点、サヌカイト細片1点が出土したが、図化可能な遺物は残存していない。

47号土坑 (S K 1047) (第85図)

B調査区の北側に位置し、M-16グリッドから検出された土坑である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸125cm、短軸125cm、深さ9cmを測る。床面は東側より南側に緩やかに傾斜している。壁面は緩斜面である。埋土は暗褐色砂質土の1層である。遺物は埋土中より出土した。



1 褐色10YR4/4砂質土

第84図 S K 1046実測図

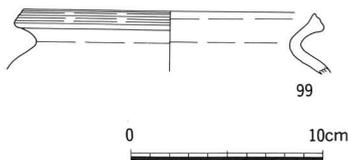
出土遺物 (第86図)

遺物は甕形土器が1点、弥生土器細片が6点出土した。遺物は細片のため実測可能遺物は1点のみである。

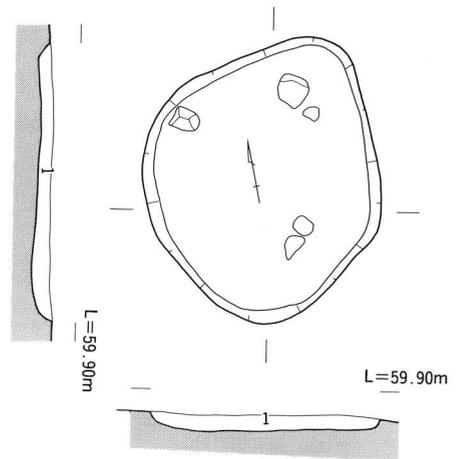
99は甕形土器口縁部の破片である。口縁端部を上下に拡張し、口縁部は「く」の字状に外反する。端面には2条の凹線文がみられる。口縁部は内外面ヨコナデで調整している。

52号土坑 (S K 1052) (第87図)

B調査区L-17グリッドから検出され、調査区の北側に位置する土坑である。S K 1053に切られ



第86図 S K 1047出土遺物実測図



1 暗褐色10YR3/4砂質土

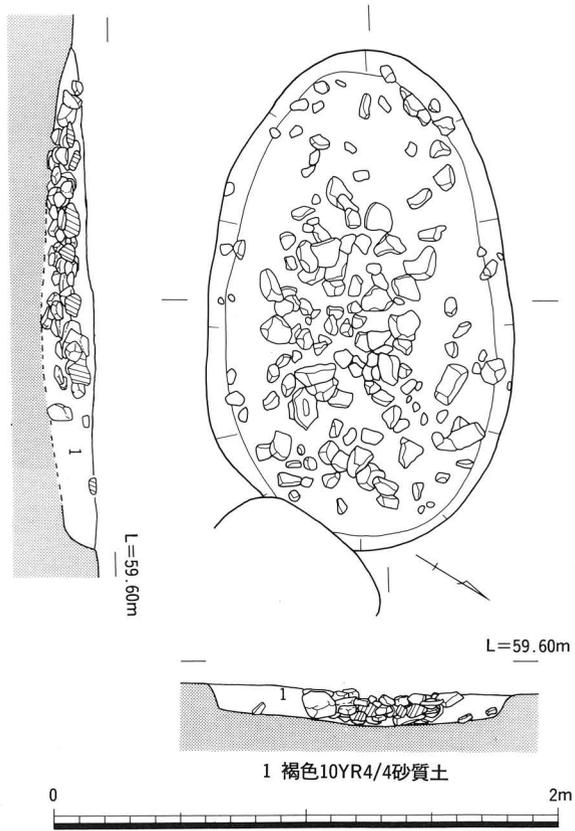
第85図 S K 1047実測図

た状況で検出された。平面プランは隅丸方形を呈する。規模は長軸200cm、短軸120cm、深さ10cmを測る。床面付近では地山面との境がはっきりせず、推定ラインが引かれている。床面は中央部でやや凹みがみられ、南側から北側に緩やかな傾斜が認められる。掘り下げ時に、拳大の砂岩礫と土器がかみあった状況で検出された。礫は土坑の中心付近に集中的に認められる。埋土は褐色砂質土1層である。遺物は埋土中より出土した。

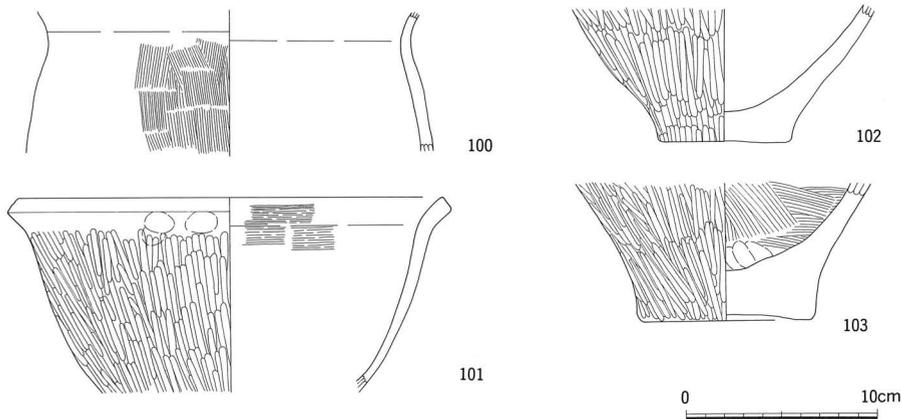
出土遺物 (第88・89図)

埋土からは壺形土器4点、甕形土器3点、鉢形土器1点、石庖丁1点、サヌカイト1点、結晶片岩2点、チャート1点が出土した。遺物は細片のため実測可能な5点を図化した。

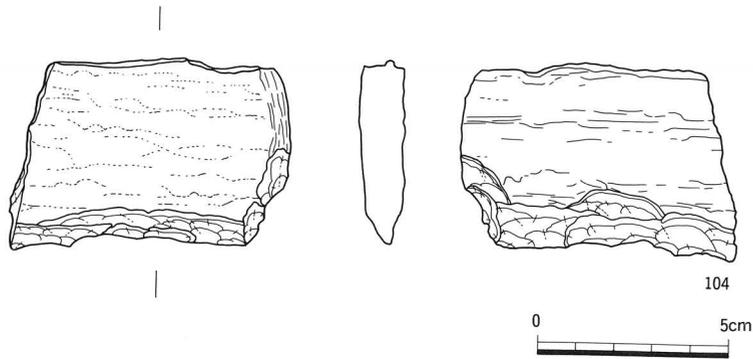
100は甕形土器の頸部から体部中位にかけての破片である。体部外面はタテハケメで調整される。101は鉢形土器の口縁部から体部にかけての破片である。口縁端部を方形におさめ、口縁部は外方に屈曲する。口縁



第87図 S K 1052実測図



第88図 S K 1052出土遺物実測図(1)



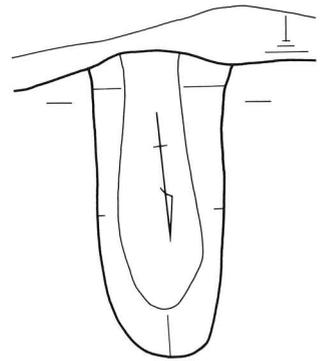
第89図 S K 1052出土遺物実測図 (2)

部は内外面ヨコナデ、体部外面はタテヘラミガキで調整される。102・103は壺形土器の底部と思われる。102は底部平底、体部中位に向かい直線的に延びていく。体部外面はタテヘラミガキで調整される。103は底部はやや上げ底、体部中位に向かい直線的に延びていく。体部外面はタテヘラミガキ、内面はヨコハケメで調整される。

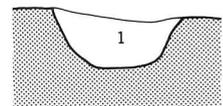
104は結晶片岩製の石庖丁である。厚手の剥片を素材とし、素材となる剥片の一侧縁の両面に調整加工を施し刃部を作出している。一方の端辺を欠損している。

54号土坑 (S K 1054) (第90図)

B調査区K-17グリッドから検出され、調査区のやや北寄りに位置する土坑である。北側は後世の濠堀により攪乱を受けている。平面プランは隅丸長形状を呈していると思われる。規模は現況で長軸90cm、短軸40cm、深さ16cmを測る。断面はU字状を呈し、床面は西側より東側に緩やかに傾斜している。壁面は緩斜面である。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。出土遺物は埋土中より出土した。

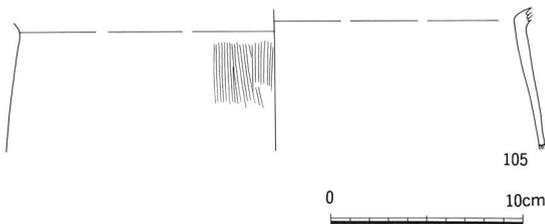


L=59.70m



0 50cm

1 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

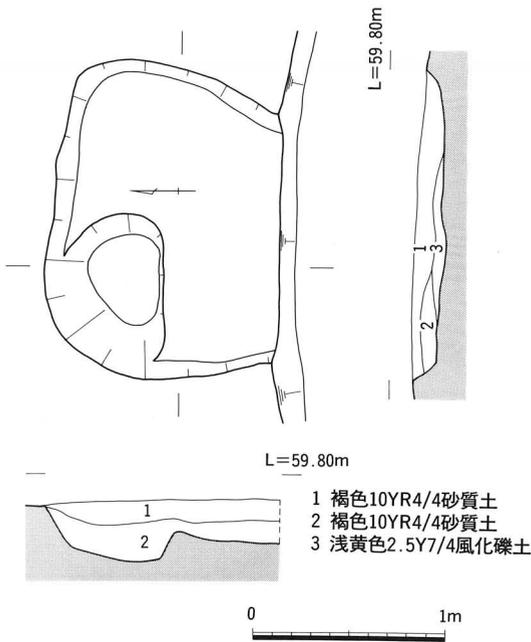


105

0 10cm

第91図 S K 1054出土遺物実測図

第90図 S K 1054実測図

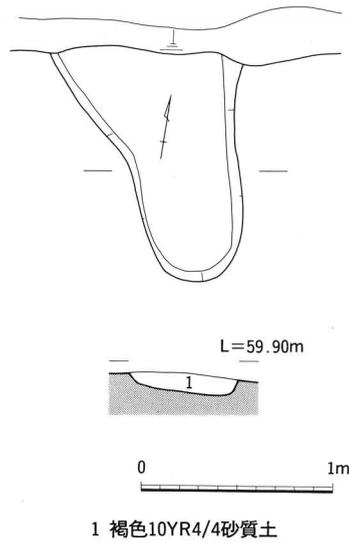


第92図 S K 1055実測図

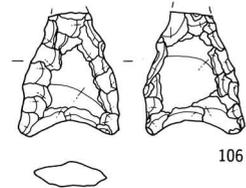
出土遺物 (第91図)

遺物は埋土中より甕形土器19点、結晶片岩2点出土している。遺物は破片がほとんどであり実測可能遺物は1点のみである。

105は甕形土器の破片である。口縁部欠損のため口縁部の形状は不明である。体部外面はタテハケメで調整されている。



第93図 S K 1057実測図



第94図 S K 1057出土遺物実測図

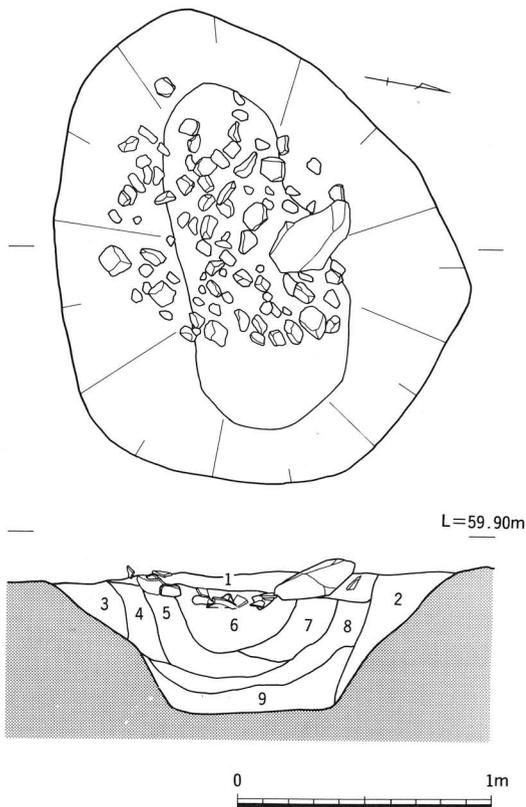
55号土坑 (S K 1055) (第92図)

B調査区K・L-16グリッドから検出され、調査区のやや北寄りに位置する土坑である。平面プランは後世の濠堀によって南側に攪乱を受け、全体の形状は不明であるが、隅丸方形状を呈していると思われる。規模は現況で長軸170cm、短軸135cm、深さ18cmを測る。床面は中心部にやや凹凸がみられるがほぼ水平に掘削されている。しかし北西端にピット状の落ちを持っている。土層の堆積状況は3層に分かれる。上から1. 褐色砂質土、2. 褐色砂質土(礫を多く含む)、3. 浅黄色砂質土である。土層堆積状況からみる限りピット状の落ちは後から掘り込まれたと考えるよりは、S K 1055に付随すると思われる。遺物は埋土より出土している。

遺物は風化して摩滅がみられる弥生土器細片20点、刃部に磨きを持つ石庖丁細片1点が出土した。しかし遺物は細片のため図化可能遺物はみられない。

57号土坑 (S K 1057) (第93図)

B調査区K-16グリッドから検出され、調査区のやや北寄りに位置する土坑である。北側を後世の濠堀によって攪乱を受けている。平面プランは隅丸方形形状を呈していると思われる。規模は現況で長軸125cm、短軸65cm、深さ9cmを測る。床面は東側から西側に緩やかに傾斜し、船底状を呈する。壁面は緩斜面である。埋土は褐色砂質土1層である。遺物は埋土中より出土した。



出土遺物 (第94図)

遺物は弥生土器細片19点、石鏃1点、結晶片岩1点が出土した。しかし細片のため図化可能遺物は、石鏃1点のみである。

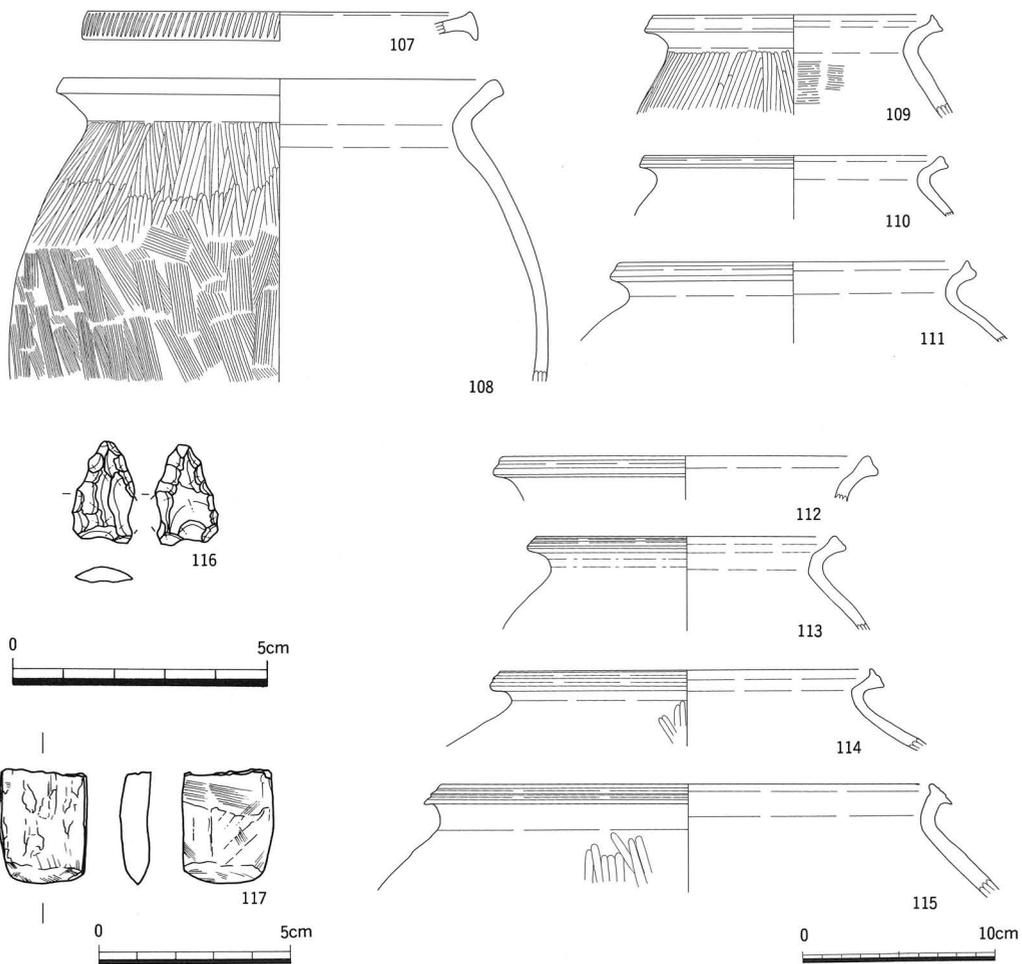
- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土 | 6 黒褐色10YR2/3砂質土 |
| 2 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土 | 7 黒褐色10YR2/3砂質土 |
| 3 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土 | 8 黒褐色10YR3/2砂質土 |
| 4 褐色10YR4/4砂質土 | 9 褐色10YR4/4砂質土 |
| 5 暗褐色10YR3/3砂質土 | |

第95図 S K 1063実測図

106はサヌカイト製の石鏃である。上部を欠損している。側縁全面に粗い調整加工を施している。両面には1次剥離痕が残存している。基部にはやや深めのU字状の抉りが施されている凹基式の石鏃である。

63号土坑 (S K 1063) (第95図)

B調査区J-16グリッドから検出され、調査区のほぼ中央に位置する土坑である。S D 1010を切った状態で検出された。平面プランは隅丸不整楕円形を呈する。規模は長軸190cm、短軸165cm、深さ56cmを測る。床面はほぼ水平である。壁面は上位から中位にかけてなだらかに落ち込み、中位から下位にかけて急激に落ち込んでいる。埋土は大きく9層に分かれる。土層



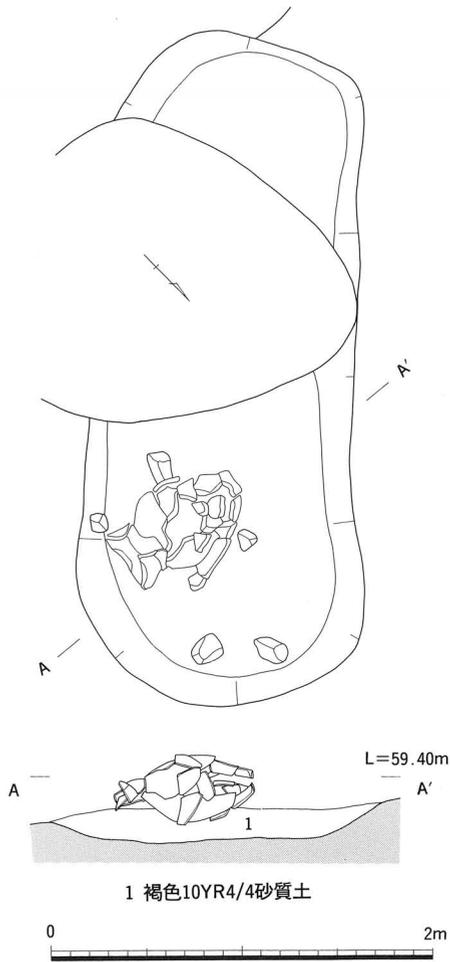
第96図 S K 1063出土遺物実測図

の堆積は、側縁が堆積した後、下部よりレンズ状に堆積している。遺物は上位の埋土、第6層黒褐色砂質土より拳大の砂岩礫とかみあった状態で出土している。出土遺物に完形のものではなく、廃棄された状態で出土したものと思われる。

出土遺物（第96図）

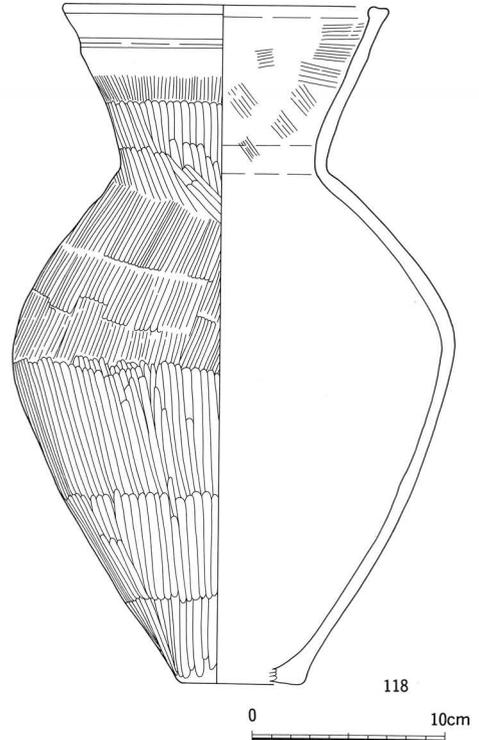
遺物は埋土中より壺形土器9点、甕形土器35点、高杯2点、弥生土器細片432点、石鏃1点、砥石1点、小形円柱状石斧1点、サヌカイト3点、結晶片岩3点、砂岩21点、石英1点が出土した。遺物は細片が多くとりあえず図化可能な9点を図で示した。

107は壺形土器の口縁部である。端部を上下に拡張し、端面に刻目を施している。口縁部は内外面ヨコナデで調整される。また図化は不可能であるが頸部に断面三角形のはりつけ突帯文が認められる壺形土器も出土している。108～115は甕形土器の口縁部である。口縁部は「く」



第97図 S K 1069実測図

69号土坑（S K 1069）（第97図）
 B調査区J-16・17グリッドからS K 1068と切りあった状態で検出され、調査区の中央や



第98図 S K 1069出土遺物実測図

の字状に外反している。口縁端部は下方にやや拡張するタイプ（108）と上下に拡張するタイプ（109～115）がある。口縁部は全て内外面ヨコナデが施される。口縁端部は不明瞭な凹線文を持つタイプ（110）と一条の凹線文を持つタイプ（111・112）、二条の凹線文を持つタイプ（113～115）が認められる。108は体部上位から中位にタテヘラミガキ、体部中位より下位にタテハケメで調整される。109は体部外面にタテヘラミガキで調整される。114は体部外面はタテヘラミガキが一部残存している。115は体部外面はタテヘラミガキが一部認められる。これらの弥生土器は弥生時代中期中様～後様の様相を呈している物と思われる。

116はサヌカイト製の石鏃である。基部に浅いU字状の抉りが見られ、凹基式と思われる。

117は結晶片岩製の小形円柱状石斧である。上部を欠損しているが、扁平な素材を用い石器全体に研磨痕が見られる。特に刃部は丁寧に研磨し鋭利な刃部を作出している。

69号土坑（S K 1069）（第97図）

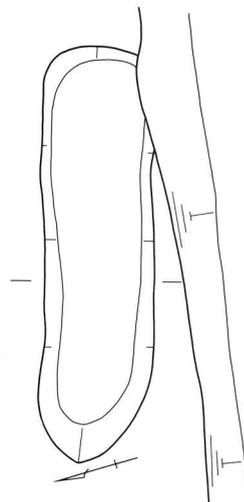
B調査区J-16・17グリッドからS K 1068と切りあった状態で検出され、調査区の中央や

や東寄りに位置する土坑である。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は長軸175cm、短軸70cm、深さ28cmである。床面はほぼ水平を呈し、壁面は緩やかに傾斜している。埋土は褐色砂質土である。出土遺物は土坑の北東側の埋土の上層より、長頸壺がほぼ完形の状態で倒壊して出土している。遺物はおもに埋土より出土している。

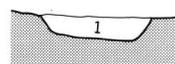
出土遺物 (第98図)

遺物は埋土より壺形土器3個体、弥生土器細片14点、サヌカイト1点、結晶片岩1点出土した。遺物は小片のため図化可能遺物は1点のみである。

118はほぼ完形の壺形土器である。口縁端部は拡張され、頸部より緩やかに外反する。体部の形状は倒卵型を呈し、最大径は体部中位に位置する。口縁部は内外面ヨコナデ、口縁部下はヨコナデによる一条の凹みを持つ。凹みの下はタテハケメが、頸部はタテヘラミガキで調整される。体部上位はタテハケメが、体部下位はタテヘラミガキが顕著に認められる。



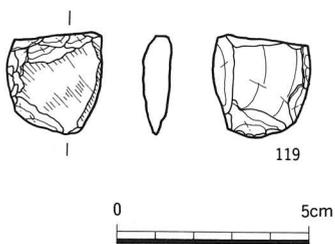
L=59.70m



0 1m

1 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土

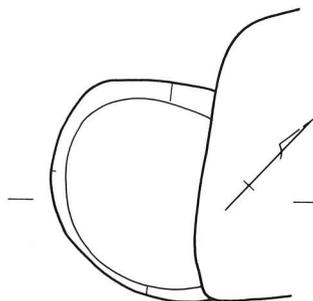
第99図 S K 1075実測図



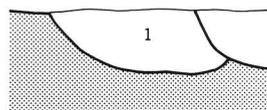
119

0 5cm

第100図 S K 1075出土遺物実測図



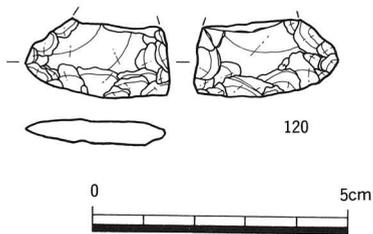
L=60.00m



1 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土

0 1m

第101図 S K 1086実測図



120

0 5cm

第102図 S K 1086出土遺物実測図

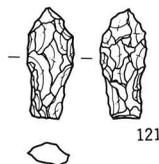
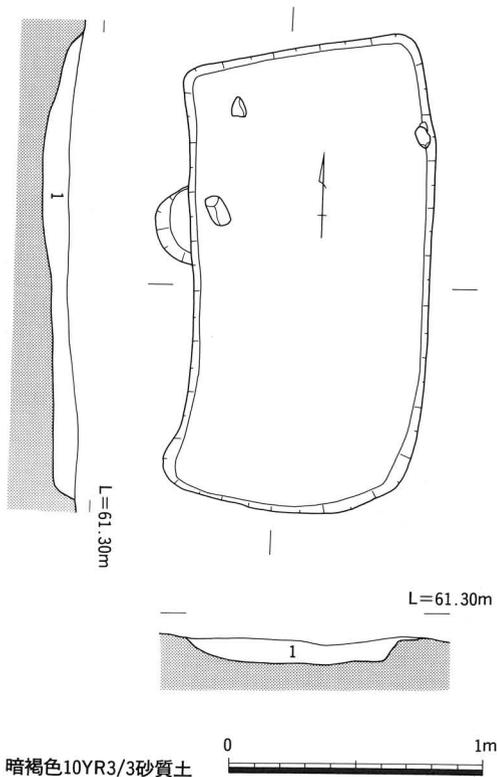
75号土坑 (S K 1075) (第99図)

B調査区 I-15グリッドから検出され、調査区の中央やや南寄りに位置する土坑である。南側は後世の濠堀によって攪乱を受けている。平面プランは隅丸方形を呈している。規模は長軸170cm、短軸40cm、深さは10cmである。床面は北側から南側に緩やかに傾斜している。壁面は緩斜面である。埋土は1層でにぶい黄褐色砂質土である。

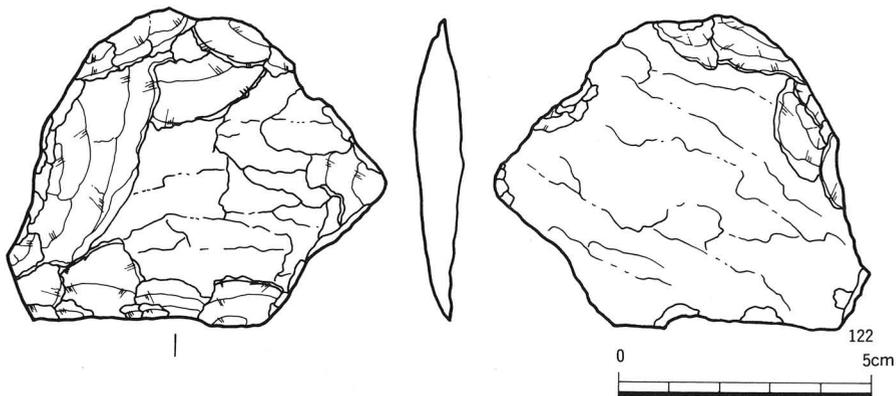
出土遺物 (第100図)

出土遺物は弥生土器細片7点、小形円柱状石斧1点、土師質土器細片6点、瓦器椀1点が埋土の中より出土している。出土遺物は細片が多く実測可能な1点を図化した。

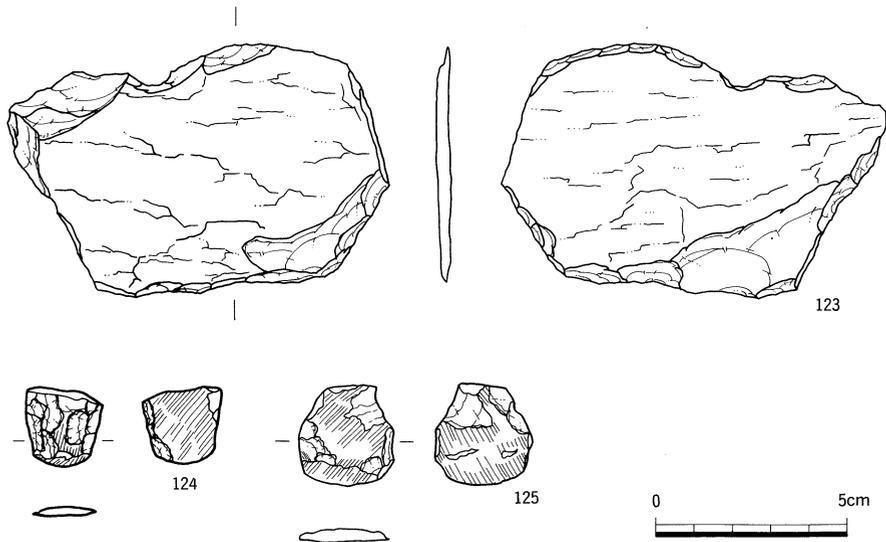
119は結晶片岩製の小形円柱状石斧である。薄手の素材を用い片面に研磨痕が見られる。上部を欠損しているが、刃部に研磨痕を施し鋭利な刃部を作出している。



第103図 S K 1112実測図



第104図 S K 1112出土遺物実測図(1)



第105図 S K 1112出土遺物実測図(2)

86号土坑 (S K 1086) (第101図)

B調査区G-16グリッドから検出され、調査区の南側に位置する。S K 1085に切られている。平面プランは楕円形状を呈していると思われる。規模は現況で長軸60cm、短軸43cm、深さ17cmである。床面は断面皿状を呈している。壁面は緩やかに傾斜している。埋土は1層にふい黄褐色砂質土である。出土遺物は埋土より出土している。

出土遺物 (第102図)

遺物は弥生土器細片7点、サヌカイト2点、石鏃1点出土している。遺物は細片が多くとりあえず実測可能な1点を図化した。

120はサヌカイト製の石鏃である。上部を欠損しているが、縁辺部は粗い調整加工が施されている。基部は抉りが見られず平基式と思われる。

112号土坑 (S K 1112) (第103図)

E調査区L・M-10グリッドから検出され、調査区の中央やや北寄り、S B 1005の南西に位置する土坑である。平面プランは不整隅丸長方形である。規模は長軸195cm、短軸95cm、深さ12cmを測る。床面は北端から中心にかけて船底状を呈し、中心から南端はほぼ水平である。壁面は緩やかに傾斜している。埋土は暗褐色砂質土である。出土遺物は埋土より出土している。

出土遺物 (第104・105図)

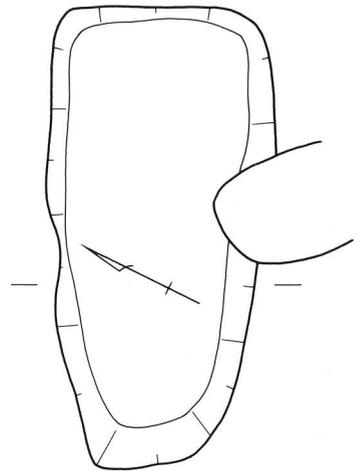
遺物は壺形土器 2 点、甕形土器 2 点、弥生土器細片38点、土師質土器 1 点、打製石庖丁 4 点、スクレイパー 1 点、石鏃 2 点、磨製石斧 1 点、小形円柱状石斧 2 点、サヌカイト 6 点、結晶片岩26点、チャート 1 点が出土している。出土遺物は細片が多く辛うじて実測可能遺物は 5 点のみである。

121はサヌカイト製の石鏃である。両面に細かく調整加工が施されている。最大部は体部上位 1/3 に位置する、有茎式の石鏃である。

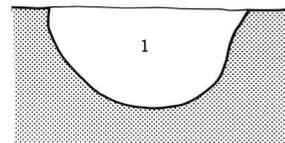
122はサヌカイト製のスクレイパーである。薄手の剥片を素材とし、主に片面に調整加工を施し刃部を作出している。

123は結晶片岩製の石庖丁である。薄手の素材を用い両側縁両面に調整加工を施し刃部を作出している。

124・125は結晶片岩製の小形円柱状石斧である。上部を欠損しているが、薄手の素材を用い両面に研磨痕が施される。先端部を研磨し鋭い刃部を作出している。



L=61.30m



1 暗褐色10YR3/4砂質土(炭化物を含む)

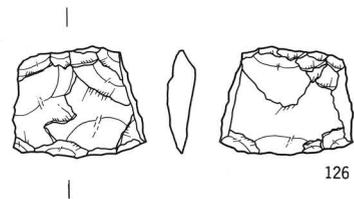
第106図 S K 1113実測図

113号土坑 (S K 1113) (第106図)

E調査区のほぼ中央、M-10グリッドに位置する土坑である。周囲には北側にS B 1005、南側にS K 1112が位置している。平面プランは隅丸方形状を呈している。規模は長軸125cm、短軸95cm、深さ28cmを測る。断面はU字状を呈している。埋土は暗褐色砂質土である。遺物は埋土より出土している。

出土遺物 (第107図)

遺物は甕形土器 1 点、弥生土器細片11点、楔形石器 1 点が出土した。弥生土器は細片のため、実



126



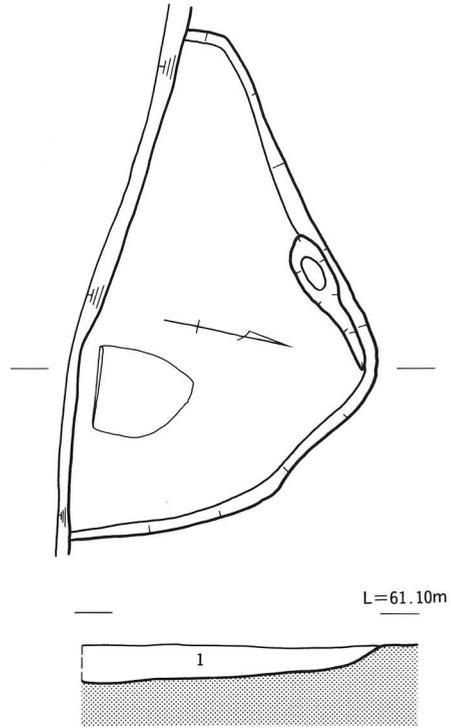
第107図 S K 1113出土遺物実測図

測可能な1点を図化した。

126はサヌカイト製の楔形石器である。薄手の剥片を素材として用い、形状は台形状を呈する。両側面に裁断面を持つ。

130号土坑 (S K 1130) (第108図)

E調査区J-10・11グリッドから検出され、調査区の南端部に位置する土坑である。南側は生活用道路のため調査ができず、全体の形状は不明である。発掘当初、S B 1001の残り部分と考えられたが、検討の結果、土坑と認定された。土坑の規模は現存で長軸125cm、短軸75cm、深度10cmを測る。床面はほぼ水平で、壁面は緩やかに傾斜している。遺物は埋土中より出土している。



1 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土

第108図 S K 1130実測図

出土遺物 (第109図)

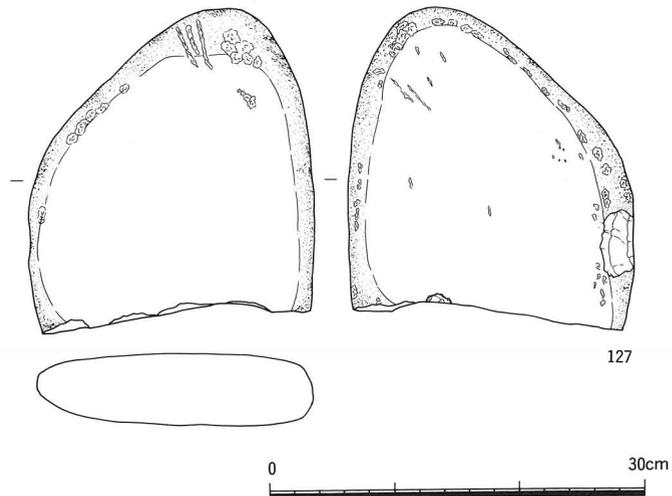
遺物は弥生土器細片5点、砥石が1点出土している。出土遺物は細片が多くとりあえず実測可能な1点を図化した。

127は砂岩製の砥石である。自然礫を素材として用い、両面に研磨痕がみられる。縁辺部は一部敲打痕が認められる。

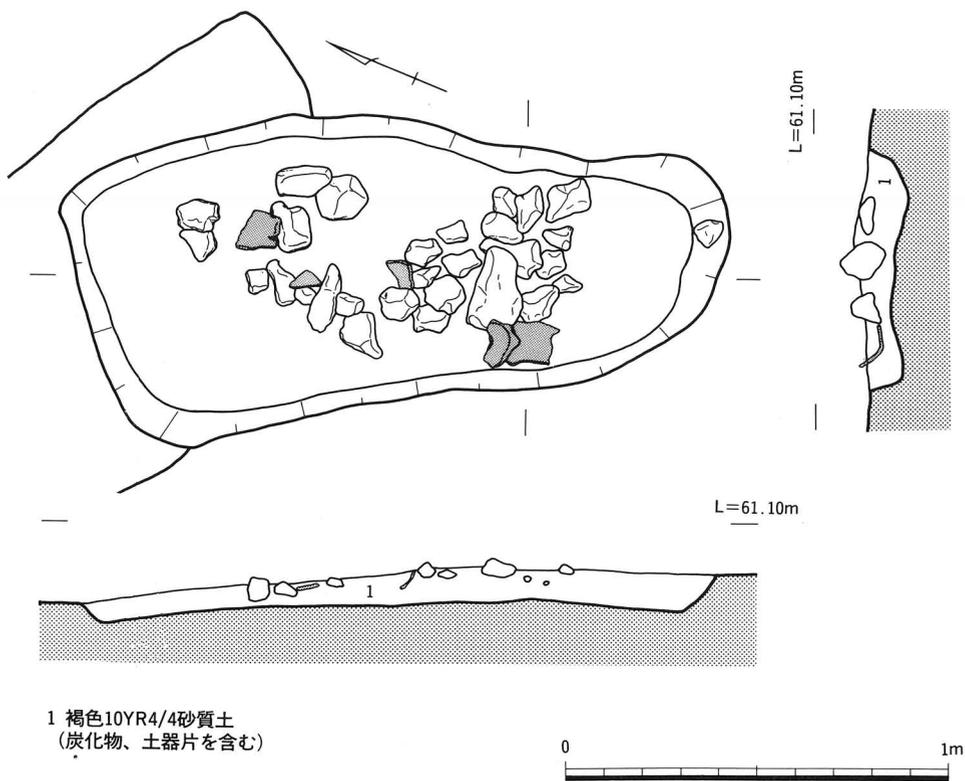
132号土坑 (S K 1132)

(第110図)

E調査区N-11グリッドからS K 1131を切った状態で検出され、調査区のやや北寄りに位置する。北東にはS B 1005が検出されている。平面プランは隅丸不整形形状を呈



第109図 S K 1130出土遺物実測図



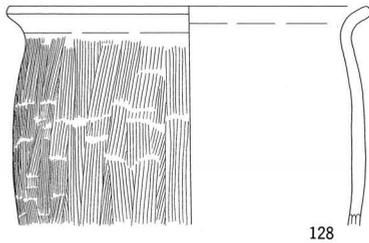
第110図 S K 1132実測図

する。規模は長軸180cm、短軸75cm、深さ12cmを測る。床面は中央が盛り上がり両端部が深くなる。壁面は緩やかに傾斜している。埋土から拳大の砂岩礫が土器とかみあった状態で検出された。砂岩礫は遺構の中央部を中心に周囲に分布しており、人為的に埋められたものと考えられる。埋土は褐色砂質土で炭化物を混入している。

出土遺物 (第111図)

出土遺物は埋土から甕形土器7点、弥生土器細片17点、石英1点が出土した。遺物は細片が多くここでは図化可能な2点を示す。

128・129は甕形土器である。128は口縁端部方形におさめる。口縁部は頸部より外方に掘曲している。体部はタテハケメで調整される。129は口縁端部を丸くおさめ、口縁部は頸部より外方に屈曲している。体部はやや内湾しながら立ち上がっている。底部は平底である。頸部は楕円直線文が8条、その下に楕円波状文が1条施されている。体部外面はタテハケメの後、粗いタテヘラミガキが部分的に認められる。これらの特徴より弥生時代中期前様に位置づけられると思われる。



141号土坑 (SK 1141) (第112図)

I 調査区U-19グリッドから検出され、調査区の東端中央部に位置する。西側は調査区外のため調査が行われていない。平面プランは不整楕円形を呈するものと思われる。規模は現存で長軸150cm、短軸135cm、深さ20cmである。床面はほぼ水平である。壁面は、北東側が上位から中位まで緩斜面、中位より下位にかけて急斜面となる。埋土は灰黄褐色砂質土である。遺物は埋土より出土している。

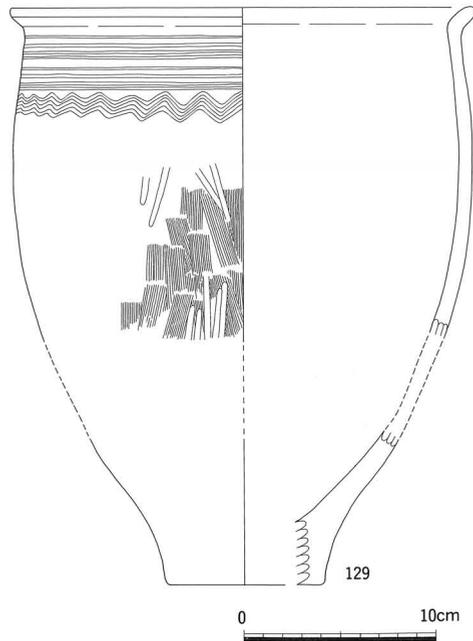
出土遺物 (第113図)

出土遺物は埋土中より壺形土器1点、甕形土器2点、弥生土器細片16点、土師質土器22点、瓦器碗1点、サヌカイト2点が出土している。遺物は細片が多く、特に中世遺物は摩滅を受けている。ここでは辛うじて図化可能な1点を示す。

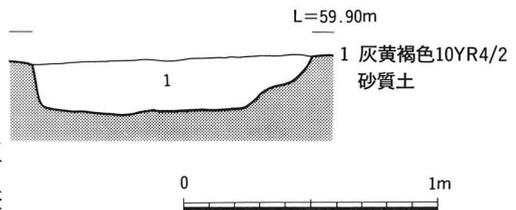
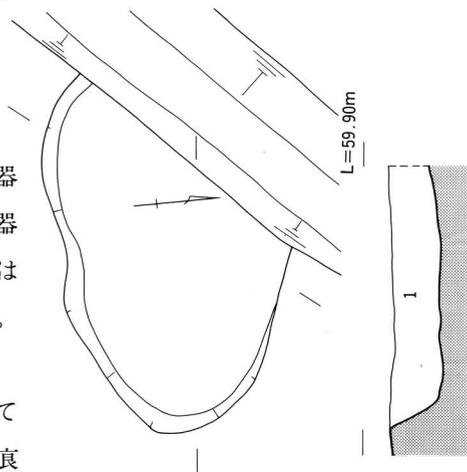
130は結晶片岩製の磨石である。上部は欠損している。形態は棒状を呈している。先端部は研磨痕が認められる。

145号土坑 (SK 1145) (第114図)

I 調査区T-18グリッドから検出され、調査区の南端に位置する土坑である。平面プランは不整楕円形を呈する土坑である。規模は長軸70cm、短



第111図 SK 1132出土遺物実測図

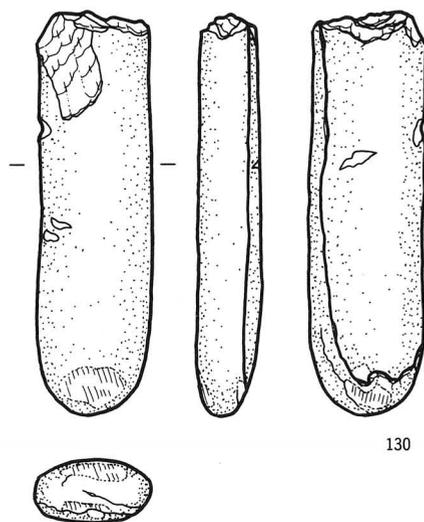


第112図 SK 1141実測図

軸60cm、深さ24cmを測る。床面はほぼ水平、断面はU字状を呈する。埋土は2層で1、灰黄褐色砂質土、2、にぶい黄褐色砂質土がレンズ状に堆積している。出土遺物は埋土より出土している。

出土遺物 (第115図)

出土遺物は弥生土器が1点出土している。131は壺形土器の底部である。底部はやや上げ底を呈している。体部は直線的に立ち上がっていく。体部外面はタテヘラミガキで調整される。



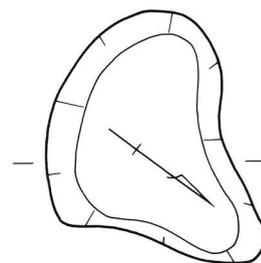
130



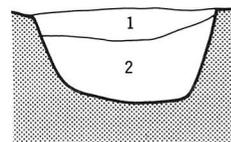
第113図 S K 1141出土遺物実測図

148号土坑 (S K 1148) (第116図)

I調査区S-19グリッドから検出され、調査区の南端に位置する土坑である。本土坑はS P 1810に切られた状態で検出された。平面プランは不整楕円形状を呈する。規模は長軸60cm、短軸55cm、深さ28cmを測る。断面はU字状を呈する。埋土は1層でにぶい黄褐色砂質土である。出土遺物は埋土より出土している。



L=59.80m



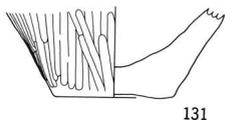
1 灰黄褐色10YR5/2砂質土
2 にぶい黄褐色10YR5/3砂質土

第114図 S K 1145実測図

出土遺物 (第117図)

出土遺物は甕形土器2点、弥生土器細片12点、結晶片岩1点が出土している。しかし遺物は細片がほとんどのため辛うじて図化可能な1点を示した。

132は甕形土器の口縁部である。口縁部は方形におさめる。口縁部は「く」の字状に外反している。



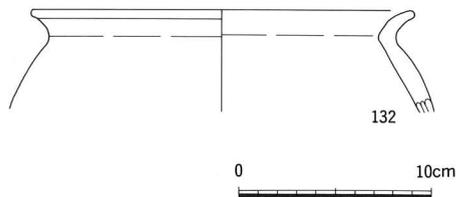
131



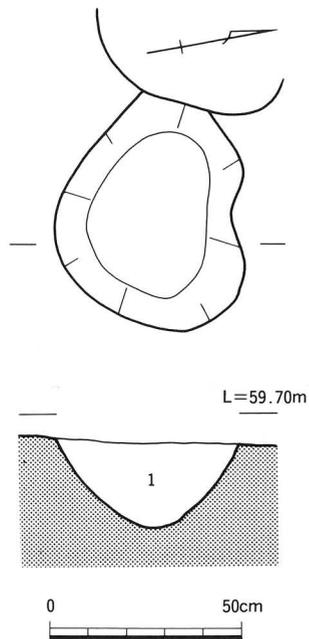
第115図 S K 1145出土遺物実測図

152号土坑（S K 1152）（第118図）

F調査区R-17・18グリッドからS X1008を切った状態で検出された土坑である。本土坑は調査区の北東に位置する。平面プランは隅丸方形形状を呈している。規模は長軸120cm、短軸120cm、深さは20cmを測る。床面はほぼ水平である。床面は中央部と西端部中央にピット状の落ちを持っている。埋土は1層でいふい黄褐色砂質土である。土層の堆積状況からピット状の落ちは土坑に属するものと考えられる。遺物は西端中央部床面から集中的に出土している。



第117図 S K 1148出土遺物実測図

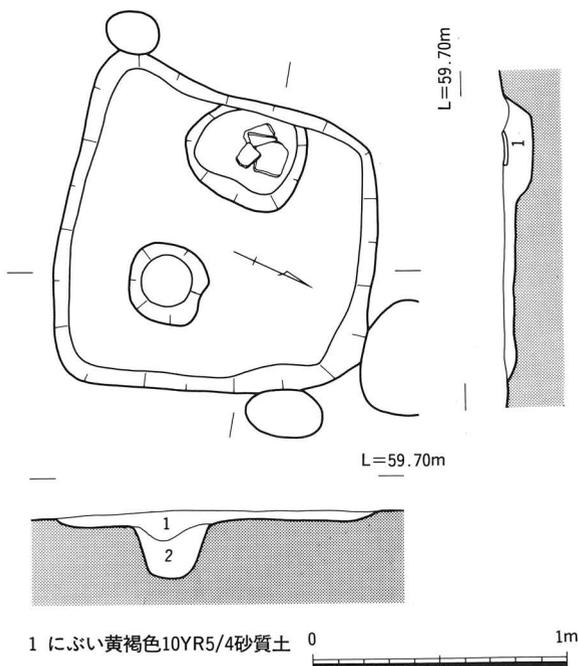


1 にいふい黄褐色10YR4/3砂質土
第116図 S K 1148実測図

出土遺物（第119図）

出土遺物は壺形土器2点、甕形土器1点、弥生土器細片4点、サヌカイト2点が出土した。遺物は細片がほとんどのため図化可能な3点を図示した。

133・134は広口壺形土器である。133は口縁端部を方形におさめ、口縁部はラッパ状に広がる。口縁端面は上下に刻目文が入り、口縁部内側は扇形文が一部認められる。頸部外面はタテハケメ、頸部内面はヨコハケメが部分的に認められる。134は口縁端部方形におさめ、やや上下に拡張されている。口縁部は頸部よりゆるやかに外反している。頸部外面は、タテハケメの後、粗いタテヘラミガキで調整される。内面はヨ



第118図 S K 1152実測図

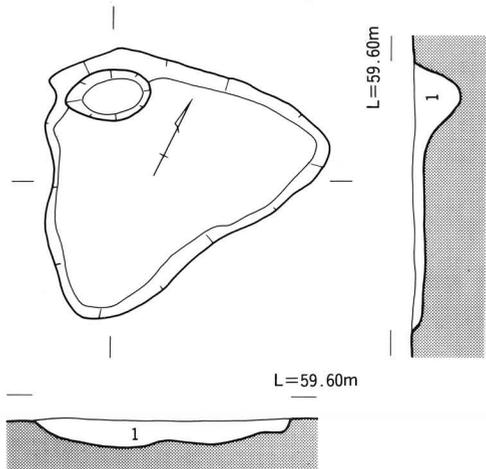
コナデの後、粗いヨコヘラミガキで調整される。135は甕形土器の底部である。底部はやや上げ底を呈し、体部に向かい直線的に立ち上がる。これらの弥生土器は弥生時代中期中様に位置する物と思われる。

153号土坑

(S K 1153) (第120図)

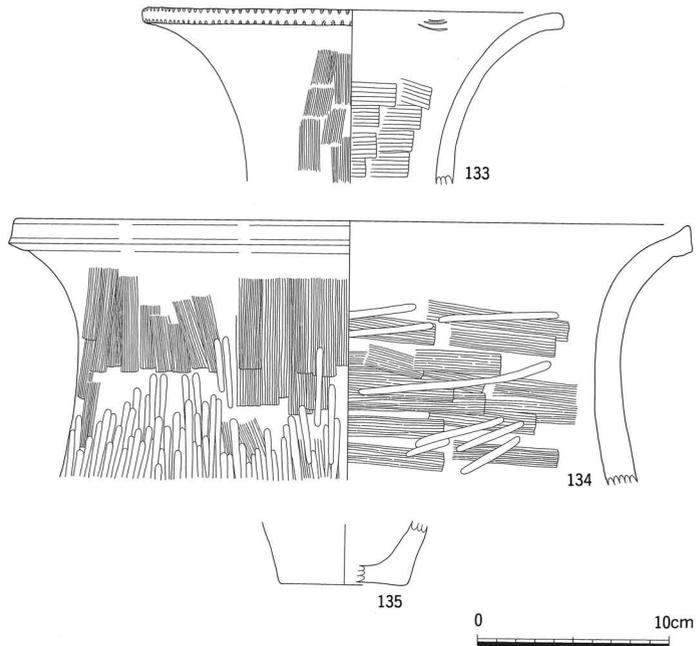
F調査区R-18グリッドから検出され、調査区の北側に位置する土坑である。西側には

S X1008が位置する。平面プランは不整楕円形状を呈する。規模は長軸115cm、短軸95cm、深さ15cmを測る。床面は凹凸を持ち、東側はピット状の落ちがみられる。壁面は緩斜面である。

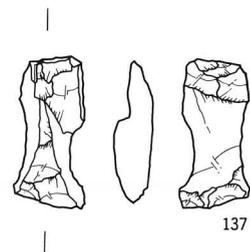
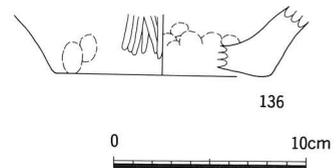


1 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土 (炭化物を含む)

第120図 S K 1153実測図



第119図 S K 1152出土遺物実測図



第121図 S K 1153出土遺物実測図

埋土はにぶい黄褐色砂質土である。遺物は埋土中より出土している。

出土遺物 (第121図)

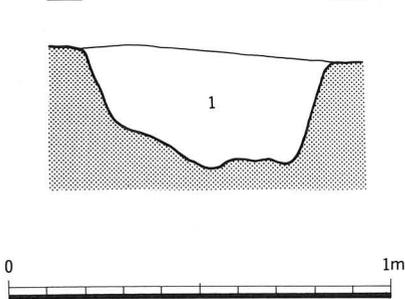
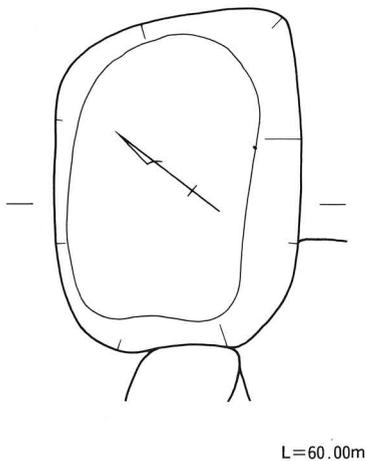
出土遺物は壺形土器 2 点、甕形土器 1 点、弥生土器細片 23 点、楔形石器 1 点、サヌカイト 2 点出土した。しかし、遺物は細片のため図化可能遺物 2 点を図で示した。

136は壺形土器の底部である。底部は上げ底を呈し、体部外面はタテヘラミガキで調整される。

137はサヌカイト製の楔形石器である。薄手の剥片を素材として用いる。形状は長方形を呈し、両側縁に裁断面がみられる。

158号土坑 (S K 1158) (第122図)

F 調査区 R-16 グリッドから検出され、調査区の北側に位置する土坑である。S P 1876・1877 を切った状態で検出された。東側には S X 1008 が位置する。平面プランは隅丸方形を呈する。規模は長軸 90cm、短軸 65cm、深さ 30cm を測る。床面は、凹凸を持つ。壁面は中位までやや急に落ち込み、中位から下位は緩やかに落ちる。埋土はにぶい黄褐色砂質土の 1 層で、炭化物を少し混入する。遺物は埋土より出土している。



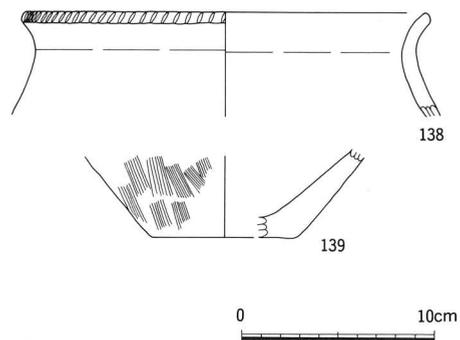
1 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(炭化物を含む)

第122図 S K 1158実測図

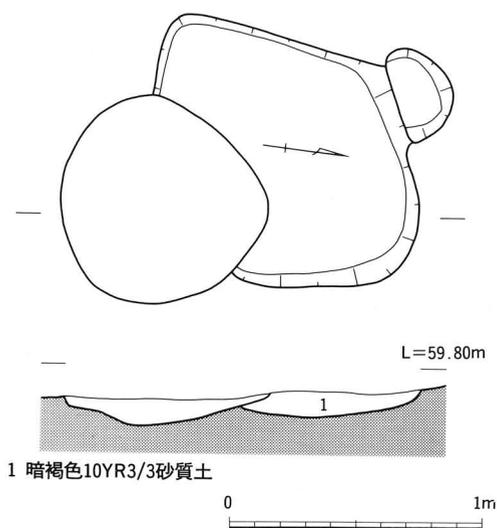
出土遺物 (第123図)

出土遺物は壺形土器 1 点、甕形土器 3 点、弥生土器細片 33 点、サヌカイト 1 点が出土した。出土遺物は細片のため実測可能な 2 点を示した。

138は甕形土器の口縁部である。口縁端部は方形



第123図 S K 1158出土遺物実測図



第124図 S K 1163実測図

におさめられ、口縁部は外方に屈曲している。口縁端部は刻目文が認められる。139は壺形土器の底部である。底部は平底を呈し、体部は直線的に立ち上がっている。体部外面はタテハケメで部分的に調整される。

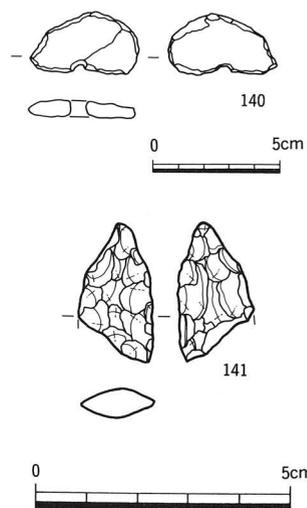
163号土坑 (S K 1163) (第124図)

F調査区のほぼ中央に位置し、Q-17グリッドから検出された土坑である。S K 1164に切られた状態で検出された。平面形状は隅丸不整楕円形状を呈する。規模は長軸105cm、短軸60cm、深さ16cmを測る。断面は船底状を呈する。壁面は緩斜面である。埋土は暗褐色砂質土である。遺物は埋土より出土している。

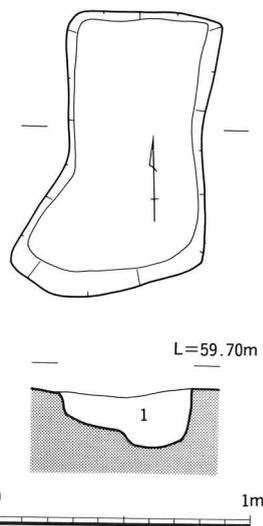
出土遺物 (第125図)

出土遺物は埋土中より弥生土器細片30点、須恵器細片1点、紡垂車1点、石鏃1点、石ノミ1点、サヌカイト2点、結晶片岩1点出土した。出土遺物は細片のため辛うじて図化可能な2点を示した。

140は紡錘車である。下半分を欠損している。中央に貫通した円孔が認められる。

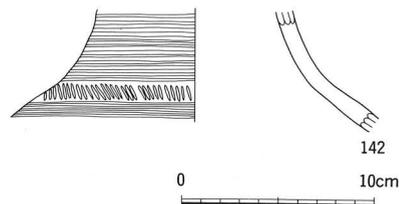


第125図 S K 1163出土遺物実測図

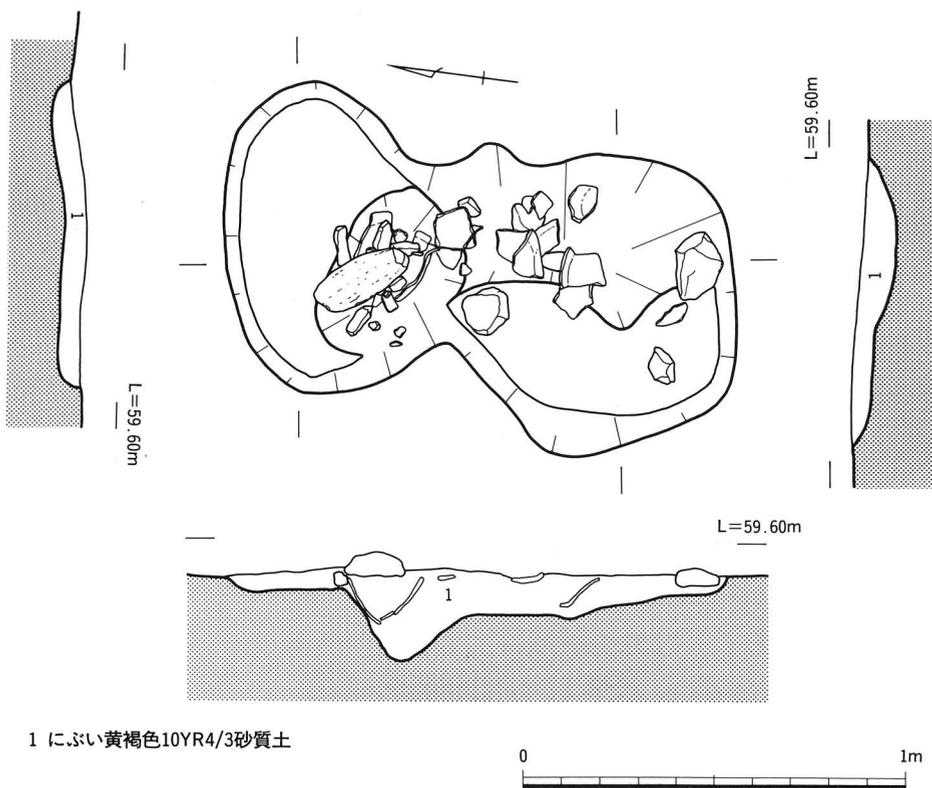


1 暗褐色10YR3/3砂質土(炭化物を含む)

第126図 S K 1169実測図



第127図 S K 1169出土遺物実測図



第128図 S K 1171・1172実測図

141はサヌカイト製の石鏃である。基部は欠損している。両面は細かな調整加工が施されている。

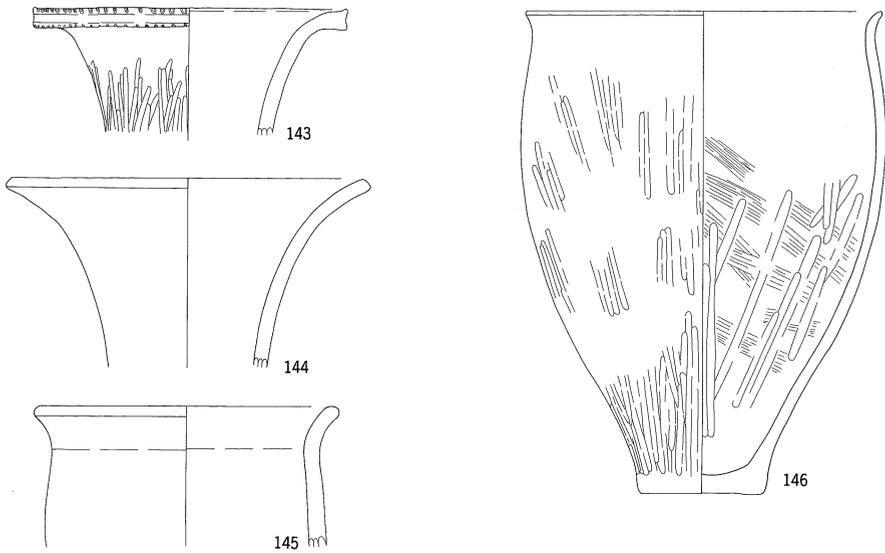
169号土坑 (S K 1169) (第126図)

F調査区Q-17グリッドから検出され、調査区のほぼ中央に位置する土坑である。平面形状は不整隅丸方形形状を呈する。規模は長軸118cm、短軸55cm、深さ20cmを測る。床面は凹凸を持つ。壁面は急斜面を呈している。西壁は一度落ちた後テラス状に広がり、再び落ちる形状を呈している。埋土は暗褐色砂質土で、炭化物を少し混入している。遺物は埋土中から出土している。

出土遺物 (第127図)

出土遺物は壺形土器1点、弥生土器細片7点出土した。出土遺物は細片が多く実測可能遺物1点を図示した。

142は壺形土器の頸部である。体部外面は上位より櫛描直線文、刺突文、櫛描直線文が施さ

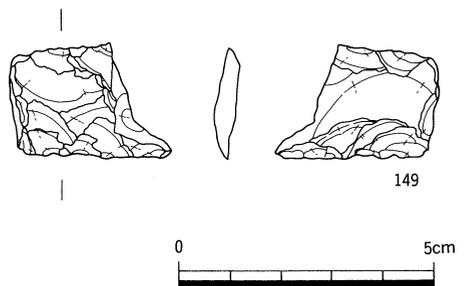
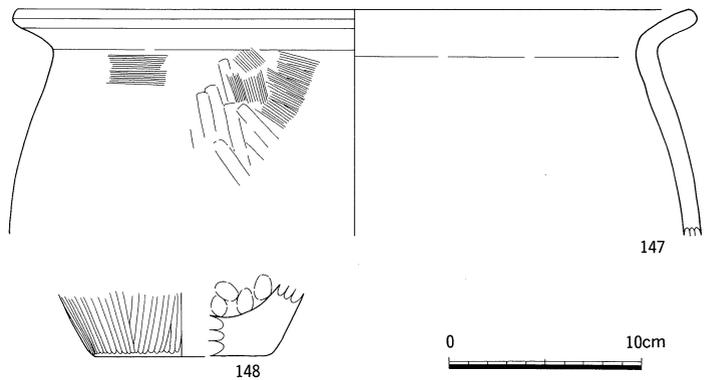


れている。

171・172号土坑
(S K 1171・1172)
(第128図)

F調査区Q-17・18
グリッドから検出され、
調査区の中央に位置す

る。検出当時は、2つの土坑が切りあった状態を確認されており、個々の土坑として理解していた。しかし、遺物の出土状況、土層の堆積状況から一体のものと考えてよさそうである。平面プランは瓢箪状を呈している。規模は長軸140cm、短軸50cm測る。床面は南北両端部で水平を呈し、遺構中央部付近は凹凸が顕著に認められる。床面は浅いところで約12cm、深いところで約23cmを測る。壁面は緩斜面である。埋土はにぶい黄褐色砂質土1層である。出土遺物は土坑中央部からやや北側最深部の埋土上面より甕形土器が横倒しに安置され



第129図 S K 1171・1172出土遺物実測図

る。そして、その上部に長楕円形で、偏平な砂岩が置かれた状態で検出された。ほかに壺形土器、甕形土器それぞれ2個体分の細片が、中央部より南側上層にかけて出土した。

出土遺物（第129図）

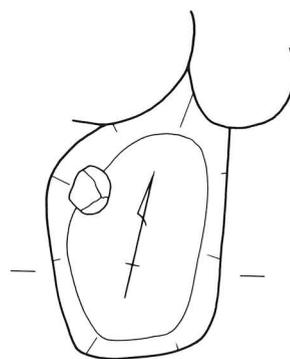
出土遺物は、壺形土器3点、甕形土器10点、弥生土器72点、楔形石器1点、結晶片岩1点、砂岩2点出土した。出土遺物は細片が多く実測可能遺物7点を図化した。

143・144は広口壺形土器である。143は口縁端部方形におさめ、端部は上下にやや拡張される。形態は、頸部から口縁端部に向かい緩やかに外反しラップ状を呈している。口縁端部上下両端には刻目文が施される。頸部外面はタテヘラミガキで調整する。144は直立する頸部から緩やかに外反し口縁端部に到る。口縁端部は方形におさめ、143のように口縁端部に刻目は認められない。145～147は甕形土器である。145は口縁端部を丸くおさめ、口縁部は外方に屈曲する。146は完形である。口縁端部は丸くおさめ、口縁部は緩やかに外方に屈曲する。体部は外彎気味に立ち上がり、底部は平底を呈す。体部外面はタテヘラミガキで調整される。体部内面はナナメヨコハケメの後、粗いタテヘラミガキが部分的にみられる。147は口縁端部を方形におさめ、口縁部は「く」の字状に外反する。体部外面は不明瞭な板状工具によるハケメもしくはイタナデで調整される。148は壺形土器の底部である。底部は平底を呈する。外面はタテヘラミガキで調整する。これらの土器は弥生時代中期前様の様相を呈している物と思われる。

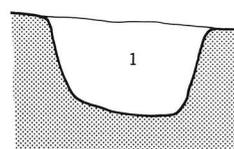
149はサヌカイト製の楔形石器である。薄手の剥片を素材とする。一方を欠損しているが、長方形状を呈していると思われる。下端部両面に調整加工を施し、刃部を作出している。

173号土坑（S K 1173）（第130図）

F調査区Q-17グリッドから検出され、調査区のほぼ中央に位置する土坑である。S P 10145とS P 10146に切られた状態で検出された。平面プランは隅丸不整形円形を呈する。規模

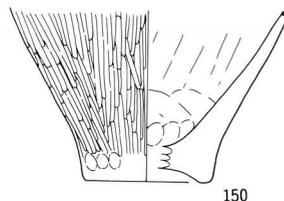


L=59.60m



1 褐色10YR4/4砂質土

第130図 S K 1173実測図



150



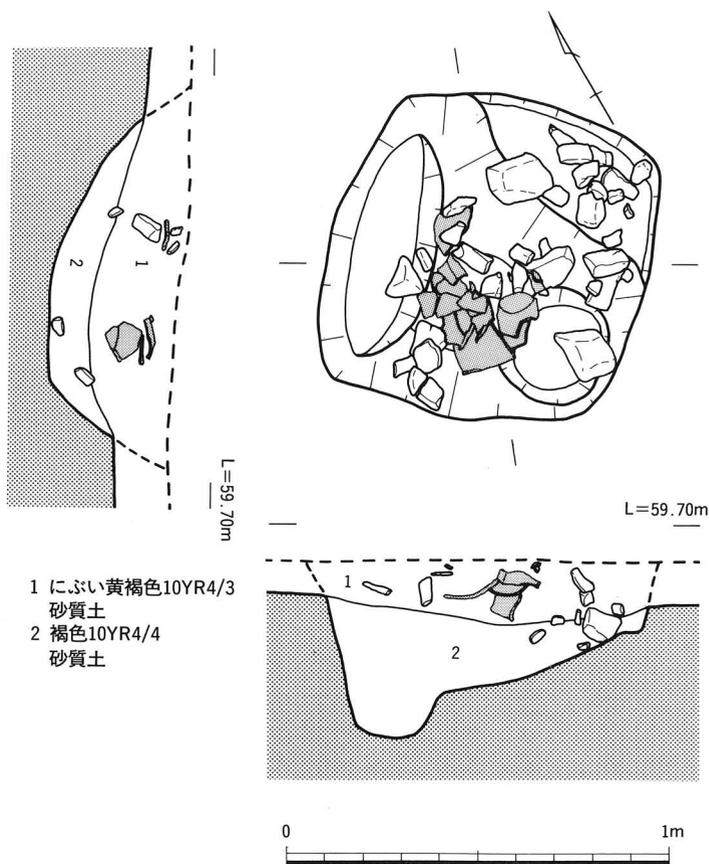
第131図 S K 1173出土遺物実測図

は長軸100cm、短軸45cm、深さ25cmを測る。断面形状はU字状を呈し、壁面は急斜面である。埋土は褐色砂質土である。遺物は埋土より出土している。

出土遺物 (第131図)

出土遺物は甕形土器1点、弥生土器細片2点が埋土中より出土している。遺物は細片が多く図化可能な1点を示した。

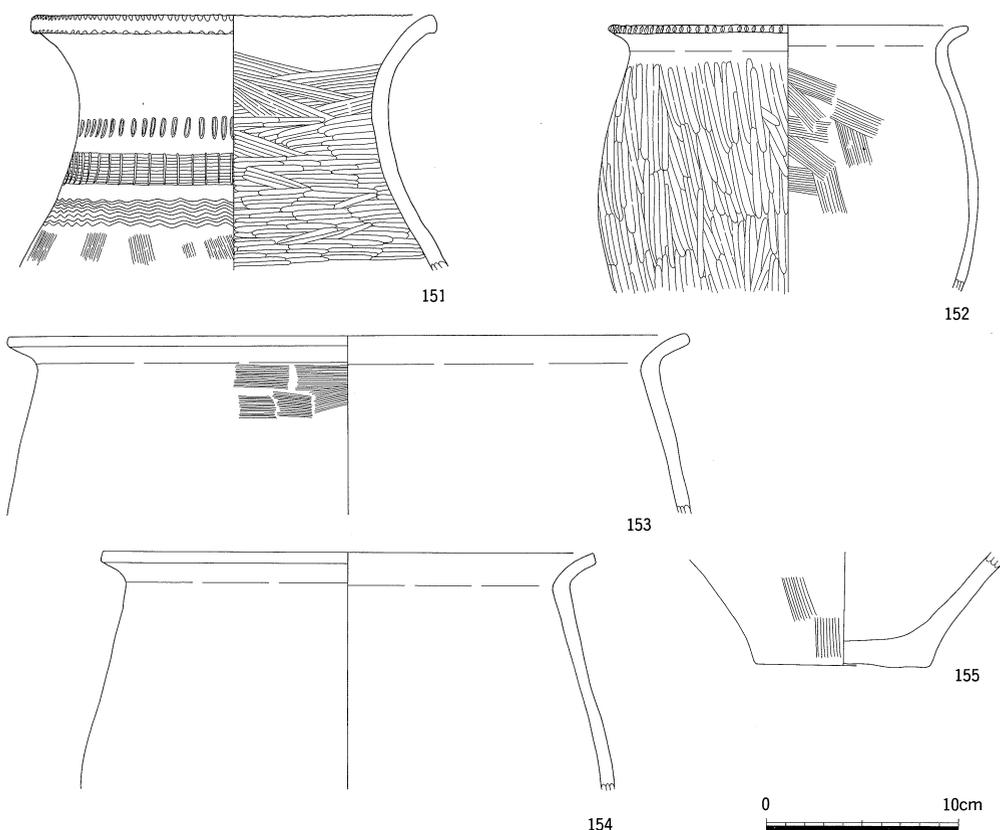
150は甕形土器の底部である。底部は上げ底を呈し、体部に向かい直線的に立ち上がる。体部外面はタテヘラミガキ、体部内面はタテナデで調整される。



第132図 S K 1185実測図

185号土坑 (S K 1185) (第132図)

F調査区P-17グリッドから検出され、調査区のほぼ中央に位置する土坑である。遺構検出時に検出作業が難航したため、遺構の上部をやや掘削している。平面プランは隅丸方形を呈する。規模は長軸85cm、短軸80cmを測る。床面は凹凸が認められ、ピット状に深くなる部分、長楕円状に深くなる部分がある。床面はもっとも深いところで約35cm、浅いところで約15cmを測る。埋土は2層に分かれる。埋土上層のにぶい黄褐色砂質土から、壺形土器1個体、甕形土器3個体分の土器が遺構中央部より拳大の砂岩礫と折り重なるような形で検出されたが、完形になるものは認められない。礫と土器は床面から完全に遊離しているが、偶然埋没したものとは考えにくく、両者に何らかの有機の関係があるものと思われる。



第133図 S K 1185出土遺物実測図

出土遺物（第133図）

出土遺物は壺形土器3点、甕形土器6点、弥生土器細片49点が埋土中より出土している。遺物は細片のため図化可能な5点を示した。

151は広口壺形土器である。形態は体部より緩やかに内傾し、頸部との区別はあまり明瞭ではない。口縁部は緩やかに外反する。口縁端部はやや上下に拡張される。口縁端部上下端には刻目文を施している。頸部は上から列状圧痕文、櫛描簾状文、櫛描波状文を施している。頸部には部分的にタテハケメで調整される。内面は頸部上位にヨコハケメ、後にヨコヘラミガキで調整する。152～155は甕形土器である。152は口縁端部を丸くおさめ頸部より緩やかに外反する。体部は外彎しながら頸部に向かって立ち上がる。口縁端面には刻目文を施している。体部外面はタテヘラミガキ、体部内面はタテハケメで調整する。153・154は口縁端部を方形におさめ、口縁部は「く」の字状に外反する。153は体部外面をヨコハケメで調整する。155は甕形土器の底部である。底部は平底を呈し、体部に向かい直線的に立ち上がる。体部外面は部分的にタテハケメで調整する。

192号土坑 (S K 1192) (第134図)

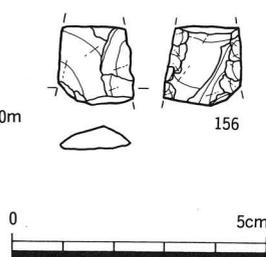
G調査区P・Q-19グリッドから検出され、調査区の中央、S X 1015の北西に位置する土坑である。平面プランは隅丸不整形を呈する。規模は長軸210cm、短軸90cm、深さ10cmを測る。床面はほぼ水平を呈し、壁面は緩やかに傾斜している。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、やや粘性を持つ。遺物は埋土より出土している。



第134図 S K 1192実測図

出土遺物 (第135図)

出土遺物は壺形土器1点、弥生土器細片14点、土師質土器細片2点、サヌカイト片2点、石鏃1点出土している。遺物は細片のため図化可能な1点を示した。



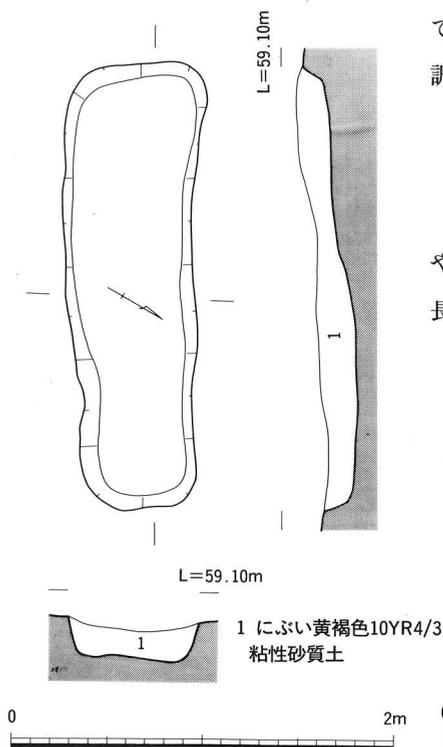
第135図 S K 1192出土遺物実測図

156はサヌカイト製の石鏃である。先端部と基部を欠損している、両縁には粗い調整加工が施され、1次剥離痕が残存している。

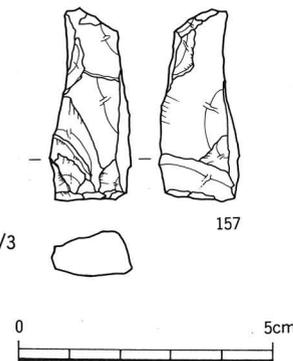
195号土坑 (S K 1195) (第136図)

G調査区O-19グリッドから検出され、調査区やや南側に位置する土坑である。平面プランは隅丸不整形長方形である。土坑は上半部を掘削されており現況で

規模は長軸165cm、短軸55cm、深さ20cmを測る。断面は中央部がやや盛り上がり、両端に凹みがある。壁面の傾斜はやや急である。埋土はにぶい黄褐色砂質土でやや粘性を持つ。遺物は埋土より出土している。



第136図 S K 1195実測図

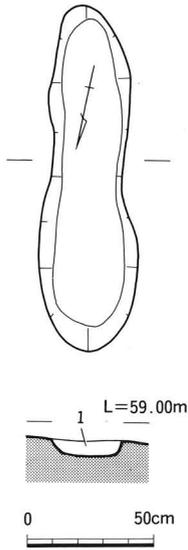


第137図 S K 1195出土遺物実測図

出土遺物 (第137図)

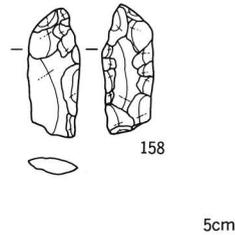
出土遺物は弥生土器細片28点、土師質土器細片1点、楔形石器1点
 が出土した。遺物は細片が多く実測可能遺物は1点のみである。

157はサヌカイト製の楔形石器である。薄手の剥片を素材とし、形態
 は長方形状を呈し、両側縁に裁断面を持つ。



1 暗褐色10YR3/3粘性砂質土

第138図 SK 1196実測図



第139図 SK 1196出土遺物実測図

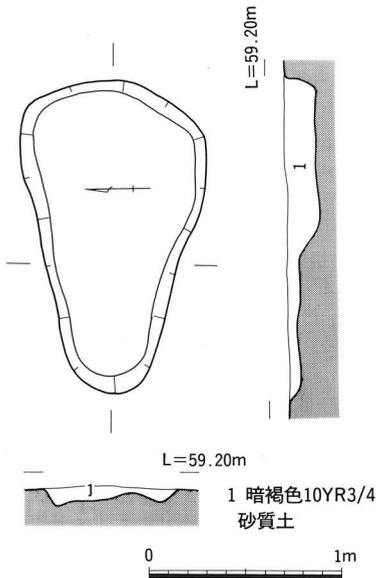
196号土坑 (SK 1196) (第138図)

G調査区の南側に位置し、N-20グリッド
 から検出された土坑である。平面プラン
 は隅丸不整形形状を呈している。土坑は上
 部を掘削され、現況で規模は長軸135cm、短
 軸30cm、深さ8cmを測る。床面は平坦であ
 る。壁面はやや急斜面である。埋土は暗褐
 色砂質土で、やや粘性を持つ。遺物は埋土
 より出土している。

出土遺物 (第139図)

出土遺物は弥生土器細片2点、土師質土
 器細片1点、石鏃1点が出土している。遺
 物は細片のため実測可能遺物は1点のみで
 ある。

158はサヌカイト製の石鏃の未製品であ
 る。基部を欠損し、縁辺部は粗い調整加工
 が施されている。



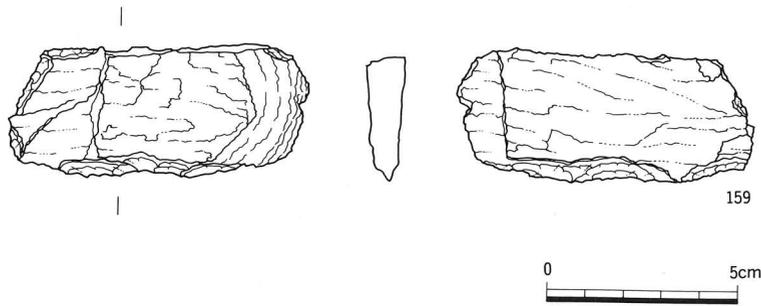
1 暗褐色10YR3/4
 砂質土

第140図 SK 1215実測図

215号土坑 (SK 1215) (第140図)

D調査区J-17・18グリッドから検出さ
 れ、調査区の西側中央部に位置する土坑で
 ある。南側ではSX1024が検出されている。

平面プランは隅丸不整形形状を呈している。規模は長軸120cm、短軸70cm、深さ18cmを測る。
 床面は水平であるが遺構中央部付近に段差が生じている。壁面はやや急斜面である。埋土は
 暗褐色砂質土1層である。遺物は埋土中より出土している。



第141図 S K 1215出土遺物実測図

出土遺物 (第141図)

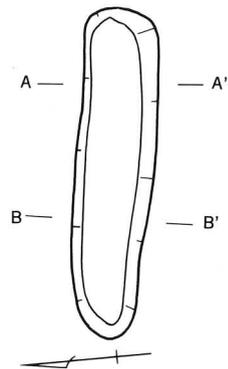
遺物は弥生土器細片 2 点、土師質土器細片 1 点、打製石庖丁 1 点出土した。出土遺物は細片のため実測可能遺物は 1 点のみである。

159は結晶片岩製の石庖丁である。薄手の剥片を素材として用い、一方の縁辺部両面に調整加工を施している。端部に抉りは認められない。

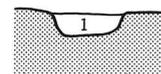
溝状遺構

11号溝状遺構 (S D 1011) (第142図)

G調査区Q-21グリッドから検出され、調査区の北側に位置する溝状遺構である。平面プランは隅丸長方形形状を呈している。規模は長軸180cm、短軸40cm、深さ12cmを測る。床面はほぼ水平であり、壁面は急斜面を呈している。埋土は鈍い黄褐色砂質土を呈し、粘性を持っている。出土遺物は弥生土器細片が 3 点、土師質土器皿が 1 点、土師質土器細片が 2 点出土した。遺物は細片であり実測可能なものは認められない。土師質土器は摩滅が激しく流れ込みと思われる。



A — L=59.30m — A'



B — L=59.30m — B'



1 にぶい黄褐色10YR4/3粘性砂質土
2 にぶい黄褐色10YR5/3粘性砂質土

第142図 S D 1011実測図

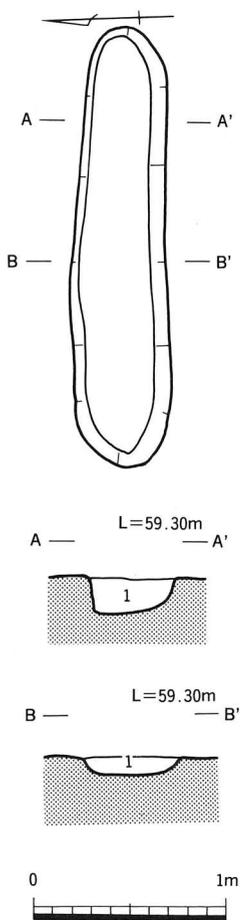
12号溝状遺構 (S D 1012) (第143図)

G調査区Q-21グリッドから検出され、調査区の北側に位置する溝状遺構である。平面プランは隅丸長方形形状を呈している。規模は長軸240cm、短軸45cm、深さは東側で20cm、西側で10cmを測り、東側が深くなっている。床面は中央付近で段差を持つ。壁面は急斜面である。埋土は鈍い黄褐色砂質土を

呈し、粘性を持っている。出土遺物は弥生土器細片13点、土師質土器細片12点、石英1点が出土したが、細片のため実測可能遺物は認められない。土師質土器は摩滅が激しく流れ込みと思われる。

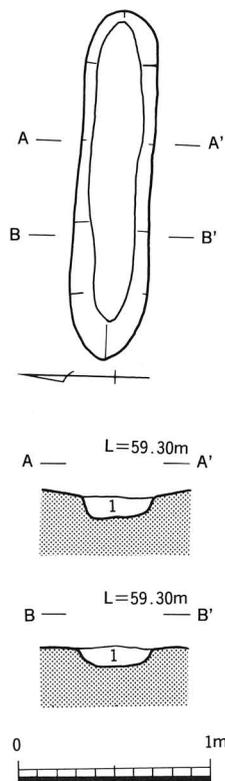
13号溝状遺構 (S D 1013) (第144図)

G調査区Q-22グリッドから検出され、調査区の北側に位置する溝状遺構である。平面プランは隅丸長方形形状を呈している。規模は長軸190cm、短軸40cm、深さ10cmを測る。床面は平坦である。壁面は急斜面である。埋土は鈍い黄褐色砂質土で、粘性を持つ。出土遺物は弥生土器細片2点、結晶片岩1点が出土したが遺物は細片の為、実測可能遺物は認められない。



1 にぶい黄褐色10YR4/3粘性砂質土

第143図 S D 1012実測図



1 にぶい黄褐色10YR5/3粘性砂質土

第144図 S D 1013実測図

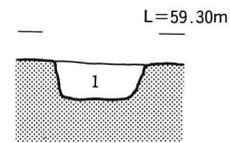
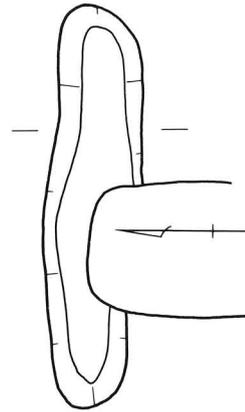
14号溝状遺構 (S D 1014) (第145図)

G調査区Q-22グリッドから検出され、調査区の北側に位置する溝状遺構である。南壁中央部分はSK 1194に切られている。平面プランは隅丸長形状を呈している。規模は長軸215cm、短軸40cm、深さ20cmを測る。床面は水平を呈し、壁面は急斜面である。埋土は鈍い黄褐色で、粘性を持つ。出土遺物は埋土より出土している。

出土遺物 (第146図)

出土遺物は弥生土器細片5点、楔形石器1点、土師質土器細片11点、須恵質土器1点、サヌカイト片4点が出土している。土師質土器は摩滅が激しく、流れ込みと思われる。遺物は細片が多く実測可能遺物は1点のみである。

160はサヌカイト製の楔形石器である。薄手の剥片を素材として用い、形状は台形状を呈している。一方の側縁部に裁断面が認められる。下端部両面に調整加工を施し刃部を作出している。



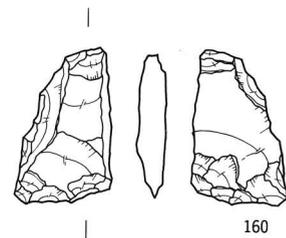
1 鈍い黄褐色10YR4/3 粘性砂質土

第145図 S D 1014実測図

不明遺構

7号不明遺構 (S X 1007) (第147図)

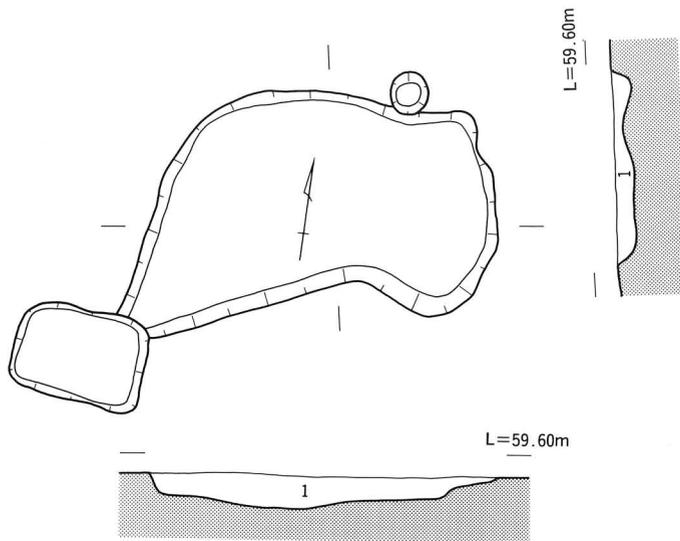
F調査区R-18・19グリッドから検出され、調査区の北端に位置する。本遺構はS X 1008の東側に位置し、SK 1156に切られた状態で検出された。平面プランは隅丸不整形を呈する。規模は長軸260cm、短軸140cm、深さ22cmを測る。床面には凹凸が認められ、遺構中央部より、側縁の方がやや深い。壁面は緩やかに傾斜している。遺物は埋土より出土している。



出土遺物 (第148図)

出土遺物は甕形土器1点、弥生土器細片3点、結晶

第146図 S D 1014出土遺物実測図



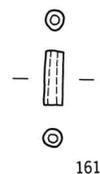
1 にぶい黄褐色10YR5/3砂質土(炭化物を含む)



第147図 S X 1007実測図

片岩片 1 点、管玉 1 点が出土している。弥生土器は細片のため実測に耐えるものは見られず、実測可能な管玉 1 点を図化した。

161は緑色凝灰岩製の管玉である。形態は細型を呈し、長さ0.7cm、直径2.5cm、孔径0.12cmを測る。



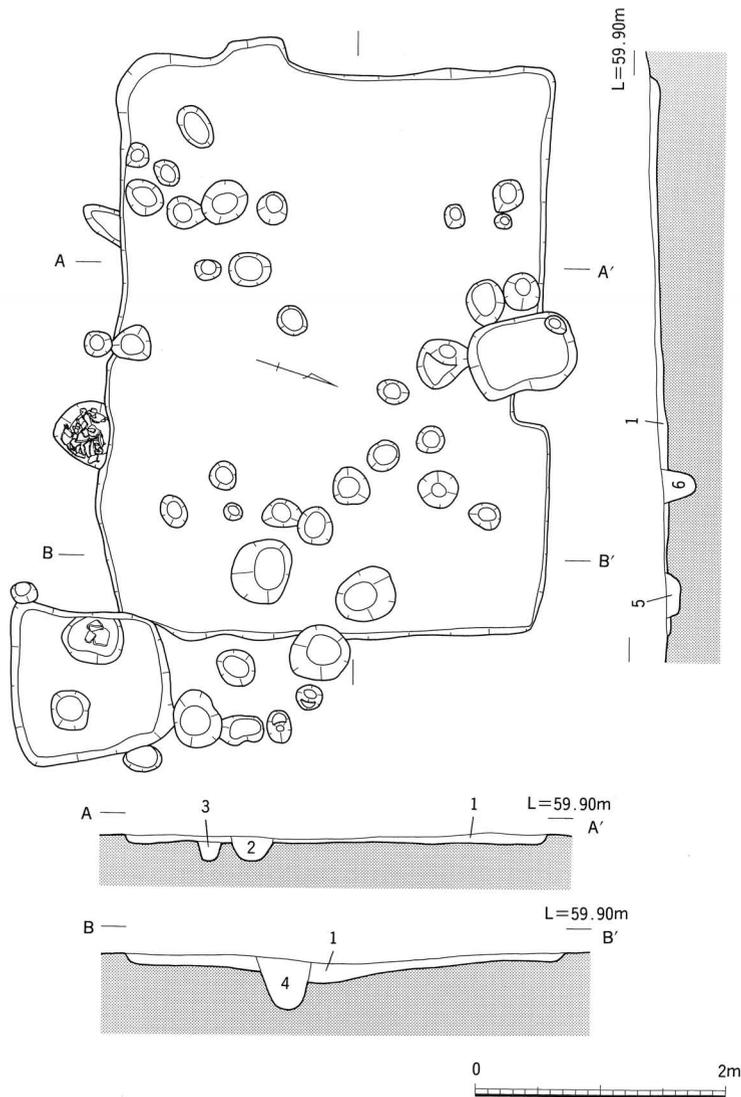
161



8号不明遺構 (S X 1008) (第149図)

F調査区S・F-16・17グリッドから検出され、調査区の北側に位置する不明遺構である。本遺構は北壁中央部付近をS K 1151に切られ、第148図 S X 1007出土遺物実測図南東部分はS K 1152と重なり合う状況で検出されたが切り合い関係は明瞭ではない。平面プランは東西方向に長い長方形を呈しているが、東壁側は余り明瞭ではない。規模は、長軸450cm、短軸330cm、床面は凹凸が認められ、深さは浅いところで5cm、もっとも深いところで20cmを測る。壁面は急斜面である。本遺構の特徴的な点は、北壁の中央部分に方形の未掘削部分を残すことである。S K 1151に切られ、全容は不明であるが、現状で幅30cm、長さ24cmにわたる部分が確認されている。炉跡は確認されていない。本遺構はピットが19基検出されているが、ピット内からは時期認定可能な遺物は認められない。ピットは複数の時期にわたると思われる。内部構造については不明である。

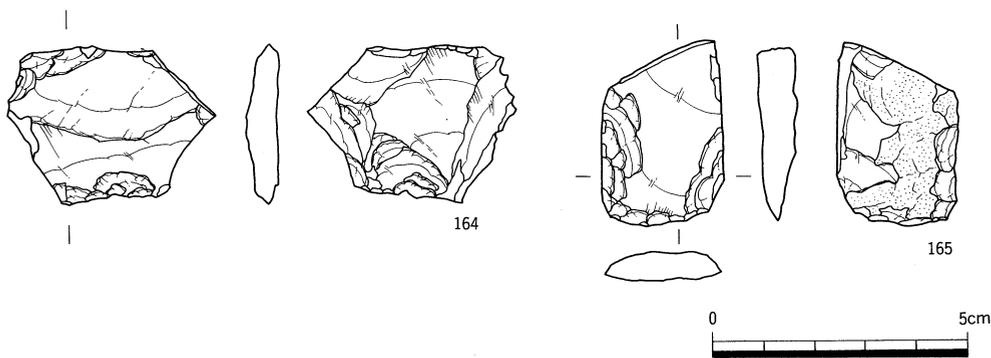
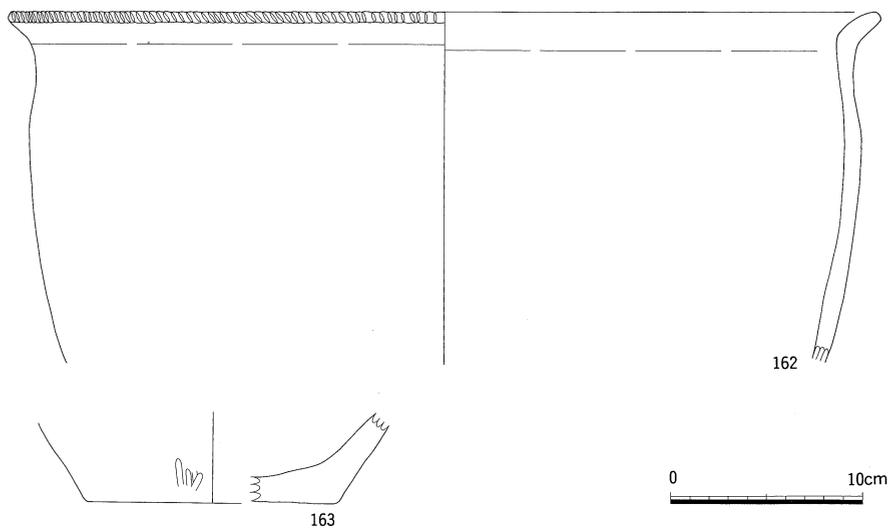
本遺構の南壁のやや東側部分からは土器だまりが検出されている。規模は長軸54cm、短軸48cmのピット状遺構に、壺形土器 4 点と甕形土器 3 点、弥生土器細片132点が折り重なるよう



- 1 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土
- 2 灰黄褐色10YR5/2砂質土
- 3 にぶい黄褐色10YR4/2砂質土
- 4 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土
- 5 暗褐色10YR3/3砂質土
- 6 暗褐色10YR3/3砂質土(炭化物少々含む)

第149図 S X 1008実測図

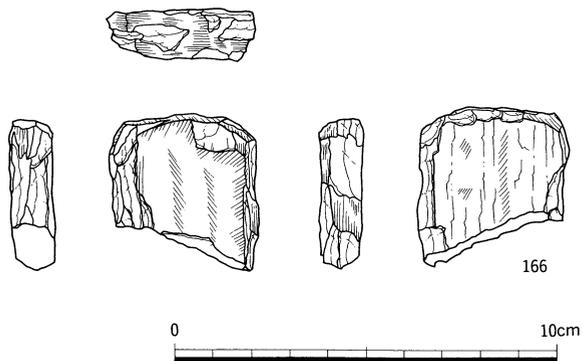
に出土している。S X 1008との切り合い関係は明瞭ではなく、前後関係ははっきりしない。土器だまり出土遺物はS K 1152出土遺物と接合しており、両者に何らかの有機的關係があるものと思われる。



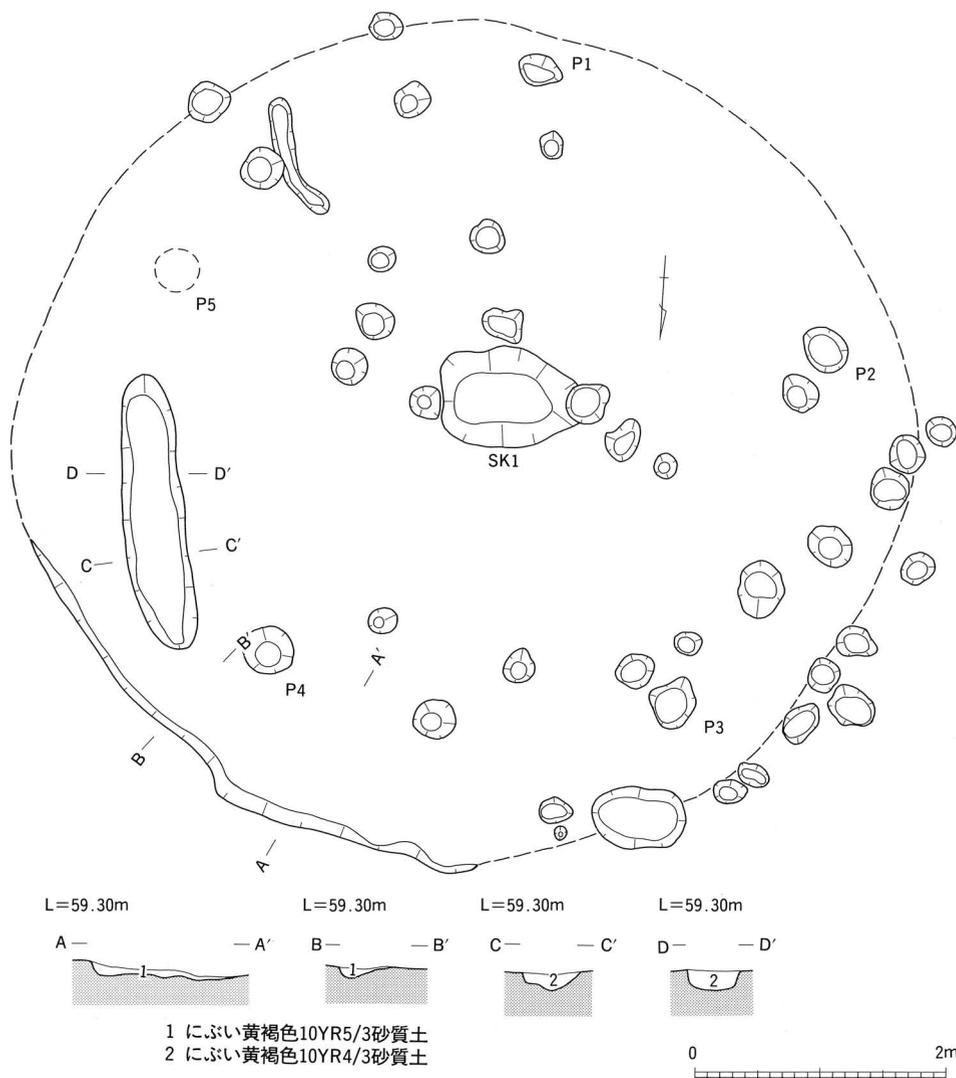
出土遺物（第150図）

出土遺物は壺形土器1点、甕形土器1点、高杯形土器1点、弥生土器細片112点、土師器甕6点、土師器細片4点、須恵器細片3点、瓦質土器細片1点、サヌカイト片6点、結晶片岩片7点が出土した。遺物は細片のため、辛うじて実測可能な遺物5点を図化した。

162は甕形土器の口縁部の破片である。口縁端部を方形におさめ、口縁部は「く」の字状に外反する。体部はや



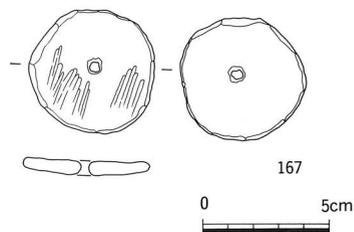
第150図 S X 1008出土遺物実測図



第151図 S X 1015実測図

や内湾しながら立ち上がる。口縁端面は刻目文が施されている。163は甕形土器の底部である。底部は平底を呈し、体部に向かい直線的に立ち上がる。体部外面はタテヘラミガキで調整される。

164・165はサヌカイト製の楔形石器である。薄手の剥片を素材として用いる。164は下端部両面に調整加工を施している。165は一方の端辺に裁断面を持つ。下端部に調整加工を施し、刃部を作出する。



第152図 S X 1015出土遺物実測図

166は結晶片岩製の偏平石斧の上部の破片である。薄手の剥片を素材とし、下部を欠損している。両面に研磨痕が認められる。

15号不明遺構（S X 1015）（第151図）

G調査区P-2グリッドから検出され、調査区のほぼ中央に位置する円形の竪穴状遺構である。南側はS X 1016・S X 1017が検出されている。本調査時に遺構面を削平しており、北側に一部壁面を残すのみで、他は推定ラインが引かれている。現況で規模は長軸606cm、短軸420cm、深さは残存部で12cmを測る。遺構内中央部には長軸90cm、短軸80cmの土坑が位置する。土坑内は炭化物・焼土が多量に混入していることから、炉に当たると思われる。土坑内からは紡錘車が1点出土している。またその土坑の両端には長軸34~26cm、短軸30~23cm、深さ28~13cmのピットが土坑を切る形で検出されている。遺構内からは27基のピットが検出されたが、主柱穴はP-1からP-5までの5本支柱と思われる。P-5は削平を受けており検出できなかった。柱心間距離は、P-1からP-2が318cm、P-2からP-3は312cm、P-3からP-4は318cm、P-4からP-5は300cm、P-5からP-1は300cmを測る。また遺構内からは長軸216cm、短軸48cmを測る土坑が北東側から検出されている。床面はやや凹凸をもち、壁面は急斜面である。埋土はにぶい黄褐色1層である。本遺構に付随する物かどうかは不明である。

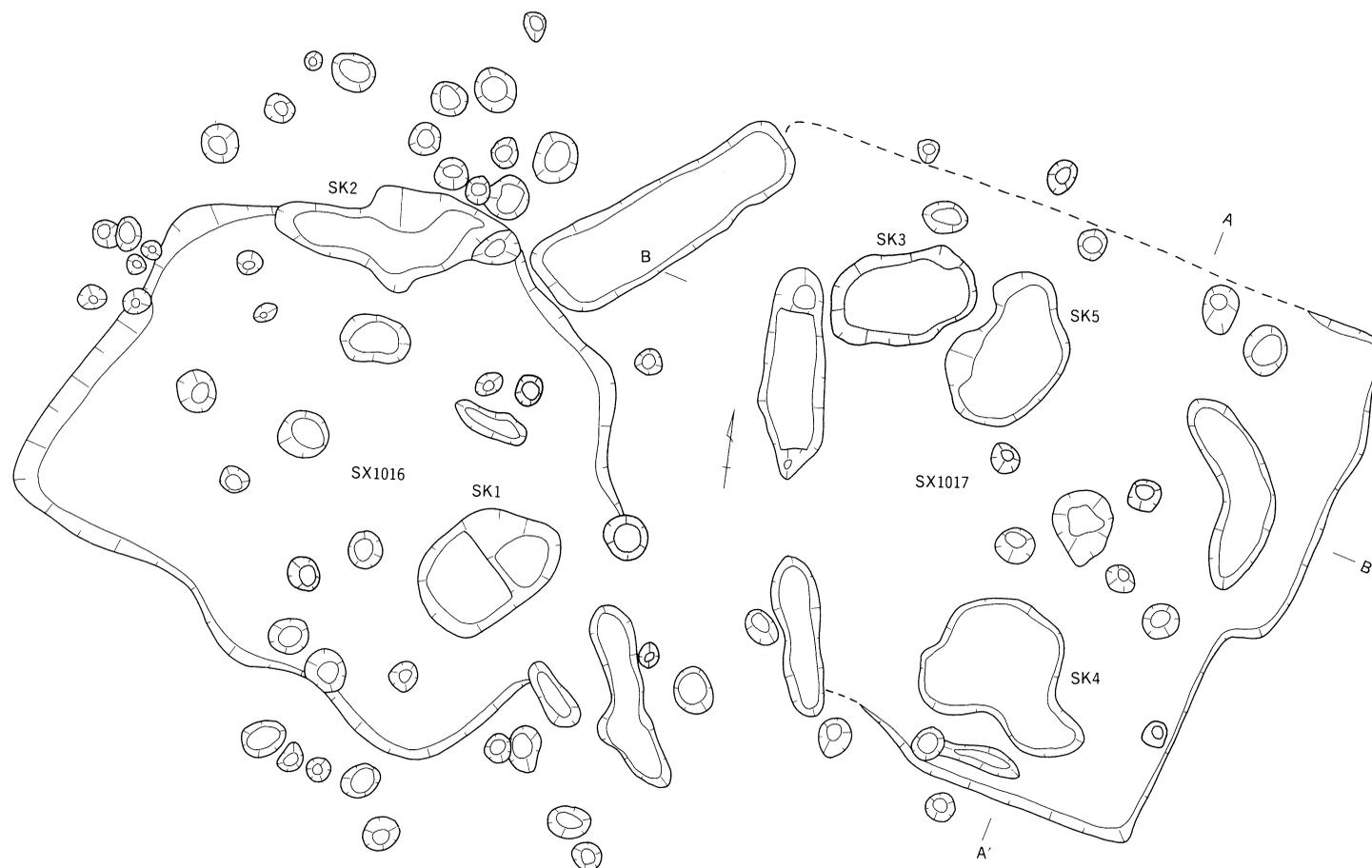
出土遺物（第152図）

出土遺物は弥生土器細片17点、土師質土器皿1点、土師質土器鍋1点、土師質土器細片5点、サヌカイト片1点、砥石が2点出土している。遺物は細片がほとんどであり実測可能遺物は1点である。

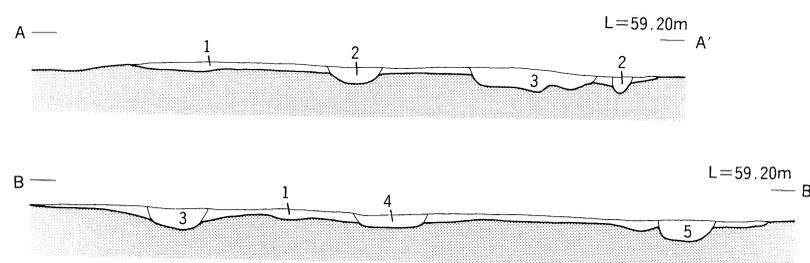
167は紡錘車である。中央部は穿孔が認められる。外面にヘラミガキの痕跡が認められ、土器の転用品と思われる。

16号不明遺構（S X 1016）（第153図）

G調査区のほぼ中央、N・O-18・19グリッドから検出された竪穴状遺構である。S X 1015の南側に位置し、東側部分はS X 1017と不明瞭に切りあった状況で検出されている。本調査時に削平しすぎたために、平面プランは不整形形状か不整円形状を呈するものと思われる。規模は現状で長軸450cm、短軸390cmを測る。周壁は南側では明瞭に確認されたが、北側と西側では部分的にしか確認できなかった。遺構内からは土坑が2基確認されている。南側土坑（SK 1）は平面プランは不整形形状を呈し、長軸127cm、短軸84cmを測り、床面には凹凸がみられ最深部で31cmを測る。壁面は急斜面である。北側に位置する土坑（SK 2）は、平面



- 1 暗褐色10YR3/4砂質土
- 2 灰黄褐色10YR5/2砂質土
- 3 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土
- 4 黒褐色10YR3/2砂質土
- 5 暗褐色10YR3/3砂質土



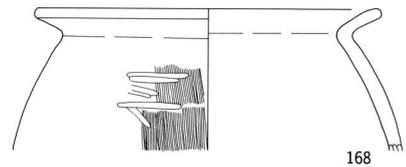
第153図 SX1016・1017実測図



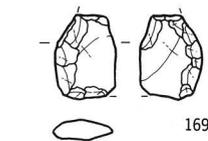
プランは隅丸不整楕円形状を呈している。規模は長軸205cm、短軸88cmを測り、床面には凹凸が認められ最深部で15cmを測る。壁面は急斜面である。これらの土坑の埋土には炭化物・焼土の混入が認められず、炉跡とは考えにくい。また遺構内には炭化物及び焼土痕が認められず、炉跡らしき物は確認できなかった。遺物は柱穴・埋土より弥生土器細片が出土しているが、摩滅が激しく時期決定は困難であり、弥生時代としか言えない。

17号不明遺構 (S X 1017) (第153図)

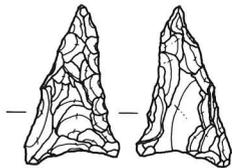
G調査区のほぼ中央、N・O-20・21グリッドから検出された竪穴状遺構である。北側にはS X 1015が位置し、西側ではS X 1016と不明瞭な切り合い関係を呈している。本調査時に削平されているため全体の形状は、はっきりしないが平面プランは方形状を呈するものと思われる。規模は現況で長軸480cm、短軸450cmを測る。周壁は東側は450cm、南側では240cmにわたり明瞭に残っている。東側部分では若干周壁の痕跡が認められ、推定ラインが引かれている。遺構内からは土



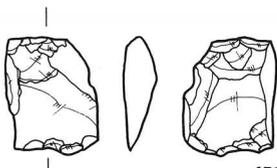
0 10cm



169

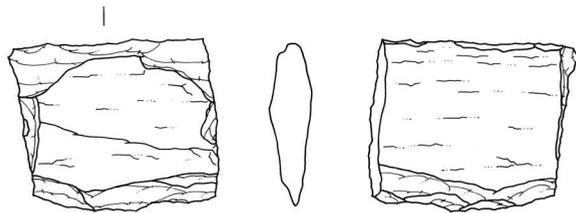


170



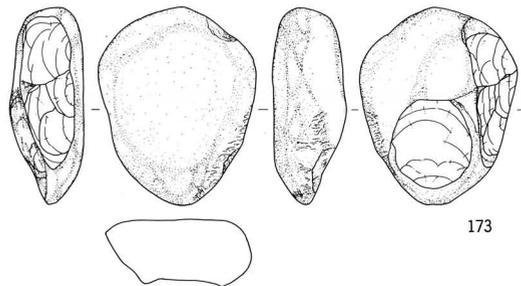
171

0 5cm



172

0 5cm



173

0 30cm

第154図 S X 1017出土遺物実測図

坑が6基確認されている。北西側に位置する土坑(SK3)は、平面プラン隅丸不整形を呈している。規模は長軸124cm、短軸74cm、深さ19cmを測る。SK3埋土中には、炭化物が多量に混入しており炉跡と思われる。また南東に位置する土坑(SK4)は、平面プラン隅丸不整形を呈し、規模は長軸152cm、短軸127cm、深さ16cmを測る。SK4からも同様に、炭化物が埋土に混入し、土坑の西側には焼土痕が確認されている。本土坑も炉跡である可能性が考えられる。北東側の炉の東側の土坑(SK5)は、平面プランは隅丸不整形を呈し、規模は長軸152cm、短軸127cmを測り、床面には凹凸が認められ最深部で19cmを測る。埋土は鈍い黄褐色砂質土であるが、遺構中央部より北側部分には10cm大の砂岩礫が認められる。ピットは遺構内から13基検出されたが、規律性は認められない。

出土遺物 (第154図)

出土遺物は壺形土器3点、甕形土器6点、弥生土器細片146点、土師質土器皿5点、土師質土器細片22点、打製石庖丁1点、石鏃1点、楔形石器1点、台石1点、サヌカイト片40点、結晶片岩片2点、砂岩1点出土している。遺物は細片が多く辛うじて実測可能な遺物は7点である。

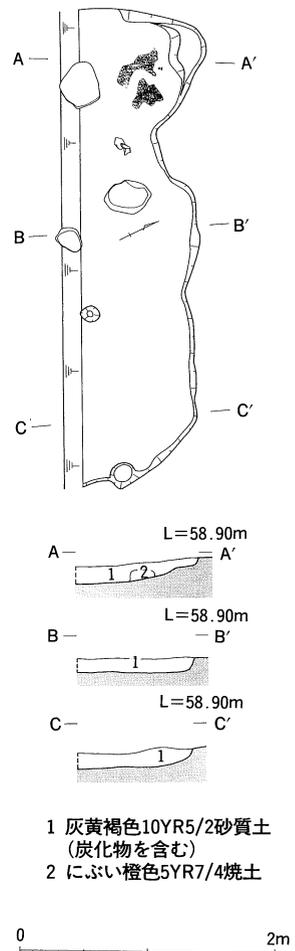
168は甕形土器の破片である。口縁端部を方形におさめ、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部は内外面ヨコナデ、体部外面はタテハケメの後、粗いヨコヘラミガキで調整される。

169・170はサヌカイト製の石鏃である。169は先端部と基部を欠損している。縁辺部には粗い調整加工が施されている。両面共に一次調整痕が残されている。170は縁辺部に粗い調整が施されている。基部には浅い抉りが見られ凹基式の石鏃と思われる。

171はサヌカイト製の楔形石器である。横長の剥片を素材として用い、一方の縁辺部に裁断面を持つ。

172は結晶片岩製の石庖丁である。両端を欠損しているが、一方の短辺両面に調整加工を施し刃部を形成している。

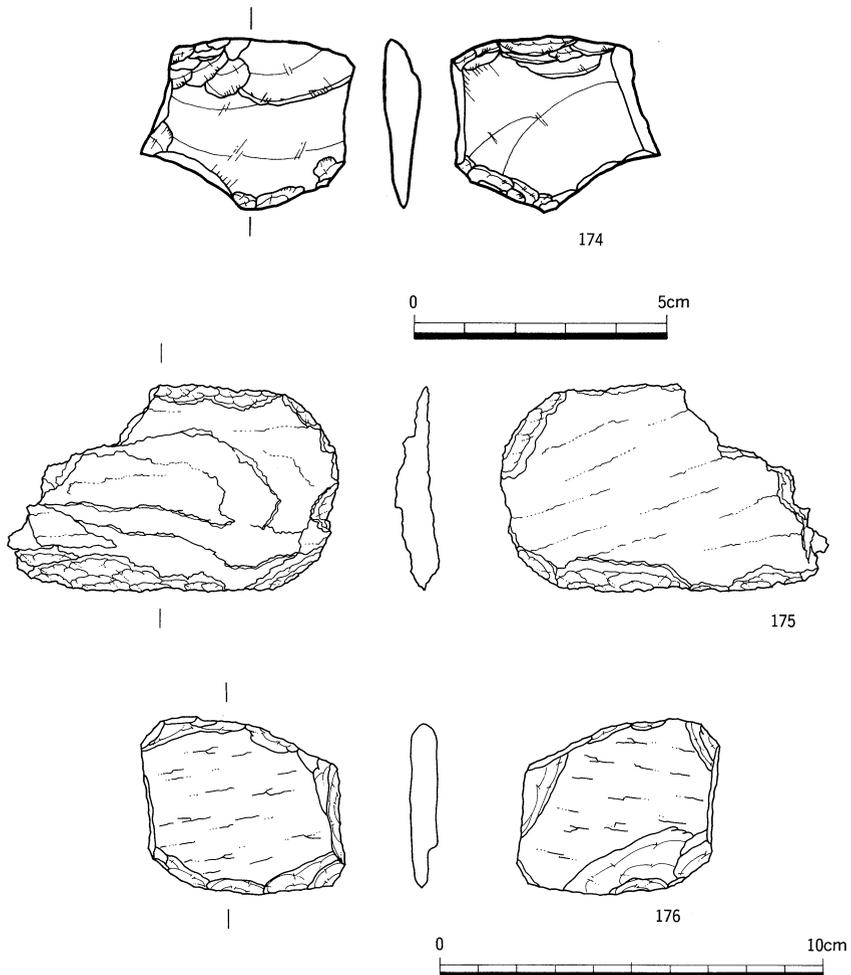
173は砂岩製の砥石である。一部縁辺を欠損しているが、ほぼ全面に研磨痕が認められる。



第155図 S X 1021実測図

21号不明遺構（S X 1021）（第155図）

G調査区南端に位置し、N・O-19・20グリッドから検出された不明遺構である。東側にはS K 1202が位置する。遺構の南側は生活用道路の為調査が行われず、全体の形状は不明である。調査当時S X 1021とS K 1201が切りあった状況で検出されたが、土層の堆積状況に差異が認められず、一体の物としてあつている。規模は現況で長軸220cm、短軸60cm、深さ12cmを測る。床面はほぼ水平であり、壁面はやや急斜面である。埋土は灰黄褐色砂質土で、粘性を持ち、炭化物を含んでいる。床面西側壁付近からは長軸42cm、短軸36cmにわたって焼土塊が検出されている事より、地床炉の可能性も考えられる。また床面直上からは砂岩製の砥石が3点、遺構中央より西側部分で検出されている。柱穴は東壁と中央付近で2基確認されている。規模は長軸18cm、短軸12cm、深度20cm前後を測る。柱穴は規律性が見られず、上部構造については不明である。遺物は床面直上より出土している。



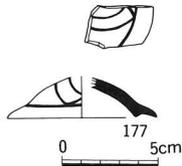
第156図 S X 1021出土遺物実測図

出土遺物 (第156図)

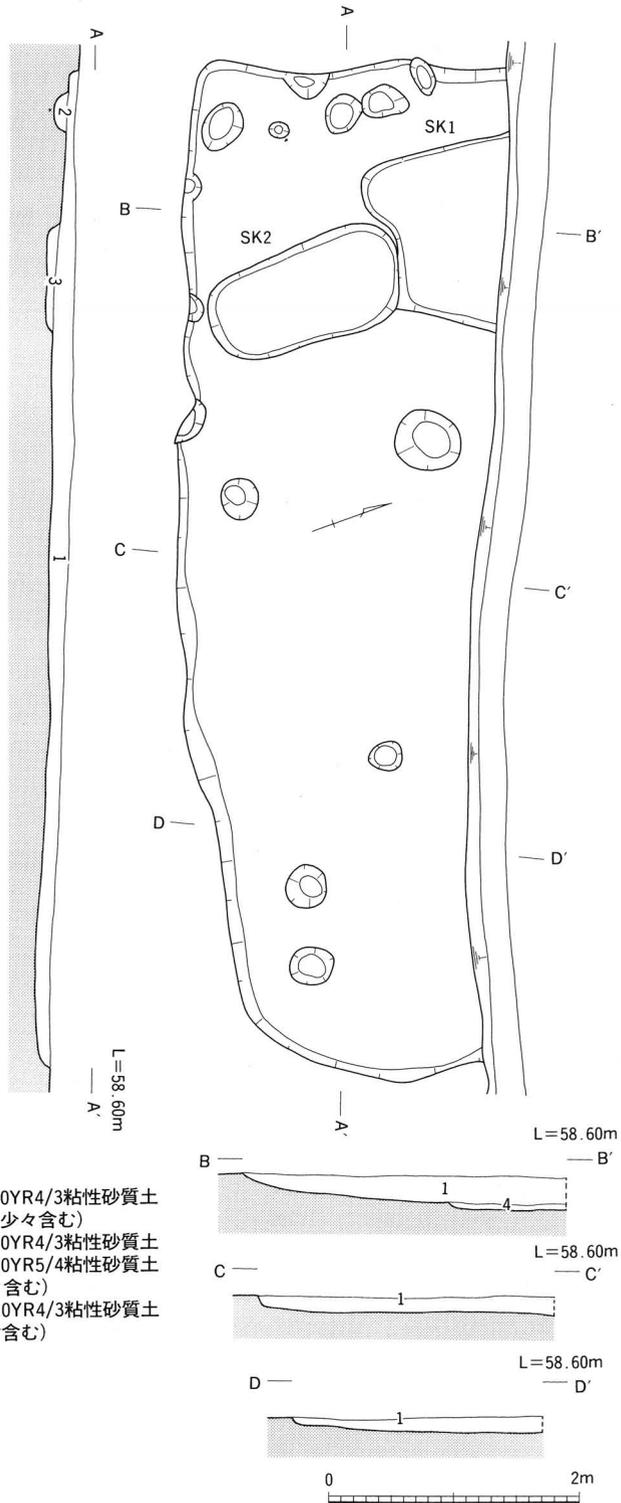
出土遺物は弥生土器細片42点、土師器細片4点、土師質土器細片4点、打製石庖丁2点、スクレイパー1点、砥石2点、サヌカイト片1点、砂岩1点、石英片1点が出土している。遺物は細片が多く実測可能石器3点のみである。

174はサヌカイト製のスクレイパーである。薄手の剥片を素材として用い、両側縁両面に調整加工を施している。

175・176は結晶片岩製の打製石庖丁である。薄手の剥片を素材として利用している。両側縁両面に粗い調整加工を施し刃部を作出している。175は端辺に挟りが認められず、一端を欠損している。176は両端部を欠損している。



第158図 S X 1022出土遺物実測図(1)



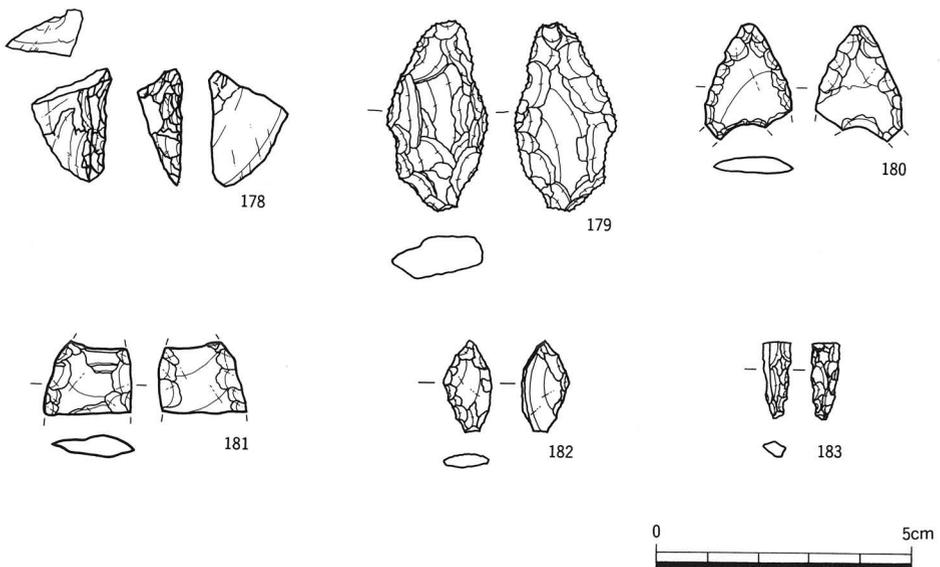
第157図 S X 1022実測図

22号不明遺構 (S X 1022) (第157図)

D調査区K・L-19・20・21グリッドから検出され、調査区の北東端に位置する不明遺構である。北西側にS X 1028・1029が、南側にはS K 1217が位置している。北側部分は生活用道路があり調査が行われていないため、遺構の規模・形状は不明である。規模は現状で長軸820cm、短軸250cm、深さは25cmを測り、床面は水平を呈している。壁面はやや急斜面である。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、粘性をもっている。遺構中央部より西側では東側と比べると、灰黄褐色粘性砂質土が認められ、ふたつの遺構が切りあっている可能性も考えられる。遺構内からは土坑2基と柱穴14基が確認されている。S K 1は北側部分が検出できておらず、平面プランは不明であるが、規模は現状で長軸138cm、短軸114cmを測り、床面は水平である。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、粘性をもっている。S K 2はS K 1の南側に位置し、隅丸方形の平面プランを持つ。規模は長軸150cm、短軸78cmを測る。柱穴は14基が検出されているが、規則性は認めがたく本遺構に伴う物かどうか不明である。

出土遺物 (第158・159図)

出土遺物は弥生土器細片80点、須恵器細片1点、土師質土器皿2点、土師質土器杯2点、土師質土器小皿2点、土師質土器鍋14点、須恵質土器細片2点、瓦器椀1点、青磁壺1点、輸入貿易陶磁細片1点、ナイフ形石器1点、スクレイパー1点、楔形石器1点、石鏃3点、石錐1点、サヌカイト片9点、結晶片岩8点、石英2点が出土している。実測可能遺物は、7点である。



第159図 S X 1022出土遺物実測図(2)

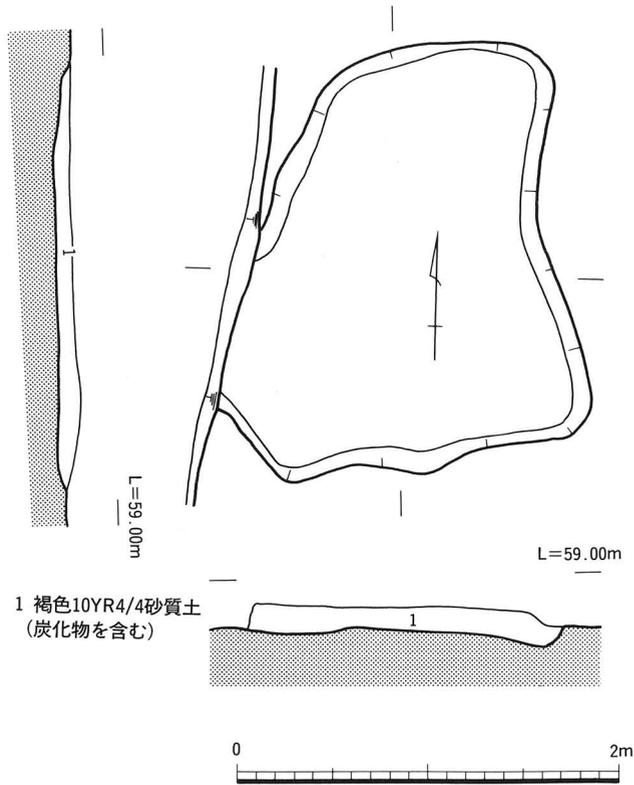
177は青磁小壺である。片彫りにより蓮弁文らしき文様を持つ。

178はナイフ形石器である。器体の上半部2/3を欠損している。石材はサヌカイトを使用している。背面はネガティブな剥離面1枚で、腹面はポジティブな剥離面で構成される。打面部は素材である剥片の側縁に腹面側より調整加工が施されている。

179~182はサヌカイト製の石鏃である。179は両面にわたって丁寧な調整加工が施されており、最大幅が基部に近い位置にあり凸基式に当たると思われる。180は縁辺部に調整加工を施しているが、両面に1次剥離痕を残している。

基部には抉りの部分が認められ凹基式と思われる。181は基部と先端部を欠損しており、縁辺部のみに調整加工を施し両面に1次剥離痕を残している。182は縁辺部に粗い調整加工を施し、両面には1次剥離痕が残っている。最大幅は体部上位に位置しており、凸基式と思われる。しかし調整加工の粗さなどから未製品とも考えられる。

183はサヌカイト製の石鏃である。上部は欠損して全体の形状は不明であるが、丁寧な調整加工が施されている。

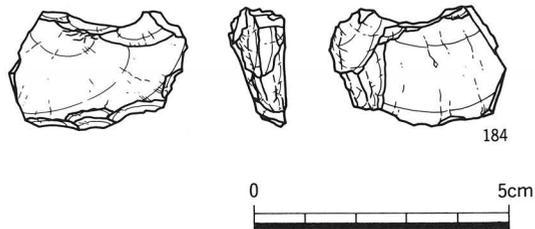


第160図 S X 1024実測図

24号不明遺構 (S X 1024)

(第160図)

D調査区の西端中央部に位置し、J-17・18グリッドから検出された不明遺構である。北側はS X 1023、南側にはS K 1315が検出されている。西側は調査区外に当た



第161図 S X 1024出土遺物実測図

り調査されておらず、全体の規模は不明である。規模は現状で長軸230cm、短軸170cmを測る。床面には凹凸は認められず、深さ14cmを測る。壁面はやや急斜面である。埋土は褐色砂質土で炭化物を少し混入している。出土遺物は埋土中より出土している。

出土遺物 (第161図)

遺物は、弥生土器細片18点、土師質土器皿1点、土師質土器細片21点、輸入貿易陶磁細片1点、サヌカイト片4点、結晶片岩3点、スクレイパー1点出土している。しかし遺物は細片が多く実測可能遺物は1点のみである。

184は剥片である。背腹両面はネガティブな剥離面で構成される。石材はサヌカイトが使用されている。背面側下縁部には腹面側より急斜度の調整加工が施されており、スクレイパーの可能性も考えられる。

柱穴出土遺物

29号ピット (S P 1029) (第162図)

A調査区G-10・11グリットより検出された柱穴である。平面プランは楕円形状を呈する。規模は長軸32cm、短軸25cm、深さ32cmを測る。埋土は褐色砂質土である。遺物は上層より出土している。

出土遺物 (第163図)

185は甕形土器の底部である。底部は平底を呈し、体部は直線的に立ち上がる。体部外面はタテヘラミガキで調整する。

186は結晶片岩製の円柱状石斧である。薄手の剥片を素材として用い、側縁部両面に調整加工を施している。

31号ピット (S P 1031) (第164図)

187は結晶片岩製の叩石である。下部に敲打痕が認められる。

48号ピット (S P 1048) (第164図)

188は結晶片岩製の石庖丁である。素材として薄手の剥片を使用し、両側縁両面に調整加工が施されている。一端を欠損している。端部に挟りは認められない。

59号ピット (S P 1059) (第164図)

189は甕形土器の破片である。口縁端部は丸くおさめ、口縁部は外方に屈曲する。体部はやや内湾しながら立ち上がる。口縁部は内外面ヨコナデで調整する。体部外面は頸部から体部中位にかけてタテハケメ、体部中位からタテヘラミガキで調整する。